

北原白秋

邪宗門

（藪野直史作製・正規表現版）

「やぶちゃん注」北原白秋（明治一八（二八八五）年～昭和一七（一九四二）年）の処女詩集「邪宗門」のPDF縦書（ルビ附）正規表現版である。

使用底本は所持する昭和五八（一九八三）年刊の日本近代文学館刊行・名著復刻全集編集委員会編・ほるぷ発売の「名著復刻 詩歌文学館 紫陽花セット」内の、明治四二（一九一〇）年三月十五日易風社発行（印刷は博文館印刷所で同年三月十日）の同詩集初版本を用いた。但し、加工用データとしてなお、「青空文庫」の新字旧仮名の、[こちら](#)にある、kompass氏入力・今井忠夫氏校正になるベタ・テキスト・データを加工用に使わせて貰った。

私は、本詩集は近代詩集の中でも屈指の美麗な装幀（装幀と主挿画は石井柏亭。他に一作と彫版は山本鼎）と思っている。四六判の角背上製表紙で、アンカット装（セット購入以来、三十七年、この本に関しては現在もアンカットのままである。カットしながら電子化する）、箱型包函入りである。北原白秋、満二十五の春の出版であった。

本テキストでは、**詩篇（及び挿入された辞等）は鑑賞の便を考えて、贅沢に、原則、一篇一篇を改ページした。そのため、ページによっては有意な空白が一部に生じているので注意されたい。**

ブログ版分割版（二〇二〇年十一月二十三日完遂）では、ヴィジュアルにも楽しんで戴くため、底本の装幀が判る画像及び挿絵の総てと、画像が必要と認めた一部の本文の画像も掲げたが、ここでは、それらの画像を概ね、そちらで公開した画像へリンクさせる形で処理した。これは画像挿入に面倒を嫌ったのではなく、大型画像の場合、PDF縦書版では、却って細部が見難くなるからである。なお、これらをHTMLにする気はない。それは単純にルビ・タグの処理が面倒だからである。

踊り字「く」は、縦書でも気持ちが悪くなるので（私はこの踊り字が生理的に嫌いである）、正字化した。その点でのみ正規表現ではないのはお許しあれ。

禁欲的に注を附す。一部は若い読者を意識して老婆心で注した箇所もある。【二〇二〇年十一月日公開 藪野直史】

邪宗門

北原白秋

「やぶちゃん注」[函（表）](#)。右入れ。画像面のみ平ラベルで書名（ゴシック）と作者（明朝）が右から左に書かれてある。口の上部には向こう側と対で、御覧の通り、本体を抜き出すための、対で釘隠しの花形飾り金具の半片のように見えるカットが入っている。釘隠しと判じたのは「門」に掛けているかと判じたからである。背と裏側表面には何もないので画像は添えない。」

詩集 邪宗門

北原白秋

邪宗門

北原白秋

「やぶちゃん注…[表紙・背・裏表紙及び天](#)（天金）。前の一行は背の（「詩集」は右から左に横書き）、後の二行は表紙の彫字（手書き文字）。孰れも金箔押し。聖書のような強い紅色。表紙は中央に金箔線が入り、右左手に絵の一部（らしきもの）が下地となっていて、そこに右から左に書名と著者名が入る。全く推測であるが、この絵は雰囲気から推すと、本書の奥附の前にある装丁や挿入画等のリストの内、『挿畫』と記されてある石井柏亭の「澆季」（げうき（ぎょうき）…「澆」は「輕薄」、「季」は「末」の意で、第一義は「道德が衰えて乱れた世・世の終わり・末世」である）であろうと推定する（後の「邪宗門扉銘」に吉田精一氏の引用を載せたが、それが私の推理を著しく支持して呉れている）。また、表紙右下には金箔押しでマークが示されている。これはカトリック教会で古くから用いられてきたもので、「IHS」（ギリシャ語の「イエス」≡「IHCOYΣ」の綴り字の最初の三文字でイエス・キリストのシンボル）の上にギリシャ十字が配されており、下方の三本のマークは、恐らくはヨーロッパで広く言う「chi-rho」（キー・ロー。XとPとのモノグラム。「メシア」をギリシャ語で「ΧΡΙΣΤΟΣ」（クリストス）と表現する）の簡略形と思われる。なお、後の「邪宗門扉銘」に吉田精一氏の引用によれば、このマークは長崎の『南蠻寺』の『鐘』に記された『紋章』であるとある。』

EX・LIBRIS

HK

「やぶちゃん注…[見返し](#)。ご覧の通り、「HK」は合字となっているが、表現出来ない。左の遊びの表面上部にカメを拝した蔵書票を模した挿絵。「EX LIBRIS」（エクス・リブリス）は「誰彼の蔵書から」という意味のラテン語で西洋で流行った蔵書票の決まり文句。「HK」は言わずもがな、北原白秋のイニシヤル。作者は先のリストから石井柏亭で、標題を『エツキスリブリス』と記してある。「エツキス」は「エスキース」（フランス語…*esquisse*）で広く「スケッチ」のことを指す（但し、語源的には「下絵」の意である）。」

邪宗門

北原白秋著

四十二年三月

東京

易風社版

「やぶちゃん注…扉。石原柏亭の門の絵の中に以上が右から左へ印刷されてある。」

父上に献ぐ

「やぶちゃん注…父北原長太郎への献辞。北原家は江戸以来、栄えた商家（「油屋」或いは「問屋」と号した海産物問屋）で、当時は主に酒造を営んでいた。この一目見るなり、非常に贅沢な詩集（定価は一円。信頼出来る換算値で現在の一万一千円弱相当の高価な一冊である）は、総て父からの送金による自費出版であった。

以下は、その裏、次の「邪宗門扉銘」（左ページ）のある右ページにある。ポイントは本文活字とは相対的な意味で極く小さい。再現はしていないが、改行はその通りにした。「邪宗門扉銘」は詩篇本文と見なし、次のページに送った。」

父上、父上ははじめ望み給はざりしかども、

兒は遂にその生れたるところにあこがれ

て、わかき日にかくは歌ひつづけ候ひぬ。

もはやもはや咎め給はざるべし。

ここ過ぎて曲^{メロディア}節の悩みのむれに、
 ここ過ぎて官能の愉樂のそのに、
 ここ過ぎて神経のにがき魔睡に。

「やぶちゃん注…かく標題された序詩。「扉銘」は「ひめい」。所持する昭和二八（一九五三）年新潮文庫刊の吉田精一「日本近代詩鑑賞 明治篇」の「北原白秋」で、この「邪宗門扉銘」について、『これはダンテが「神曲」の地獄の門の扉銘に模したのであらう』とあり、また、[今野真二氏の論文「イメーヂの連鎖―詩的言語分析の覚え書き―」](#)（清泉女子大学人文科学研究紀要 第三十七号・二〇一六年三月。PDFでダウン・ロード可能）の注（6）に、『周知のように、この「邪宗門扉銘」はダンテ『神曲』『地獄界』第三歌冒頭を模したものと思われる。河村政敏は『北原白秋の世界―その世紀末的詩境の考察』（一九九七年、至文堂）において「原詩を、当時愛読していた上田敏の『詩聖だんて』（明33）か、森鷗外の『即興詩人』（明35）か、いや、おそらくはその双方に学んだのであらう」（二十九頁）と述べている。『詩聖だんて』には「われ過ぎて、歎のまちに、われ過ぎて、とはの悩に、われ過ぎてほろびの民に」（二二〇頁）とあり、『即興詩人』には「こゝ過ぎて うれへの市に こゝ過ぎて 歎の淵に こゝ過ぎて 浮かぶ時なき 群に 社 人は入るらめ」（上巻八十頁）とある。「邪宗門扉銘」について、河村政敏（一九九七）は「いうまでもなく、『神曲』―「地獄界」第三歌冒頭のパロディである。いずれパロディであるから、「曲節の悩み」「官能の愉樂」「神経のにがき魔睡」などといったところで、特別な意味があるわけではなく、要するにそうした語感を借りて、感覚的・官能的な顔唐世界への志向を語ったまでであった」（二十六頁）と述べている。「特別な意味があるわけではなく」「語感を借りて」「語ったまでであった」はいずれも河村政敏の評価がかならずしもたかくはないことを思わせる。あるいは石丸久は「北原白秋における象徴意識―とくに『邪宗門』系列の場合―」（一九八三年、早稲田大学『国文学研究』七十九号）において、「邪宗門扉銘」について「絢爛たる詞宴の謳いあげにすぎなかった」と述べ、さらに「無思想性」という表現も使う。「特別な意味があるわけではなく」と通うみかたは、白秋の同時代にもなされていた。木下杢太郎は「明治末年の南蛮文学」において、「北原白秋君、長田秀雄君の家などに集り夜は鴻の巣といふ小さい西洋料理屋などに行き、ひるまのうちに読んだものを醺酔させて家にかへつて詩に作りました。然しわたくしは寧ろ材料を集める方で、どうもうまくそれが詩に醺酔しませんでした。北原白秋君はそんな語彙を不思議な織物に織り上げました。白秋君の詩には思想的連絡がなく、所謂言葉のサラダといふもので、我々は之を刺繍の裏面の紋様にたとへました。かういふ風なわけであれわれの南蛮趣味は学問的でも、考証的でも、また純粹のものでもなく、専ら語彙の集積でした。是れは当時日本に紹介せられたパルナシアン^{パルナシアン}の詩、サムボリス^{サムボリス}トの詩からも暗示を受けたわけです。上田敏氏の『海潮音』、蒲原有明氏の『春鳥集』がわれわれに

大きな影響を与へました。も一つはフランスの印象派に対するわれわれの偏愛が、その流儀を詩の上で表現せしめたといふこともあるのです。南蛮紅毛趣味、江戸浮世絵趣味、印象派の様式―さういふものがわれわれの南蛮文学の基本調でした」と述べている。ここには「思想的連絡がな」い「言葉のサラダ」という表現がみられる。こうした木下杢太郎の発言などが影響を与えているかとも思われるが、稿者は、詩に「特別な意味がなければならぬ」という「みかた」もさまざまな「みかた」の中の一つの「みかた」にすぎないのではないかと考える』と述べておられる。さらに、ここで本詩集の南蛮趣味の震源の正体を明かしておくと、吉田氏の前掲書に、明治四〇（一九〇七）年夏、『與謝野寛を中心に、新詩社同人、白秋・杢太郎・長田秀雄・吉井勇等の催ほした九州旅行に於て、彼等は切支丹伴天連の遺跡を見て長崎から天草にわたつて、東西文明の奇妙な混淆のあとに深く感動した。南蠻の異聞、ギヤマン、香料、異酒、奇鳥、更紗等は、何れも彼等の詩的感激の對象であつた。杢太郎の「長崎ぶり」「棧留篇」「あまくさ」等の詩は、白秋の邪宗門中「天草雜詠」の名の下に收めた十一篇の詩と共に、この旅行の收穫であつた。詩集「邪宗門」の題名も亦こゝから來た。のみならずこの旅行が當時の學界の機運と相まつて、杢太郎に切支丹の文學や歴史に關する研究熱をそゝらせ、或は彼自身及び吉井勇等の數々の切支丹に取材した戯曲の生産となり、下つては芥川龍之介の同種の佳作を日本文壇に残す機縁をなした。（この旅行を四十一年夏と、木下杢太郎自身が「食後の唄」序や、又改造社の日本文學講座に書いてゐるのは思ひ誤まりである。それに從つて論を立ててゐる人もあるので、この機會に注意して置く。）明治末期の學界に於ける南蠻熱も、かやうな時代精神の所産だつたといへよう。』以上の簡粗な説明によつて、「邪宗門」の興味や志向がどこにあつたかを知るに足りるであらう。「邪宗門」は装幀に於ても異様な美しさをもつてゐた。血のやうな赤クロスに南蠻寺鈍鉦の紋章を金で押し、一方に外光に狂つた蝮・毒草・麝香猫及び禽獸歡樂の更紗模様をはぎつけた、「不可思議にして一種莊嚴なる怪しさ」（「邪宗門」三版本例言）をもつてゐた』とあるのが、それである。」

詩の生命は暗示にして單なる事象の説明には非ず。かの筆にも言語にも言ひ盡し難き情趣の限なき振動のうちに幽かなる心靈の歎歎をたづね、縹渺たる音樂の愉樂に憧がれて自己觀想の悲哀に誇る、これわが象徴の本旨に非ずや。されば我らは神秘を尙び、夢幻を歡び、そが腐爛したる頽唐の紅を慕ふ。哀れ、我ら近代邪宗門の徒が夢寢にも忘れ難きは青白き月光のもとに歎歎く大理石の嗟嘆也。暗紅にうち濁りたる埃及の濃霧に苦しめるスフィンクスの瞳也。あるはまた落日のなかに笑へるロマンチツシユの音樂と幼兒磔殺の前後に起る心狀の悲しき叫也。かの黃臘の腐れたる絶間なき痙攣と、ギオロン³の三の絃を擦る嗅覺と、曇硝子にうち噎ぶウヰスキイの鋭き神經と、人間の腦髓の色したる毒艸の匂深きためいきと、官能の魔睡の中に疲れ歌ふ鶯の哀愁もさることながら、仄かなる角笛の音に逃れ入る緋の天鷲絨の手觸の棄て難きよ。

「やぶちゃん注…自序。標題はない。ポイントはやはりごく小さい。句点の後は有意な字空けがあるので、見かけの印象通りに、空けておいた。

「尙び」は「たふとび」と読む。「貴ぶ」に同じい。

「夢寢」「むしん」と音読みしておく。

「歎歎く」「すすりなく」。前の方は音で「ききよ」（現代仮名遣「ききよ」）。

「埃及」は「えじぶと」エジプトであるが、本文詩篇内で同単語に平仮名でルビを振っているの、かく示した。

「黃臘」「わうらふ」（おうろう）或いは「くわうらふ」（こうろう）で、蜜蜂の巣から製した黄色の蜜蠟のこと。巣を加熱して圧搾し、水中で煮沸して製する。無味無臭で、化粧品原料・艶出し剤・蠟燭・クレヨンなどに用いられる。腐るものではないそれが「腐れたる絶間なき痙攣」をするという非常に捩じれた表現は、奇異乍ら、思わずはっとさせ、以下に雪崩れる対句表現の眩暈（但し、順位理解し易い比喻となっている）の強烈な効果を最初から意図させており、小憎らしい確信犯である。

「噎ぶ」「むせぶ」。

「天鵝絨」「びろうど」。ポルトガル語の「veludo」やスペイン語「velludo」由来。近世、西洋から渡来した特殊な織り方によって光沢に富む滑らかな表面を出した織物。ベルベツト（英語：velvet）。近代に至るまで知られた作家でも「びらうど」と書くことがあるが、あの歴史的仮名遣は誤りである。

「手觸」「てぢはり」。

「やぶちゃん注…[自序の見開きの左ページにある石井柏亭の挿絵](#)。リストによれば、『幼兒磔殺』（やうじたくさつ）。無論、これは神の子であるイエス・キリストのアナグラムである。右ページにある自序も添えておいた。」

昔よりいまに渡り来る黒船縁がつくれば鱻の餌となる。サンタマリヤ。

『長崎ぶり』

「やぶちゃん注…「幼児磔殺」の絵の裏に当たるところに記されている。詩文は中央に二行で記されてあるが、ここはブラウザの不具合や、そもそものが繋げて読まれるべきものである。特異的に原本に従わずに、かく示した。底本には何も書かれていないので、この小唄を北原白秋の作と思って読んでいる人が多いと思うのだが、これは江戸中期の歌謡集である秀松軒しゅうしょうけんの編になる室町末期から江戸の元禄に至るまでに流行歌謡を集成した

「松の葉」(元禄一六(一七〇三)年刊。当時の上方で伝承・演奏されていた三味線歌曲の歌詞を分類・集成したもの)の第一巻の「葉手」の「四 長崎」に載る小唄である。所持する一九三一年岩波文庫刊の藤田徳太郎校註「松の葉」には、

*

○昔より今に渡り来る黒船、縁が盡くれば鱻の餌となる、さんたまりや

*

と載る。

以下、「例言」となるが、切れるので、次のページに送った。」

例 言

一、本集に收めたる六章約百二十篇の詩は明治三十九年の四月より同四十一年の臘月に至る、即最近三年間の所作にして、集中の大半は殆昨一年の努力に成る。就中『古酒』中の「よひやみ」「柑子」「晩秋」の類最も舊くして『魔睡』中に載せたる「室内庭園」「曇日」の二篇はその最も新しきものなり。

一、予が眞に詩を知り初めたるは僅に此の二三年の事に屬す。されば此の間の前後に作られたる種々の傾向の詩は皆予が初期の試作たるを免れず。従て本集の編纂に際しては特に自信ある代表作のみを精査し、少年時の長篇五六及その後の新舊作七十篇の餘は遺憾なく割愛したり。この外百篇に近き『斷章』と『思出』五十篇の著作あれども、紙數の制限上、これらは他の新しき機會を待ちて出版するの已むなきに到れり。

一、予が象徴詩は情緒の諧樂と感覺の印象とを主とす。故に、凡て豫が據る所は僅かなれども生れて享け得たる自己の感覺と刺戟苦き神經の悅樂とにして、かの初めより情感の妙なる震慄を無みし只冷かなる思想の概念を求めて強ひて詩を作爲するが如きを嫌忌す。されば予が詩を讀まむとする人にして、之に理知の闡明を尋ね幻想なき思想の骨格を求めむとするは謬れり。要するに予が最近の傾向はかの内部生活の幽かなる振動のリズムを感じ、その儘の調律に奏でいんとする音樂的象徵を專とするが故に、それが表白の方法に於ても概ねかの新しき自由詩の形式を用ゐたり。

一、或人の如きは此の如き詩を嗤ひて甚しき誇張と云ひ、架空なる空想を歌ふものと做せども、予が幻覺には自ら眞に感じたる官能の根柢あり。且、人の天分にはそれぞれ自らなる相違あり、強ひて自己の感覺を尺度として他を律するは謬なるべし。

一、本來、詩は論ふべききはのものにはあらず。嘗て幾多の譏笑と非議と謂れなき誤解とを蒙りたるにも拘らず、予の單に創作にのみ執して、一語もこれに答ふる所なかりしは、些か自己の所信に安じたればなり。

一、終に、現時の予は文藝上の如何なる結社にも與らず、又、如何なる黨派の力をも恃む所なき事を明にす。要は只これらの羈絆と掣肘とを放れて、予は予が獨自なる個性の印象に奔放なる可く、自由ならんことを欲するものなり。

一、尙、本集を世に公にする事を得たる所以のものは、これ一に蒲原有明、鈴木鼓村兩氏の深厚なる同情に依る、ここに謹謝す。

明治四十二年一月

著 者 識

「やぶちゃん注」やはり標題を除く本文は有意にポイントが小さい。序と同じく句点の後には有意な字空けがあるのを再現した。底本では柱の「一」が頭抜けて以下は一字下げであるが、再現していない。

「明治三十九年」一九〇六年。

「臘月」十二月の異称。中国で、冬至（陰暦十一月中）の後の第三の戌（いぬ）の日に、獺の獲物の獣肉を供えて先祖百神を祀る祭りを行ったことによる。現行ではその旧年と新年を「繋ぎ合わせる月」の原義と説明されることが多い。

「殆」「ほとんど」。

「昨一年」「をととし」と読んでおく。

「百篇に近き『斷章』と『思出』五十篇の著作あれども、紙数の制限上、これらは他の新しき機會を待ちて出版するの已むなきに到れり」これは二年後の第二詩集「思ひ出」（明治四四（一九一一）年六月東雲堂書店刊）として世に出た。私はこの[ブログ・カテゴリ](#)

[「北原白秋」](#)で既に「北原白秋 抒情小曲集 おもひで（初版原拠版）」として全篇の電子化注を完了している。

「無みし」「なみし」。無いものとして無視し。

「闡明」「せんめい」。明瞭でなかった道理や意義を明らかにすること。

「教義を闡明する

「誇張」ママ。誇張。誤字か誤植か或いは思い込みの慣用かは判別出来ない。

「謬」「あやまり」と訓じておく。

「論ふ」「あげつらふ」。

「譏笑」「きせう」（きしょう）あざけ 誇り笑うこと。嘲り笑うこと。

「非議」「誹議」とも書く。論じて非難すること。そし 譏ること。

「安じ」「やすんじ」。

「羈絆」「きはん」。「牛馬を繋ぐ」の意から、足手纏いとなる身辺の物事。あしでまと

「掣肘」「せいちう」（せいちゅう）。脇から干渉して人の自由な行動を妨げること。「呂氏春秋」の「審応覽」の「具備篇」に出る、孔子の門人の宓子賤（ふくしせん 生没年未詳）はある村の長官となったが、魯の役人二人がやってきて文書を書こうとすると、肘を押さえて邪魔をし、「お前たちは上手く字が書けない」と役人を諍った。以上の報告を聞いた魯の君王は「これは必が彼の村を治めるのを私に邪魔されたくないことを示したものだ」と悟ったという故事に基づく。

「蒲原有明」本邦の象徴主義詩人の一人として知られる蒲原有明（かんばらありあけ 明治八（一八七五）年（戸籍上は翌年）〜昭和二七（一九五二）年）。私は[このブログ・カテゴリ](#)「[蒲原有明](#)」で「有明集」（初版・正規表現版）の電子化注を終えている。

「鈴木鼓村」（こそん 明治八（一八七五）年〜昭和六（一九三一）年）は箏曲家で日本画家。宮城県生まれ。本名は映雄。てるお 陸軍時代に箏曲・洋楽を学んだ。与謝野鉄幹・晶子夫妻・薄田泣菫・北原白秋らと交流し、彼らの詩に新形式の歌を作曲して、新箏曲を提唱、「京極流」を名乗った。日本音楽史に詳しくあったが、晩年は大和絵の古土佐に専念した。別号で那智俊宣なちとしのぶとも称した。著作に「日本音楽の話」、作曲に「紅梅」などがある。

「明治四十二年」一九〇九年。」

魔 睡

「やぶちゃん注…[パート標題](#)。左ページ。石井柏亭の絵。この裏に、以下の長田秀雄の私が「散文詩」と称した文章が中央に七行で載る。ポイントは小さい。繋がった内容であるから、底本を再現せず、ベタで流した。句点の後の有意な字間は再現した。」

余は内部の世界を熟視めて居る。 陰鬱な死の節奏は絶えず快く響き渡る……と神経は一齊に不思議の舞踏をはじめる。 すすりなく黒き薔薇、歌うたふ硝子のインキ壺、誘惑の色あざやかな猫眼石の腕環、笑ひつづける空眼の老女等はこまかくしなやかな舞踏をいつまでもつづける。 余は一心に熟視めて居る……いつか余は朱の房のついた長い劔となつて渠等の内に舞踏つてゐる……

長田秀雄

「やぶちゃん注…長田秀雄（明治一八（一八八五）年～昭和二四（一九四九）年）は劇作家・詩人。東京神田生まれ。医師であつた父の跡を継げずに、中学時代から詩作を始め、同級の木下杢太郎とともに「新詩社」を経て、「パンの会」を設立、『スバル』や『屋上庭園』に詩と戯曲を発表していたが、明治四三（一九一〇）年発表の戯曲「歓楽の鬼」が自由劇場で上演され、劇作家の地位を築いた。イブセンの影響が顕著であるが、大正四（一九一五）年にはチェーホフ的な味わいを持った「飢渴」を発表、大正九（一九二〇）年には全五幕から成る大作史劇「大仏開眼」に仏師公麻呂と恋人葛城郎女を主人公にした政治と芸術の葛藤を描き、好評を得た（以上は平凡社「世界大百科事典」に拠つた）。なお、この引用が本詩集への書き下ろしなのか、既存の詩篇の援用なのかは、長田秀雄を全く読んだことがない私にはよく判らない。以下、切れるので、次のページに送つた。」

「やぶちゃん注…次の本文本格巻頭の詩篇「邪宗門秘曲」前にある挿絵。見開きで右ページにあり、左ページが「邪宗門秘曲」（ノンブル「二」）の第一連となっているので、本文体裁を見て戴くために、後者も含めた見開き画像を示した。」

邪宗門秘曲

われは思ふ、末世の邪宗、切支丹でうすの魔法。
黒船の加比丹を、紅毛の不可思議國を、
色赤きびいどろを、匂鋭きあんじやべいいる、
南蠻の棧留縞を、はた、阿刺吉、珍酩の酒を。

目見青きドミニカびとは陀羅尼誦し夢にも語る、
禁制の宗門神を、あるはまた、血に染む聖磔、
芥子粒を林檎のごとく見すといふ欺罔の器、
波羅韋僧の空をも覗く伸び縮む奇なる眼鏡を。

屋はまた石もて造り、大理石の白き血潮は、
ぎやまんの壺に盛られて夜となれば火點るといふ。
かの美しき越歴機の夢は天鵝絨の薫にまじり、
珍らなる月の世界の鳥獸映像すと聞けり。

あるは聞く、化粧の料は毒草の花よりしぼり、
腐れたる石の油に畫くてふ麻利耶の像よ、
はた羅甸、波爾杜瓦爾らの横つづり青なる假名は
美しくしき、さいへ悲しき歡樂の音にかも満つる。

いざさらばわれらに賜へ、幻惑の伴天連尊者、
百年を刹那に縮め、血の磔脊にし死すとも
惜しからじ、願ふは極秘、かの奇しき紅の夢、
善主鷹、今日を祈に身も靈も薫りこがるる。

四十一年八月

「やぶちゃん注…「波爾杜瓦爾」の「ほるとがる」のルビの「ほ」はママ。また、この「瓦」の活字は、漢字字形自由共有サイト「グリフウィキ」の「瓦」の異体字のこれであるが、表示出来ないので、通常の子で示した。以下ではこの「瓦」の異体字注は附さない。

一箇所だけ老婆心乍ら、注しておく、第四連最終行のある「さいへ」は連語「然言へど」の接続助詞「ど」をカットしたもので、「そうは言っても」の意。本詩集の基本律の一つである五・七調定型詩に合わせるための仕儀である。

さて、本篇については先の吉田精一氏に鑑賞が非常に優れている。やや長い、鑑賞文の後半部分を引用する。本篇の引用部に初版とはやや表記の異なる箇所があるのはママである。既にお判りかと思うが、吉田氏の当該原本は正字正仮名である。

《引用開始》

第一聯は

われは思ふ末世の邪宗、切支丹でうすの魔法。
が先づ切れる。それが以下の四聯迄の主題となる。この主題を様々な形象によつて演繹したのが第四聯迄といふことになる。「でうす」は「でいうす」「天有主」「天主」等とも書かれる。神を意味する Deus といふラテン語であり、ポルトガル語でも同じ。日本の切支丹文献に頻出する語であることはいふまでもない。

黒船の加比丹を、紅毛の不可思議國を、

色赤きびいどろを、匂鋭きあんじやべいいる

南蠻の棧留稿を、はた阿刺吉、珍配の酒を。

は何れも聯想の赴くまゝに、眼にし、耳に、又舌に訴へる南蠻傳來の品を並べたのであるが、「黒船の加比丹」(スペイン語の Captain オランダ語の Kapitein から「紅毛」といふ聯想を起し、「色赤きびいどろ」から「あんじやべいいる」の深紅色の色合ひを引き出しているのは自然である。且つ黒と赤との色彩の強烈な對比を見のがせない。あんじやべいいるは蘭名 Anjebier 和漢三才圖繪に「阿無之也閉伊流」とあり、今日のカーネーションのことである「やぶちゃん注」所持する原本で確認したところ、「卷九十四之末」の「二」にある「瞿麥」(音「クバク」)の項(和名を「とこなつ」「なでしこ」「せきちく」と添える)の項の一番最後に、『阿蘭陀石竹 株・莖、大きく、葉、硬く、鼻花も亦、大きに、數品有り【阿無之也閉伊流名と名づく。】(原文訓点附漢文)とあった。』もとおらんだせきちくとも云つた。つゞいて「棧留稿」(印度東岸のサントメ San Tome から渡來したいはゆるたうざん、縞織の厚く美しい絹布、多くは赤又は淺黃を交へた縞)から、阿刺吉 (Arak)、珍配 (Vinho-tinto) の如き、オランダ、ポルトガルより渡來したといふ古渡りの洋酒の名を列舉してゐる。珍配はポルトガルの赤葡萄酒の名、阿刺吉はオランダの火酒の類で、吉井勇の歌などにも愛用されてゐる。の棧留稿も亦當時の類唐詩人の情を刺激し、詩材となつたことが多い。いづれも内容以外に、語感の美しさが詩趣をそゝつたのである。

かやうな感覺に訴へる物象よりして、所謂切支丹伴天連の徒が元龜天正の間渡來して新宗をひろめた時代のおどろきを第二聯に於て再現する。聯想の自然な發展といふべきであらう。

目見ドミニカびとは陀羅尼誦し夢にも語る、
禁制の宗門神を、あるはまた、血に染む聖礫、
芥子粒を林檎のごとく見すといふ欺罔の器、

波羅韋僧の空をも覗く伸び縮む奇なる眼鏡を。

ドミニカびとは Dominican で、聖どみにく派の聖職者をさす。所謂耶蘇會（ゼスイツト）「やぶちゃん注」：「Jesuit」。ゼスイツトはイエズス会士のこと、ゼズイット教団、即ちイエズス会の異称である。」への對立者であらう。陀羅尼は陀羅尼呪の略。佛語で呪文の意味だが、キリスト教に轉用した。「陀羅尾誦し夢にも語る」は「目見青き」と對していかにエキゾティックな表現である。「夢にも語る」の對象は「禁制の宗門神」について、「血に染む聖磔」「けれんの器」「奇なる眼鏡」である。は聖磔この場十字架のこと。あとの二行は顯微鏡と望遠鏡をいつたもの。波羅韋僧 Paraiso（ポ語）即ち天國で、切支丹文獻には常に見え、その實例は枚舉に遑がない。「世界とばらいそとは誠に天地の懸隔也。（略）爰は聖人、凡夫の假屋也。かしこは善人と天人の本國也。爰は後悔とべにてんしやの所也。かしこは快樂悦びの所也（ぎや・ど・べかどる、上、第八）『パライソ』ト云ハ、日本ノ言葉ニナラバ極樂ト云心ニテ侍」（妙貞問答下卷）などである。この聯の參考として伴天連オルガンチノの、織田信長に謁見した時の記述をあげて置く。「やぶちゃん注」以下、底本では全体が二字下げ。前後を一行空けた。」

南蠻國の大王、宇留岸に宣ふ様は、我國今度貴僧に頼み、日本に渡で、破天聯の法を弘め、日本人を歸伏させ、其後に大軍を以て、日本を攻め隨へ、我等領になしたき望也。彼國小國と申せども、神國仁義の國なれば、中々通例の事にては、歸伏せまじ。隨分と道術を以て、人をなづけ給ふべし。日本の國へ捧物を遣はし申すべしとて、七種の寶物を用意したり。第一に七十五里を一目に見る遠目鏡、第二は芥子を玉子の如く見る近眼鏡、第三は猛虎の皮、第四は四十五丈四方富辭「やぶちゃん注」意味不明。」なき鐵砲、第五は伽羅百斤、第六は八疊釣の蚊帳、たゞめば一寸八分の手箱に入る、第七はこんたつといふ四十二粒の珠數、紫金にて作り、四二國を表したり。（切支丹宗門來朝日記）

それにしてもこの後の二行の詞つかひは巧緻である。よく當時の人の驚歎の情をうつし得てゐる。

第三聯の

屋はまた石もて造り、大理石の白き血潮は、
ぎやまんの壺に盛られて夜となれば火點るといふ。

の「大理石の白き血潮」は服部謳香氏説の率うに白色の液體の燃料であらうか。「ぎやまん」はオランダ語の Diamant の訛で、元來は金剛石であるが、轉用されて硝子の意に用ゐらゐる。こゝでもそれであらう。（「大理石の白き血潮」は石油のことだらう。）

かの美しき越歴機の夢は天鵝絨の薫にまじり、
珍らなる月の世界の鳥獸映像すと聞けり。

「越歴機」はえれきてる Electriciet の訛で、電氣の意味である。この時分にえれきのあるはずはないが、或は幻燈機をさしたものであらうか。すべて第三聯は第二聯をうけて好奇の眼と耳に映る奇怪さを誇張したいひ方で表現してゐる。

第四聯に入ると、更に不可思議のことを敘しつゝ、視野を轉じた。

あるは聞く、化粧けはひの料は毒草の花よりしぼり、腐れたる石の油に畫くてふ摩利耶の像よ。

「毒草の花よりしぼる」化粧料とは、蘆薈「やぶちゃん注：「ロクワイ（ロカイ）」で单子葉植物綱キジカクシ目ススキノキ科ツルボラン亜科アロエ属 *Aloe* のアロエのこと」、麝香のたぐひをさすのであらう。蘆薈を化粧に用ゐたことは舊約聖書に見える。「腐れたる石の油」による繪とは、油繪具の類をさすか。當時の油繪は鉛を原料にし、白土、白蠟「やぶちゃん注：「びやくらう」（びやくろう）。イボタ蠟。イボタノキ（水蠟樹。疣取木。キク亜綱ゴマノハグサ目モクセイ科イボタノキ属イボタノキ *Ligustrum obtusifolium*）に群生するイボタロウカイガラムシ（半翅目同翅（ヨコバイ）亜目カイガラムシ上科カタカイガラムシ科 *Ericerus* 属イボタロウムシ（イボタロウカイガラムシ／イボタロウカタカイガラムシとも） *Ericerus pela*）が分泌するものを加工したもので、化粧品や医薬品（軟膏基剤）・光沢剤・蠟燭などに古くから利用されてきた。」などを混じたものといふ。

はた羅甸、波爾杜瓦爾らの横つづり青なる假名は
美しき、さいへ悲しき歡樂の音にかも満つる。

この二行で感覺の交響をこゝみようとしてゐる。西洋文字に「青なる」（或は青インキで書かれてゐる爲とも解される）と感じ、その音を「歡樂の音」ときくのはかなり大膽な表現といふべきであらう。しかし「美しくしき、さいへ悲しき歡樂」にこそ近代邪宗門の徒の憧憬がこもつてゐるのであり、この突飛な表現も、毒草の化粧料、腐つた油の繪具と並べて來ただけに目立つてをかしくない。

最終聯に入つて、詩想ははつきりと限定される。

いざさらばわれらに賜へ、幻惑の伴天油尊者、

百年を刹那に縮め、血の磔脊はりきにし死すとも、

惜しからじ、願ふは極祕、かの奇しき紅の夢。「やぶちゃん注：「はりき」のルビは上記の通りでママ。但し、「脊」のルビを排しただけでルビが下方へ進出しただけで、誤りではあるまい。」

伴天連はポ語 *Padre* の訛で師父の意。はあてれとも訓じる。「天草本平家物語拔書」にはパードレとある。百年の生命を刹那にちぢめ、キリストの如く、又日本の邪宗門の徒の如く、血の十字架を背にして死なうとも、「願ふは極祕」自然、天地の極祕を啓示される。「奇しき紅くれなゐの夢」をわれらに賜へよ、さすれば生命を賭するも惜しからじ、と祈願する。「願ふは極祕」は、この詩の主題であり、「極祕」は作者によつて「奇しき紅くれなゐの夢」と觀ぜられる。

善主磨ぜんすまろ、今日を祈に身も靈たまも薫りこがるる。

善主磨は普通ゼスス (*Jesus*) 又はゼス・キリスト (*Iesus Christo*) とよばれが、善主磨といふ名も散見する。「身も靈たまも薫りこがるる」には、はげしい憧憬と共に、密室もしくは神前に立ちくゆる香煙のゆらめきの如きが想像される。「幻惑の伴天連尊者」といふ語と對應して、幻想と奇異に陶醉せんとする青年の心情を巧みに表現した。

一篇を通觀して見るに、聯想が聯想をよび、神祕をもとめる幻想がリアリステイックに展開してゐるのが特色である。豊富な語彙による形象の複雑多岐なことと、語法・措辭

の自然で巧妙なことは、白秋の長所として誰にも認められる所であるが、この詩に於てもそれが目立つ。古語を多用しながらも、泣菫に見えるやうな擬古の弊がない。一刀一拜を偲ばせる苦行の影も見えず、斧鑿の痕をとぐめないで流れるやうに快適なリズムは、有明の詩と全く反対である。まさに鳥が歌ふやうに歌つてゐる。これはこの二家の理知的なのに對して、白秋の詩が感覺的であり、官能的であるからでもある。象徴詩として見れば、視念象徴の一體とも見られ得るが、必らずしもさう見なくてもよい。形式的にいへば外形と内容との層面の大いさの違ふ時、とくに内容が外形に勝つ場合をふつう象徴とよぶ。内容的には理念の世界を描いて超理念の姿とこゝろを内包する所に象徴がある。むしろ超理念に住して理念の世界を眺める所に象徴がある。とすれば白秋詩は眞の象徴詩とよばれるべきでなく、外面的な感覺・官能が、その精神的内包に對して過重であり過多であるのだから、感覺詩、官能詩とよぶべきで、この詩も亦その範圍に屬せしめてよい。

たゞこの詩に於ては白秋の缺點といふべき言葉の上すべりがわりあひに感ぜられない。それだけの精神的重味をになはぬ形象が羅列されると、とかく言葉が浮き、浮華な官能と神経が徒らに舞ひ踊るのだが、この詩にはさうした弊も少い。形象の萬華鏡ともいふべく、あとからあとからとくり出される新奇な事物・内容は、讀者に眩暈をかんじさせるやうに、ちらちらしすぎる所はあるが、それがこの詩の主題、邪宗門といふ特異な詩趣と相俟つて、一種奇怪な幻想を生かしてゐる。この意味でこれは白秋の長所を打つて一丸とした趣きがあり、「邪宗門」中の絶唱たるのみならず、白秋の初期の詩中の一代表作だと信じるのである。且つ先にものべたやうに近代切支丹文學の一樣相として、さうした種類の一名作としても、文化史的意義を見出すのである。

前にふれたやうに當時南蠻趣味や南蠻文學は文人詩人のみならず學者をも刺激し、村上直次郎を先達として、新村出、上田敏等に數々の勞作を残さしめてゐる。白秋の詩が、どれほどの南蠻趣味を基礎にしてよまれたかは疑はしい。山田孝雄の「太平記拔書」新村の「ぎや、ど、べかどる」以下「懺悔録」、「どちりな、きりしたん」、「金句集」、「平家物語抄」等の紹介は「邪宗門」出版以後であり、パヂエスの「日本切支丹宗門史」もまだ翻譯なく、それらの書物は容易に入手しがたかつた。クラッセの「日本西教史」はあつたが、浩瀚なあの書を白秋が讀破したかどうか。要するにこの詩は多く長崎、天草の矚目風景、その他の些細な知識に刺激されて成つた空想の産物にほかなるまい。さうした意味でも白秋のこの詩は、かうした南蠻趣味、文學の先縦として注意されるのである。

勿論文學作品としてはさやうな文化史的な意味よりも、顔唐精神の興味と志向を語るものとして、いはゆる顔唐派の藝術の一代代表作としての意味を重視すべきである。たゞさうした時代の背景に於て見るとき、この詩の情趣が一層よく理解されることと思ふ。

《引用終了》

吉田先生のこれに屋上屋は要らぬと思う。」

室内庭園

晩春の室の内、

暮れなやみ、暮れなやみ、噴水の水はしたたる……

そのもとにあまりりす赤くほのめき、

やはらかにちらほへるへりオトロオブ。

わかき日のなまめきのそのほめき静ころなし。

盡きせざる噴水よ……

黄なる實の熟るる草、奇異の香木

その空にはるかなる硝子の青み、

外光のそのなごり、鳴ける鶯、

わかき日の薄暮のそのしらべ静ころなし。

いま、黒き天鵝絨の

にほひ、ゆめ、その感觸……噴水に纏れたゆたひ、

うち濕る草の函、饅ゆる褐色

その空に暮れもかかる空氣の吐息……

わかき日のその夢の香の腐蝕静ころなし。

三層の隅か、さは

腐れたる黄金の縁の中、自鳴鐘の刻み……

ものなべて惱ましき、盲ひし少女の

あたたかに匂ふかき感覺のゆめ、

わかき日のその靄に音は響く、静ころなし。

晩春の室の内、

暮れなやみ、暮れなやみ、噴水の水はしたたる……

そのもとにあまりりす赤くほのめき、

甘く、またちらほひぬ、へりオトロオブ。

わかき日は暮るれども夢はなほ静ころなし。

四十一年十二月

「やぶちゃん注…本篇は私の所持する後代の選集類（二冊所有）で表記に異同が見られ、しかもそれらにまたバラつきがある。例えば長いリーダーのドット数が九或いは八であったり、第二連の二行目の最後に読点があったり（「香木、」なかったりする。これらは読んだり、詠じたりするに大きな変化は起こらぬが、特異点は最後の二連分で、本詩集と異なり、その

二冊では、第四連末の「晩春の室の内、」の一行がなく、それが最終連の第一行に配されているのである。確かに、本詩集では、連構成を持つ詩篇で、連の終行を読点で終わって、次連があるというのは少ない（ないわけではなく、「ほのかにひとつ」などに認められる）。また、この第四連が六行で、最終連が四行というのは、前の三連が総て五行であるのと、バランスが悪いことに容易に気づく。また、詩篇内の詩想と朗読の際の内在律のリズミカルな切れを考えるならば、これは第一連と最終連が対句的に完全呼応している。しかし、その外形上のリズムをわざと崩すことで変奏が行われている可能性を排除出来ない、というよりも、寧ろ、コーダに於いて、そうした意外なブレイクを持つて来る方が、朗読の余韻はより高まるとも私は思うのである。なお、奇異のルビはママ。

「あまりりす」単子葉植物綱キジカクシ目ヒガンバナ科ヒガンバナ亜科ヒツペアストルム連ヒツペアストルム亜連ヒツペアストルム属 *Hippeastrum* のアマリリス（英語：

Amaryllis）類。原種は中南米・西インド諸島に約九十種あるが、古くから数百種類の園芸品種が作り出され、現在もその数は増え続けている。学名の「ヒツペアストラム」はギリシア語で「騎士」の意味の「hippos」（ヒッペオス）と「星」の意の「astron」（アストロン）に由来する。「*Amaryllis*」は旧属名で、古代ギリシャやローマの詩に登場する羊飼いの名「アマリリス」から取られている。学名上の園芸品種の総称は「ヒツペアストルム・ヒブリドゥム」（*Hippeastrum* × *hybridum*）。日本には江戸末期に、キンサンジコ（金山慈姑）*Hippeastrum puniceum*、ジャガタラズイセン（咬吧水仙）*Hippeastrum reginae*、ベニスジサンジコ（紅筋山慈姑）*Hippeastrum vitatum* の三種が渡来している（以上はウィキの「アマリリス」を参考としたが、最後の二種の学名などは独自に確認した）。

「ヘリオトロープ」ヘリオトロープ (*Heliotrope*) は、ムラサキ科キダチルリソウ属

Heliotropium の植物の総称であるが、特にその代表種である被子植物門双子葉植物綱ムラサキ目ムラサキ科キダチルリソウ属キダチルリソウ *Heliotropium arborescens* を指すことが多い。学名はギリシア語の「helios」（太陽）＋「trope」（向く）で、「太陽に向かう」の意。ペルー原産で、フランスの園芸家が一七五七年にパリに種子を送り、ヨーロッパを中心に世界各国に広まった。本邦には明治時代に入った。ヘリオトロープには約二百五十種があるとされる。和名では他に「香水草」「匂ひ紫」の異名がある。バニラのような甘い香りがするが、その度合いは品種によって異なり、花の咲き始めの時期に香り、開花後は香りが薄くなってしまう特徴がある（以上はウィキの「ヘリオトロープ」に拠った）。

「天鵝絨」ポルトガル語の「veludo」やスペイン語「veludo」由来。近世、西洋から渡来した特殊な織り方によって光沢に富む滑らかな表面を出した織物。」

陰影の瞳

夕ゆふとなればかの思曇硝子おもひくもりがらすをぬけいでて、
廢すたれし園そののなほ甘あまきときめきの香かに顫ふるへつつ、
はや饅すえ菱なゆる芙蓉花ふようくわの腐くされの紅あかきものかげと、
纏もつれてやまぬ秦皮とねりこの陰影いんえいにこそひそみしか。

如何いかに呼よべども静しづまらぬ瞳ひとみに絶たえず涙なみだして、
歸かへるともせず、密ひそやかに、はた、果はてしなく見入みいりぬる。
そこともわかぬ森メランコリアかげの鬱うすやみ憂うの薄闇うすやみに、
ほのかにのこる噴水ふきあげの青きひとすぢ……

四十一年十月

「やぶちゃん注」・「秦皮」日本原産種であるシソ目モクセイ科トネリコ属トネリコ

Fraxinus japonica。ウィキの「トネリコ」他より引く。『和名の由来は、本種の樹皮に付着しているイボタロウムシ』（半翅目同翅（ヨコバイ）亜目カイガラムシ上科カタカイガラムシ科 *Ericerus* 属イボタロウムシ（イボタロウカイガラムシ／イボタロウカタカイガラムシとも） *Ericerus pela*：本州以南の日本各地及び中国・ヨーロッパに広く分布する。○⁺は成熟すると、直径十ミリメートルほどの球形状になり、体色は緑黄褐色で小黒斑紋が散る。♂は幼虫時に枝に群生して白色の蠟物質を分泌、虫体とそれらが寄生した枝はその蠟によって包まれる。子はこの蠟塊中で蛹となり、成虫になって出現する際には、体長三ミリメートルで、細長い透明な翅はねを有する。一年に一回発生して成虫で越冬、五月頃に数千個の卵を産み、卵は六月に孵化する。トネリコその他、庭木として好まれるイボタノキ・ネズミモチなどに寄生して被害を与える。雄の分泌した蠟塊は古くから「戸^{トナベリ}ヒ」^{トナベリ}「いばた蠟（虫白蠟）」とよばれ、蠟燭や丸薬の外装・織物の艶出し・止血剤などに用いられ、本邦では福島県会津地方が産地として知られて「会津蠟」と呼ばれた）が分泌する蠟物質『（イボタロウ・いばた蠟）にあり、動きの悪くなった敷居の溝にこの白蠟を塗って滑りを良くすることから』『戸に塗る木（ト・ニ・ヌル・キ）』とされたのが、やがて転訛して「トネリコ」と発音されるようになったものと考えられている』『日本原産種であり、東北地方から中部地方にかけての温暖な山地に自生』するが、『街路樹や園芸樹として各地に植えられていることもある』。花期は五〜六月頃。『木材としてのトネリコは弾力性に優れ、野球のバットや建築資材などに使用される』『樹皮は民間薬では止瀉薬として、結膜炎時の洗浄剤として用いられる』『新潟県では古くから水田の周囲などに並木として植えられ、刈り取ったイネを架けて乾燥させる「はぎ木（はぎき・はぎぎ）」として利用された。同じ米産地の富山県でも同様の使われ方をし、「ハサ」と呼ばれる。トネリコは田園風景を決定づけていたが、ほとんど失われてしまった。「トネリコは一本だけでは役立たない、何本も並んでいるから役に立つ」といった教訓としても使われることがあった』。リンク

先にも書かれてあるが、北欧神話で宇宙を支える「世界樹」として「ユグドラシル」（古ノルド語：Yggdrasil）が知られるが、これは本種と同じトネリコ属の、別種セイヨウトネリコ（トネリコ属セイヨウトネリコ *Fraxinus excelsior*）のこととされている。ところがまずいことに本邦では大抵、この神話を紹介する際に、「トネリコ」と訳されてきたために、狭義の真正の「トネリコ」を北欧原産と誤認してしまい、「トネリコ」が本邦原産種であることを知らぬ人が多いように私には思われるので一言附言しておきたい。」

赤き僧正

邪宗の僧ぞ彷徨へる……瞳据ゑつつ、
黄昏の藥草園の外光に浮きいでながら、
赤々と毒のほめきの恐怖して、顫ひ戦く
陰影のそこはかとなきおぼろめき
まへに、うしろに……さはあれど、月の光の
水の面なる葦のわか芽に顫ふ時。
あるは、靄ふる遠方の窓の硝子に
ほの青きソロのピアノの咽ふ時。
瞳据ゑつつ身動かず、長き僧服
爛壞する暗紅色のにほひしてただ暮れなやむ。

さて在るは、曩に吸ひたる
Hachischの毒のめぐりを待てるにか、
あるは劇しき歡樂の後の魔睡や忍ぶらむ。
手に持つは黒き梟
爛々と眼は光る……

そのすそに蟋蟀の啼く……

四十一年十二月

「やぶちゃん注：「梟」の「ふくろう」のルビはママ。歴史的仮名遣は「ふくろふ」が正しい。
「曩に」「先に」に同じい。今より前に。以前に。但し、事実上の今日の近い時間の意ではあるまい。
「Hachisch」はフランス語の綴りで、音写するなら、「アシシシュ」。英語綴りでは「hashish・hashesh」で、音写は「ハッシシシュ・ハシシ・ハシシユ」など。所謂、「大麻」(バラ目アサ(麻)科アサ属アサ *Cannabis sativa*。カンナビス・サティバ。英名も *Cannabis*。因みに、御存じのことと思うが、種小名は、稲Ⅱ单子葉植物綱イネ目イネ科イネ亜科イネ属イネ *Oryza sativa* のそれと同じだが、これはラテン語の動詞「sero」(セロⅠ：種をまく)の形容詞形「栽培された」の意で、多くの栽培植物の種小名に用いられている)の♀株が分泌する樹脂から作る麻薬。狭義には、大麻の葉を煙草のように吸うのがマリファナ (*marihuana・marijuana*。スペイン語「*marijuana*」由来)で、こちらは一般にその樹脂を固めたものを称する。因みに、小学館「日本国語大辞典」は「ハッシシユ」の見出しで載せ、音写タイプの幾つかを挙げた後、『「マリファナ」に同じ』として、名誉なことに、本篇のこの一行が例文の筆頭に出ている。
「魔睡」の読みはママ。「睡」は「すい」でよむ]

WHISKY.

夕暮^{ゆふぐれ}のものあかき空^{そら}、
その空^{そら}に百舌^{もず}啼^なきしきる。
Whisky^{ウイスキー}の罎^{びん}の列^{れつ}
冷^{ひや}やかに拭^ふく少女^{をとめ}、
見^みよ、あかき夕暮^{ゆふぐれ}の空^{そら}、
その空^{そら}に百舌^{もず}啼^なきしきる。

四十一年十一月

「やぶちゃん注」^{もず}「百舌」本邦産種の代表はスズメ目スズメ亜目モズ科モズ属モズ亜種モズ *Lanius bucephalus bucephalus*。博物誌は私の「[和漢三才圖會第四十三](#)」[林禽類](#) 鵙^{もず}（モズ）」を参照されたい。私の好きな鳥、好きな鳴き声。」

天鵝絨のにほひ

やはらかに腐れつつゆく暗の室。
その片隅の薄あかり、背にうけて
天鵝絨の赤きふくらみうちかつぎ、
にほふともなく在るとなく、蹲み居れば。

暮れてゆく夏の思と、日向葵の
凋れの甘き香もぞする。……ああ見まもれど
おもむろに悩みまじろふ色の陰影
それともわかね……熱病の闇のをのき……

Hachischか、酢か、茴香酒か、くるほしく
溺れしあとの日の疲勞……縋れちらばふ
Wagnerの戀慕の樂の音のゆらぎ
耳かたぶけてうち透かし、在りは在れども。

それらみな素足のもとのくらがり
爛壞の光放つとき、そのかなしみの
腐れたる曲の縁を如何にせむ。
君を思ふとのたまひしゆめの言葉も。

わかき日の赤きなやみに織りいでし
にほひ、いろ、ゆめ、おぼろかに嗅ぐとなけれど、
もののやはに暮れもかぬれば、わがこころ
天鵝絨深くひきかつぎ、今日も涙す。

四十一年十二月

「やぶちゃん注…本詩篇の秘蹟の鑰は第四連終わりの「君を思ふとのたまひしゆめの言葉
も」にある。これは「抒情小曲集 おもひで」の自序「わが生ひたち」や、同詩集の「た
んぽぽ」に詠み込まれた、愛する友人中島鎮夫のことである。これは特に必要不可欠と思
われるので、「たんぽぽ」に注したものを再掲する。

*

所持する書籍ではこれが如何なる人物か分からなかったが、複数のネット記事を並べて
みることでやっと判明した。以下はリンク先以外の信頼出来る資料も参考にしてある。彼
は白秋の親友で中島鎮夫（なかじましずお（しづを） 明治一九（一八八六）年五月九日
〜明治三七（一九〇四）年二月十三日）のことである。ペンネームは白雨。享年十九（満

十七歳)。中学に入學した白秋は級友と回覧雑誌を作って歌作・詩作にいそしみ、後期には校内で文学会を組織して新聞『硯香』小説や論説なども書いたが、低能教育の弊風を非難する内容の一文が学当局の忌諱に触れ、問題となったりした。その交流の中でも最も親しかったのが中島鎮夫であった。左大臣光永氏の「北原白秋 朗読」の本篇の解説に

『白秋』『白雨』、どちらもペンネームに「白」の字がついてますが、これは彼ら文学仲間との連帯の証でした。『中島青年はみずから文芸部を発足し、生徒の』八『割近くが部員になったということですから、行動力とリーダーシップがあったようです。』ところが中島青年がトルストイの『復活』を回し読みしていたところ、普段から文芸部をよく思わない教師から難癖をつけられ、退学に追い込まれます。『当時』(明治三七(一九〇四)

年)『は日露戦争に突入した年で、ロシア文学を愛好しているだけで非難の対象になったのです。』『中島青年はこの疑いに名誉を傷つけられ、自らの潔白を証明するため、短刀で喉を突いて自刃しました。』『中島青年は死に際して自分のぶんも文学の志を遂げてくれと白秋に遺書を遺します。』『一番の親友を失った白秋の心中は想像するにあまりあります。白秋はその気持ちを「林下の黙想」という詩に託して「文庫」に投稿、』この詩は審査員に絶賛され、明治三十七年四月号に『全文掲載されます。』そしてこの年、白秋は中学を中退し、父に内緒で上京。本格的に文学の道を歩み始めたのでした』とある。また、「西

日本新聞社」公式サイト内の「日本がロシアに宣戦布告をした3日後のこと…」という記事は、『日本がロシアに宣戦布告をした』三『日後のこと。現在の福岡県柳川市で』十七

『歳の文学少年が命を絶った。中島鎮夫(しずお)、ペンネームは白雨(はくう)。後に国民的詩人となる北原白秋の大親友である。』『白秋の回想によると、鎮夫は神童肌の少年で、語学に堪能だった。英語に加え独学でロシア語も勉強していたことから「露探」(ロシアのスパイ)のぬれぎぬを着せられる。汚名に耐えきれず、親戚の家の押し入れで、喉を短刀で突いた。「あなたを思っている」との遺書を白秋に残して』早朝に逝ったのであった。『教室で鎮夫の死を知った白秋はぼろぼろ泣いて駆けつけ、』友の遺骸を板に乗せ、タンポポが咲く野道を家まで運んだ』とある。サイト「ブック・バン」の「文庫双

六】自死した親友を悼む白秋の悲しみ——川本三郎』には、『白秋は鎮夫を愛していた。

「二人は肉交こそなかったが、殆ど同性の恋に堕ちていたかも知からないほど、日ましに親密になった」とのちに回想している』ともある。日露戦争の明治天皇の「露國ニ對スル宣戰ノ詔勅」が正式な宣戦布告で、これは明治三七(一九〇四)年二月十日であった(事実上の開戦はこの二日前の同年二月八日の旅順港にあったロシア旅順艦隊に対する日本海軍駆逐艦の奇襲攻撃(旅順口攻撃)であったが、当時は攻撃開始の前に宣戦布告しなければならぬという国際法の規定がなかった)。

*

友の屈辱の自刃から既に四年、しかし、白秋の悲しみは癒えていない。天鵝絨の塊りが——それを被った少年のままの白秋が——今も——酒蔵の隅で——哀しく慄えている……：

「天鵝絨」先の「室内庭園」に既出既注。

「蹲み居れば」「うづくみ」とある以上、「ゐれば」ではなく「をれば」である。

ハシツシエ
「Hachisch」先の「赤き僧正」に既出既注。

「茴香酒」absintheで、フランス語。音写するなら「アプサアント」。古くからフランス・スイス・チェコ・スペインなどを中心にヨーロッパ各国でニガヨモギ（双子葉植物綱キク亜綱キク目キク科キク亜科ヨモギ属ニガヨモギ *Artemisia absinthium*）・アニス（英語 anise。双子葉植物綱セリ目セリ科ミツバグサ属アニス *Pimpinella anisum*）・ウイキョウ

（セリ科ウイキョウ属ウイキョウ *Foeniculum vulgare*）などを中心に複数のハーブやスパイスを主成分として作られてきたアルコール度の高い（四十〜八十九°）薬草系リキュールの一つ。元はギリシア語の「ヨモギ」を意味する「アプシンシオン」に由来する。

「Wagner」ドイツの作曲家で「楽劇王」の異名を持つヴィルヘルム・リヒャルト・ワーグナー（Wilhelm Richard Wagner 一八一三年〜一八八三年）。

「戀慕の樂音」私はワーグナーに冥いが、一応はCDで持つてはいる「トリスタンとイゾルデ」（*Tristan und Isolde*：全三幕。一八五七年から一八五九年にかけて作曲。初演はミュンヘンのバイエルン宮廷歌劇場で一八六五年六月十日）。本歌劇は中世ヨーロッパの伝説の一つである騎士トリスタンと彼の伯父マルクの王妃イゾルデの悲恋を描いたもので、ワーグナーのそれは『至高の愛の究極的な賛美である』とウィキの「トリスタンとイゾルデ（楽劇）」とある。作劇経緯にはワーグナー自身の不倫事件も関わっていることがそこで判る。

「ものやはに」これは恐らく「もの柔に」であろう。「もの」は接頭語で漠然とした様態を指すそれで、一般的には「何んとなく」と訳すが、漠然とした現実世界の時空間に対する感覚意識の対象物全体を指し、それが実は朦朧としていて、まさに天鵞絨のように柔らかな捉え難いことを表象しているのではないか？ 暮れることも出来かねているというのは、現実の午後の逢魔が時に近い境界の時空間を示しつつ、同時にそれは「わがこころ」にも投影されて、時自体が擬人化されて「暮れか」ねているのである。さればこそ「もの」柔らかな天鵞絨を「ひきかつ」いで、「今日も涙す」るしかないのである、と私は読む。大方の御叱正を俟つ。」

濃霧

濃霧はそそぐ……腐れたる大理の石の
生くさく吐息するかと蒸し暑く、
はた、冷やかに官能の疲れし光―
月はなほ夜の氛圍氣の朧なる恐怖に懸る。

濃霧はそそぐ……そこに蟲の神經
鋭く、甘く、壓しつぶさるる嗟嘆して
飛びもあへなく耽溺のくるひにぞ入る。
薄ら闇、盲啞の院の角硝子暗くかがやく。

濃霧はそそぐ……さながらに戦く窓は
亞刺比亞の魔法の館の薄笑。
麻痺藥の酸ゆき香に日ねもす嚏せて
聾したる、はた、盲ひたる圓頂閣か、壁の中風。

濃霧はそそぐ……甘く、また、重く、くるしく、
いづくにか凋れし花の息づまり、
苑のあたりの泥濘に落ちし燕や、
月の色半死の生に悩むごとただかき曇る。

濃霧はそそぐ……いつしかに蟲も盲ひつつ
聾したる光のそこにうち痺れ、
啞とぞなる。そのときにひとつの硝子
幽魂の如くに青くおぼろめき、ピアノ鳴りいづ。

濃霧はそそぐ……數の、見よ、人かげうごき、
闌くる夜の恐怖か、痛きわななきに
ただかいさぐる手のさばき―靈の彈奏、
盲目彈き、啞と聾者圓ら眼に重なり覗く。

濃霧はそそぐ……聲もなき聲の密語や。
官能の疲れにまじるすすりなき
靈の震慄の音も甘く聾しゆきつつ、
ちかき野に喉絞めらるる淫れ女のゆるき痙攣。

濃霧はそそぐ……香の腐蝕、肉の衰頹、——
呼吸深く囁嚩仿謨や吸ひ入るる
朧たる暑き夜の魔睡……重く、いみじく、
音もなき盲啞の院の氛圍氣に月はしたたる。

四十一年十月

「やぶちゃん注」第一連三行目末のダッシュ一字分はママ。第六連及び第八連に普通の二字分のダッシュがしようされており（後者にはカスレあり）、カスレさえ見えないので、誤植か活字脱落と思われる。

「氛圍氣」「雰圍氣」に同じいが、実はこの「氣」には「空中に漂う氣・氣配」以外に、「禍い」の意がある。

「啞」言語発生が出来ない障碍者を指す。但し、「おうし」の歴史的仮名遣は「おふし」が正しい。則ち、このルビは口語の仮名遣ということになる。「おし」はその「おふし」の縮約とされる。小学館「日本国語大辞典」によれば、「おふし」は古く、「古事記」に現われ、平安時代の昌泰年間（八九八年～九〇一年）に僧の昌住が編纂したとされる現存する最古の漢和辞典である「新撰字鏡」に『暗 於不志』とあり、その後の例文表示に従い、原本に当たった、承平年間（九三一年～九三八年）に成立した源順の辞書「和名類聚鈔」（二十卷本）の卷第三の、「形体部第八 病類第四十」には、『瘡瘻（瘡瘻）』に云はく、『瘡瘻（をふし）』【音】「鵠」の二音。【於布之】。言ふ能はざるなり』（訓読した）とあった（[国立国会図書館デジタルコレクションの画像のここ](#)。右頁二行目）。「おし」の項の例文として引くのが、紫式部の「源氏物語」（長保三（一〇〇一）年以後の起筆と推定）の「常夏」（但し、ここでは「をし」と表記。「和名類聚鈔」のルビも「をふし」であるが、「説文」の与えるは音「音」であるから歴史的仮名遣は「おし」でよい）であるから、「おふし」↓「おし」の成立はまず間違いないであろう。なお、「日本国語大辞典」の載せる「おうし」の語源説は孰れも承服し難いので示さない。

「囁嚩仿謨」chloroform。トリハロメタン（trihalomethane）を代表する一種であるトリクロロメタン（trichloromethane）。CHCl₃。無色・揮発性で、甘いような特有の臭気を持つ液体。メタンを塩素と反応させて生成する。有機化合物の溶剤フロンの原料となり、以前は外科手術の吸引麻酔剤として使われたが、発癌性が確認されたことから現在は使用しない。」

赤き花の魔睡

日は眞晝、ものあたたかに光素の
波動は甘く、また、緩るく、戸に照りかへす、
その濁る硝子のなかに音もなく、
嘔囉仿謨の香ぞ滴る……毒の謠言……

遠くきく、電車のきしり……
……棄てられし水薬のゆめ……

やはらかき猫の柔毛と、蹠の
ふくらのしろみ惱ましく過ぎゆく時よ。
窓の下、生の痛苦に只赤く戦ぎえたてぬ草の花
亜鉛の管の
濕りたる笕のすそに……いまし魔睡す……

四十一年十二月

「やぶちゃん注」：「光素」^{エーテル} ether。エーテル。古代ギリシア時代から二十世紀初頭までの間、実に永く想定され続けた、全世界・全宇宙を満たす一種の物質の名称。古代ギリシアの哲学者アリストテレスは、地水火風に加えて、「エーテル」（「輝く空気の上層」を表わす言葉）を第五の元素とし、天体の構成要素とした。近代では、全宇宙を満たす希薄な物質とされ、ニュートン力学では「エーテル」に対し、「静止する絶対空間」の存在が前提とされた。また、光や電磁波の媒質とも考えられた。しかし、十九世紀末に「マイケルソン・モーリーの実験」で、「エーテル」に対する地球の運動は見出されず、この結果から、「ローレンツ収縮」の仮説を経、遂に一九〇五年、アインシュタインが「特殊相対性理論」を提唱し、「エーテル」の存在は否定された（ここまでは「ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典」に拠った）。但し、現在でも擬似科学や一部の新興宗教の中に「エーテルの亡霊」が巢食つて蠢いている。

「嘔囉仿謨」^{コロロホルム} 前篇「濃霧」に既出既注。

「水薬」当時は「水」の音「スイ」の歴史的仮名遣は「スヰ」と考えられていたので誤りではない。但し、現在は中国の中古の音韻研究が進んだ結果、歴史的仮名遣でも「スイ」のままであることが確定されている。」

麥の香

嬰兒泣く……麥の香の濕るあなたに、
續け泣く……やはらかに、なやましげにも、
香に噎び、香に噎び、あはれまた、嬰兒泣きたつ……
夏の雨さと降り過ぎて
新にもかをり蒸す野の畑いくつ濕るあなたに、
赤き衣一きは若く、にほやかにけふる搖籃や、
磨硝子、あるは窓枠、濡れ濡れて夕日さしそふ。

四十一年十二月

曇 日

曇日の空氣のなかに、
狂ひいつる樟の芽の鬱憂よ……
そのもとに桐は咲く。
Whiskyの香のごときしぶき、かなしみ……

そこここにいぎたなき駱駝の寢息、
見よ、鈍き綿羊の色のよこれに
饅えて病む藁のくさみ、
その濕る泥濘に花はこぼれて
紫の薄き色鋭になげく……
はた、空のわか葉の威壓。

いつこにか、またもきけかし。
餌に饑ゑしベリガンのけうとき叫、
山猫のもののさやぎ、なげく鶯、
腐れゆく沼の水蒸すがごとくに。

そのなかに桐は散る……Whiskyの強きかなしみ……

もの甘き風のまた生あたたかさ、
猥らなる獸らの圍内のあゆみ、
のろのろと枝に下るなまけもの、あるは、貧しく
眼を据ゑて毛蟲啄む嗟歎のほろほろ鳥よ。

そのもとに花はちる……桐のむらさき……

かくしてや日は暮れむ、ああひと曰。
病院を逃れ來し患者の恐怖、
赤子らの眼のなやみ、笑ふ黒奴
酔ひ痴れし遊蕩兒の縦覽のとりとめもなく。

その空に桐はちる……新しきしぶき、かなしみ……

はたや、また、園の外ゆく
軍樂の黒き不安の壞れ落ち、夜に入る時よ、

やるせなく騒さわぎいでぬる鳥獸とりけもの。

また、その中なかに、

狂ひいづる北極熊ほっきょくぐまの氷こなす戰慄をのきの聲こゑ。

その間に花はちる…… Whiskyウイスキーの香かの頻吹しづき…… 桐むらさきの紫……

四十一年十二月

「やぶちゃん注：第一連の「Whisky」の後、及び、最終行の「Whisky」後の半角空きはマ。。

「樟」クスノキ目クスノキ科ニッケイ属クスノキ *Cinnamomum camphora*。

「桐」シソ目キリ科キリ属キリ *Paulownia tomentosa*。四月中旬から五月にかけて円錐花序に淡い大きな紫色の花を円錐状に咲かせる。この花の色や形は、私には、どこか奇体なる異国情緒を感じさせる。

「綿羊」家畜の羊（哺乳綱鯨偶蹄目ウシ亜目ウシ科ヤギ亜科ヒツジ属ヒツジ *Ovis aries*）のこと。特に毛用のもので、野生のものと毛質が異なり、一年中、毛が伸び続ける。

「ペリガン」Pelican のこと。後に出る同年八月作の詩篇「蜜の室」では「ペリガン」であり、後発の作品集では「ペリカン」としているから、ここは誤植の可能性が高い。鳥綱ペリカン目ペリカン科ペリカン属 *Pelecanus* の多種を指す。本邦では、ハイイロペリカン *Pelecanus crispus*・モモイロペリカン *Pelecanus onocrotalus*・ホンバシペリカン *Pelecanus philippensis* が迷鳥として記録されているが、ここは動物園（ホッキョクグマまでいたとなると、東京都恩賜上野動物公園の可能性が高いとは思う）で飼育されていたそれを実際に聴いたものであろうから、以上の種以外である可能性もある。博物誌は「和漢三才圖會第
四十一 水禽類 鵜鶘（がらんちよう）（ペリカン）」を参照されたい。

「山猫」これが真正のヤマネコであるならば、哺乳綱食肉ネコ亜目ネコ科ネコ亜科ネコ属 ヨーロッパヤマネコ *Felis silvestris* か、*Prionailurus* 属ベンガルヤマネコ *Prionailurus bengalensis*・イリオモテヤマトネコ *Prionailurus bengalensis iriomotensis*・シンマヤマトネコ（アムールヤマネコ）*Prionailurus bengalensis euptailurus* の孰れかとなるが、実際にやはり動物園で聴いたのかも知れぬが、この場合は謂わば幻想の妖しいアイテムとしての要素が強いから、創作当時の上野動物園や見世物で、どのヤマネコが飼育されていた可能性があるかを考証する気は、私には、あまり生じない。それはそれ、ネコ・フリースクの方の探求にお任せしたい。悪しからず。一応、私の「[和漢三才圖會卷第三十八 獸類 穀（こく）](#)
[（仮想妖獣？ ジャイアントパンダ？／ベンガルヤマネコ？）](#)」をリンクしておく。

「ほろほろ鳥」キジ目ホロホロチョウ科ホロホロチョウ *Numida meleagris*。アフリカに棲息する。全長約五三センチメートル。胴体は黒い羽毛に覆われ（但し、家畜化されたホロホロチョウの羽色は白・茶色・灰色など様々）、白い斑点が入る。頭部には羽毛がなく、ケラチン質に覆われた骨質の突起がある。また咽頭部には赤や青の肉垂がある。雌雄はよく似ているが、肉垂と頭部の突起は雄の方が大きい。草原や開けた森林等に生息し、昼間は地表にいるが、抱卵中のメスを除き夜間は樹上で眠る。群れを形成して生活し、二千羽

以上もの大規模な群れが確認されたこともある。横一列になって採食を行ったり、雛を囲んで天敵から遠ざけるような形態をとることもある。繁殖期になると、は縄張りを持ち、群れは離散する。危険を感じると、警戒音をあげたり、走って逃げるが、短距離であれば、飛翔することも可能である（一般には「飛べない鳥」とされている）。和名は鳴き声が「ホロ、ホロ」と聞こえることに由来する（以上はウィキの「ホロホロチョウ」に拠った）。[YouTube の Stories Of The Kruger の「Helmeted Guineafowl \(Numida meleagris\) Bird Call | Stories Of The Kruger」](#)の初めと終わりの方の鳴き声がそれらしく聴こえる。但し、動画中間部のそれは、警戒音と威嚇音で、かなり強烈なのでボリュームは低めにした方がいい。

「北極熊」哺乳綱食肉目クマ科クマ属ホッキョクグマ *Ursus maritimus*°」

秋の瞳

晩秋おそあきの濡ぬれにたる鐵柵てすりのうへに、
黄きなる葉の河やなぎほつれてなげく
やはらかに葬送はうむりのうれひかなでて、
過ぎゆきし Trombone いづちいにつむ。

はやも見よ、暮れはてし吊橋つりばしのすそ、
瓦斯がすとも點る……いぎたなき馬の吐息といきや、
騒さわぎやみし曲馬師チャリネシの樂屋がくやなる幕の青みを
ほのかにも掲かげつつ、水の面み見る女の瞳をんな ひとみ。

四十一年十二月

「やぶちゃん注」本篇は「葬送のうれひかなで」る「Trombone」（これは直後に呼称が生まれる「ジンタ」（明治中期に本邦で生まれた民間宣伝の市中音楽隊。その愛称は大正初期につけられた）や「曲馬師チャリネシ」というハイカラ趣味を横溢させておきながら、その小道具には「鐵柵」「河やなぎ」「吊橋」「水の面」を用い、近世まで差別されてきた大道芸人、「ホカイビト」「河原乞食」のイメージを確信犯で配してあることに注意しなくてはなるまい。

「曲馬師チャリネシ」曲馬団。所謂、当時の日本に複数生まれていたサーカス風見世物興行をする一座を指す総通称。小学館「日本大百科全書」の「サーカス」によれば、『日本における近代サーカスの始まりは、各種見世物が人気を博していた江戸時代末期の』元治元（一八六四）年に『横浜の居留地内で興行されたリズレー一座の「中天竺ちゅうてんじく舶来輕業」を契機にして、その後』、『次々に来日した外国サーカス団による影響に求められよう。これによって、それまで輕業、足芸、曲馬など芸種別に独立していた一座がまとまり始め、明治初期には近代サーカスの素地が形づくられていった。来日したサーカス団のなかでとくに強い影響を与えたのは』、明治一九（一八八六）年と三年後の明治二二（一八八九）年に『来日した「チャリネ大曲馬団」であった。チャリネとは、イタリア人キアリーニ Chiarini に由来するのであるが』（『日経新聞』公式サイト内の『[輕業師竹沢万次の謎を追う](#)』サーカスに見る日伯交流史Ⅱ第9回Ⅱチャリニ曲馬団同行説』によれば、この曲馬団一座は『米国カニフォルニア州を本拠地にして世界的に興行を行』っていた『チャリニ・サーカス団』（Circo Chiarini：ポルトガル語読みならば、『キアリーニ』で、『同サーカスの創立者』『ジゼッペ・チャリニ』（一八二三年～一八九七年）は十六『世紀から続く旅芸人の家系としてローマで出生、欧州、ロシアで芸の修業をし』、一八五〇年『頃から』、『英ロンドン、米ニューヨークで経営者としての経験を積み』、一八五六年に『キューバで自分のサーカス団を創立した』人物で、十九『世紀における最も影響力を持ったサーカス経営者』とする『最高の評価』さえ得た興行者で、『多国籍な団員を抱え、その当時に欧州、南北アメリカ大陸、オー

ストラリア、インド、アジアを巡業して回ったイタリア人コスモポリタン」であったとあり、『なんと日本には』三『回も巡業している』とある。『[馬事文化財団](#)』の作成になる『[横浜と馬、競馬の歴史](#)』の『サーカスがやってきた』には、橋本周延画になる「チャリネ大曲馬御遊覧ノ図」（明治一九（一八八六）年に皇居内吹上御所で行われた天覧チャリネ曲馬興行の錦絵が載り、その解説に同曲馬団は明治九（一八七四）年にも来日していることが判明した。そこには元治元年の「中天竺舶来輕業」の絵も載っている）、『これが一時期の日本では』、『サーカス風見せ物の代名詞ともなり』、明治二十、三十『年代にはチャリネを名のる一座も生まれた。その代表的なものに』、明治三二（一八九九）年に『発足した山本精太郎の「日本のチャリネ一座」がある』。『こうして外国の影響下にサーカス的な興行形態が整えられていくなかで、従来の日本の伝統的な見せ物の一部は衰退し、あるものは形を変えながら』、『近代サーカスへと引き継がれていく。衰退したものの代表に日本曲馬（馬芝居）があげられる。これは曲乗りよりも歌舞伎（かぶき）の趣向を加えた見せ物だっただけに、スピードやスリルが主軸であるサーカス興行にマッチしなかったためと考えられ』ている。『わが国の近代サーカスに黄金時代を築く幕開きとなったのは』、昭和八（一九三三）年の「万国婦人子供博覧会」を『記念して来日したドイツのハーゲンベック・サーカス団』（Circus Carl Hagenbeck）『である。そのスケールの大きさに加え、特等』四『円という当時としては破格の入場料に人々は仰天し、サーカスに対する認識を大きく書き換えることとなった。サーカスの哀愁を代表する『美しき天然』』やぶちゃん注：『[YouTube](#)の島倉千代子のわびさびすさび氏のそれをリンクさせておく。』とともに有名な『サーカスの唄』』やぶちゃん注：『[YouTube](#)の毘沙門氏の天北原謙二「サーカスの唄」をリンクさせておく。』は、このハーゲンベック来日記念歓迎レコード『来る来るサーカス』のB面に収められた歌である』。『これを機にチャリネ、輕業団、曲馬団を名のっていた一座の多くがサーカス団と名前をかえ、その数』三十『以上といわれた日本近代サーカスの黄金期を迎えるが、第二次世界大戦時に次々と解散に追い込まれた。しかし、サーカスは戦後いち早くテントもないままの青空の下での興行などによって復活し、ふたたび活況を呈した。現在の日本のサーカス団は木下、キグレ、矢野、カキヌマ、ホリデイン、国際の』六『団体で、いずれも常設小屋をもたず、テント興行を続けている』とある。また、英文であるが、『[サイト「Circopedia」（サーカス百科事典）](#)』には、『より詳しいCircopediaについての記事があり、その中の記事から、「チャリネ大曲馬団」の英語の正式名は「Signor Chiarini's Royal Italian Horse Troupe」で、それが後に「Chiarini's Royal Italian Circus」となったと書かれてあった。また、元治元年に来日して、興行したのは、アメリカの曲芸師でサーカス興行主であったリチャード・リスリー・カーライル（Richard Risley Carlisle 一八一四年〜一八七四年）で、『彼のウィキ』によれば、『仰向きに寝て、足で子供をジャグリングする技は「リスリー・アクト」（Risley act）という名前が付けられている』とあり、『横浜居留地にサーカス団を率いて来日し、西洋式のサーカスを日本で始めて興行し』、『また、『日本の芸人を組織し』て『帝国日本芸人一座』（Imperial Japanese Troupe）をつく』り、『アメリカのフィラデルフィアで』、一八六七年（慶応三年）に一ヶ月間、『興行した』ともある。』

空に眞赤な

空^{そら}に眞^{まっか}赤^{くも}な雲^{くも}のいろ。
玻^{はり}璃^りに眞^{まっか}赤^{さけ}な酒^{さけ}の色^{いろ}。
な^{そら}んでこの身^みが悲^{かな}しか^ろろ。
空^{そら}に眞^{まっか}赤^{くも}な雲^{くも}のいろ。

四十一年五月

秋のをはり

腐^{くさ}れたる林檎^{りんご}のいろに
なほ青^{あを}きにほひちらぼひ、
水^{すみ}薬^{やく}の汚^しみし卓^{つく}に
瓦斯^{がす}焔^{こん}爐^ろほのかに燃^もゆる。

病人^{やまうど}は肌^{はだ}ををさめて
愁^{うれ}はしくさしぐむごとし。
何^なぞ濕^{しめ}る、醫^い局^{きょく}のゆふべ、
見^みよ、ほめく劇^{げき}薬^{やく}もあり。

色^{いろ}冴^さえぬ室^{むろ}にはあれど、
聲^{こゑ}たててほのかに燃^もゆる
瓦斯^{がす}焔^{こん}爐^ろ……空^{そら}と、こころと、
硝^{がらす}子^{すど}戸^にに鈍^にばむさびしさ。

しかはあれど、寒^{さむ}きほのほに
黄^きの入^{いり}日^ひさしそふみぎり、
朽^くちはてし秋^{あき}の井^いオロン
ほそぼそとうめきたてぬる。

四十一年十二月

「やぶちゃん注…最終行三行目の「井」は御覧の通り、「井」に濁点で、「平」ではない。一字ではユニコードでも表記出来ないが、漢字の「井」をポイント落ちにし、濁点「ゝ」を上付き半角にして示した。」

十月の顔

顔なほ赤し……うち曇り黄ばめる夕、
『十月』は熱を病みしか、疲れしか、
濁れる河岸の磨硝子脊に凭りかかり、
霧の中、入日のあとの河の面をただうち眺む。

そことなき櫂のうれひの音の刻み……
涙のしづく……頬にもまたゆるきなげきや……

ややありて麴包の破片を手にも取り、
さは冷やかに香噛みしめて、来るべき日の
味もなき悲しきゆめをおもふとき……

なほもまた廉き石油の香に噎び、
腐れちらぼふ骸炭に足も汚れて、
小蒸汽の灰ばみ過ぎし船腹に
一きは赤く輝やきしかの窓枠を忍ぶとき……

月光ははやもさめざめ……涙さめざめ……
十月の暮れし片頬を
ほのかにもうつしいだしぬ。

四十一年十二月

接吻の時

薄暮^{くれがた}か、

日のあさあけか、

晝^{ひる}か、はた、

ゆめの夜半^{よは}にか。

そはえもわかね、燃^もえわたる若^{わか}き命^{いのち}の眩暈^{めくるめき}、
赤^{あか}き震慄^{おびえ}の接吻^{くちづけ}にひたと身顫^{みふる}ふ一刹那^{いつせつな}。

あな、見よ、青^{あお}き大月^{たいげつ}は西^{にし}よりのぼり、

あなや、また瘡病^{さやぐや}む終^{はて}の顫^{ふる}して

東^{あづま}へ落^おつる日の光^{ひかり}、

大^{おほ}ぞらに星^{ほし}はなげかひ、

青^{あお}く盲^{めし}ひし水面^{みづも}には藥香^{くすり}にほふ。

あはれ、また、わが立つ野邊^{のべ}の草^{くさ}は皆色^{みないろ}も干乾^{ひから}び、

折^ひり伏^ふせる人^{ひと}の骸^{かばね}の夜^よのうめき、

人靈^{ひとたましい}色^{いろ}の

木^きの列^{れつ}は、あなや、わが挽歌^{ひきうた}うたふ。

かくて、はや落穂^{おちぼ}ひろひの農人^{のうにん}が寒^ふき瞳^{ひとみ}よ。

歡樂^{よろこび}の穂^ほのひとつだに残^{のこ}さじと、

はた、刈^はり入^いる鎌^かの刃^{やいば}の痛^{いた}き光^{ひかり}よ。

野^ののすゑに獸^{けもの}らわらひ、

血^ちに饅^すえて汽車^{きしや}鳴^なき過^すぐる。

あなあはれ、あなあはれ、

二人^{ふたり}がほかの靈^{たましい}のありとあらゆるその咒咀^{のろひ}。

朝明^{あさあけ}か、

死^しの薄暮^{くれがた}か、

晝^あか、なほ生^あれもせぬ日^ひか、

はた、いづれともあらばあれ。

われら知る赤^{くちびる}き唇^{くちびる}。

「やぶちゃん注…「瘡」（ギヤク）訓では「おこり」と読む。古くから「わらはやみ」とも呼ばれ、毎日或いは隔日に定期的な発熱症状を起こす病気を指す。現在のマラリアである。古いところでは、作中人物ながら、「源氏物語」の光源氏が「若紫」の冒頭、「瘡病にわづらひたまひて」北山に加持祈禱を受けに行くことで知られ、「平家物語」の巻第六の「入道逝去」のシークエンスを見ると、平清盛の死因もこれと考えられるが、特に私はその前の巻五の「物怪（もつけ）」で、清盛が庭に無数の髑髏の見るのはマラリアによる熱性譫妄であると考えている。[ウィキの「マラリア」](#)によれば、本邦では明治三六（一九〇三）年の時点でも全国に年間二十万人にも及ぶ土着性マラリアの患者がいたが（本詩篇のクレジットは明治四十一年で一九〇八年）、その後、急速に減少し、大正九（一九二〇）年には九万人、昭和一〇（一九三五）年には五千人に激減した。戦中・戦後には復員者による一時的な急増があったが、減少傾向は続き、昭和三四（一九五九）年の彦根市での発症事例を最後に、土着マラリア患者は消滅したとある。私は海外のボランティア活動をしていた同僚教師で友人をマラリアで失った（[「亡き友へ 木蔭で――永野広務に」](#)）。

濁江の空

腐^{くさ}れたる林檎^{りんご}の如き日のにほひ
圓^{まる}らに、さあれ、光^{あま}なく甘^{あま}げに沈^{おそ}む
晩春^{おそはる}の濁^{にごり}重^{おも}たき靄^{うち}の内、
ふと、カキ色の輕氣球^{けいききゅう}くだるけはひす。

遠方^{をちかた}の曇^{くも}れる都市^{とし}の屋根^{やね}の色
たゆげに仰^{あふ}ぐ人はいま鈍^{にぶ}くもきかむ、
濁^{にごり}江^えのねぶたき、あるは、やや赤^{あか}き
にほひの空のいづこにか洩^もるる鐵^{てつ}の音^ね。

なやましき、さは江^えの泥^{どろ}の沈澱^{おどみ}より
あかるともなき灰紅^{くわいこう}の帆^ふのふくらみに
傳^{つた}へくる潜水夫^{もぐりのひと}が作業^{さげふ}にか、
鯨^すえたる吐息^{といき}そこはかと水面^{みのも}に黄^きばむ。

河岸^{かし}になほ物見^{ものみ}る子らはうづくまり、
はや倦^うましげに人形^{にんぎやう}をそが手に泣^なかす。
日暮^{ひくれ}どき、入日^{いりひ}に濁^{もや}る靄^{うち}の内、
また、ふくらかに輕氣球^{けいききゅう}くだるけはひす。

四十一年八月

「やぶちゃん注」第一連の「靄」にルビなく、最終連にあるのはママ。

「カキ色」カキ色。英語「Khaki」。黄色系の砂や土っぽい色であるが、特に軍服に用いられる淡い茶系色を指す。この英語はヒンディー語で「土埃色の」を意味する語が元であるが、そのヒンディー語も元はペルシャ語の「土埃」から借り入れた語である（[ウィキの「カキ色」に拠る](#)）。

「沈澱（おどみ）」「澱（よど）み」に同じい。但し、歴史的仮名遣は「をどみ」が正しいようである。」

魔國のたそがれ

うち曇る暗紅色の大きな日
魔法の國に病ましげの笑して入れば、
もの甘き驢馬の鳴く音にもよほされ、
このもかにもに惱ましき吐息ぞおこる。

そのかみの激しき夢や忍ぶらむ。
鬱黄の百合は血ににじむ眸をつぶり、
人間の聲して挑み、飛びかはし
鸚鵡の鳥はかなしげに翅ふるはす。

草も木もかの誘惑に化されつる
旅のわかうど、暮れ行けば心ひまなく
えもわかぬ毒の怨言になやまされ、
われと悲しき歡樂に怕れて顫ふ。

日は沈み、たそがれどきの空の色
青き魔藥の薰して古りつつゆけば、
ほのかにも誘はれ来る隊商の
鈴鳴る……あはれ、今日もまた恐怖の豫報。

はとばかり黙み戦くものの息。
色天鵝絨を擦るとき裳裾のほかは
聲もなく甘く重たき靄の闇、
はやも王女の領らすべき夜とこそなりぬ。

四十一年八月

「やぶちゃん注…「鬱黄」「鬱金」はこうも書く。ウコン色。鮮やかな黄色。黄金色。
「怨言」「託言」。古語で「不平・愚痴・恨みごと」の意がある。」

蜜の室

薄暮^{くれがた}の潤^{うる}みにごれる室^{むろ}の内^{うち}、
甘^くくも腐^{くさ}る百合^{ゆり}の蜜^{みつ}、はた、靄^{もや}ぼかし
色赤^{いろ}きいんくの饅^{びん}のかたちして
ひそかに點^{とも}る豆^{まめ}らんぷ息^{いき}づみ曇^{くも}る。

『豊國^{とよくに}』のぼやけし似顔^{にがほなま}生^{なま}ぬるく、
曇硝子^{くもがらす}の窓^{まど}のそと外光^{ぐわいくわう}なやむ。
ものの本^{ほん}、あるはちらばふ日のなげき、
暮^{くれ}れもなやめる靈^{たましひ}の金字^{きんじ}のにほひ。

接吻^{くちづけ}の長^{なが}き甘^{あま}さに倦^あきぬらむ。
そと手^てをほどき靄^{うち}の内^{うち}さぐる心地^{こころ}に、
色盲^{しきまう}の瞳^{ひとみ}の女^{をんな}うらまどひ、
病^やめるペリガンいま遠^{しめぢ}き濕^{しめぢ}地^ぢになげく。

かかるとき、おぼめき摩^{なす}る Violon の
なやみの絃^{いと}の手觸^{てさはり}のにほひの重^{おも}さ。
鈍^{にぶ}き毛^けの絨氈^{じゆたん}に甘^{みつ}き蜜^{やみ}の闇^{やみ}
澱^{おど}み饅^すえつつ……血^ちのごともらんぷは消^きゆる。

四十一年八月

「やぶちゃん注…「息^{いき}づみ」「息詰^{いき}み」。これには「息を詰めて腹に力を入れる」の意と、
「こらえる・辛抱する」の意があるが、「ひそかに點る」を受ける以上、後者の擬人法で
ある。

「豊國」最も知られるのは初代歌川豊国（明和六（一七六九）年～文政八（一八二五）
年）であるが（豊国の襲名者は本詩篇以前では四代目までいる）、「ぼやけ」たタツチの
「似顔」で「生ぬる」い感じは私は受けない。「ぼやけし」というのは或いは浮世絵の女
の顔のステロタイプというか、マネエリスム的な部分を言っているのかも知れない。

「ペリガン」ペリカン。「曇日^{くもひ}」で既出既注であるが、ここでは「ペリガン」となってい
たことは注記済みである。

井・オロン
「Violon」ルビは御覧の通り、「井」に濁点で、「ギ」ではない。一字ではユニコードでも
表記出来ないが、漢字の「井」をポイント落ちにし、濁点「ゝ」を上付き半角にして示し
た。

「絨氈^{じゆたん}」はママ。後発の作品集では「じゆうたん」となっているが、私は誤植とは思わな
い。「絨」には「ジュ（ジュ）」の音があるからであり、作者の五・七の音律からは「じゅ

たん（じゅたん）を選んで何らかしくないからである。実際、朗読して見た時、この部分に「じゅたん」の緩みが入るのでは、頗るコーダの雰囲気を躓かせ、壊すように思われるからでもある。」

酒と煙草に

酒と煙草さけ たばこにうつとりと、
倦めるうところを見まもれば、
それとしもなき靈たまのいろ
曇りながらに泣きいづる。

なにか嘆なげかむ、うきうきと、
三味しやみに燥はしやぐわがころ。
なにか嘆なげかむ、さいへ、また
靈たまはしくしく泣きいづる。

四十一年五月

「やぶちゃん注…「さいへ」既出既注であるが、再掲しておく、第二連三行目の「さいへ」は連語「然言さいへど」の接続助詞「ど」をカットしたもので、「そうは言っても」の意。本詩集の基本律の一つである五・七調定型詩に合わせるための仕儀である。」

鈴の音

日は赤し、窓の上に恐怖の鳥
ひた黙み暮れかかる砂漠を熟視む。

今日もまたもの鈍き駱駝をつらね、
一群のわがやから消えさりゆきぬ。
もの甘き鈴の音、ああそを聴けよ。

からら、からら、ら、ら、ら……

暮れのこるピラミドの暗紅色よ。

そが空のうち濁る重き空氣よ。

いづこにか月の色ほのめくごとし。

からら、からら、ら、ら、ら……

かの群よ、靄ふかく、いまかひろぐる
色鈍き、幽鬱の毛織の天幕。

駱駝らのためいきもそこはかとなり。

からら、からら、ら、ら、ら……

もの青く暮れてみな蒸しも見わかぬ。
鱧え温るむ空のをち、薄らあかりに、
ほのかにも此方見るスフィックスの瞳。

からら、からら、ら、ら、ら……

あはれ、その静かなるスフィックスの瞳。

ああ暗示……えもわかぬ夢の象徴。

またくいま埃及の夜とやなるらむ。

からら、からら、ら、ら、ら……

鳥いまはたと遠く飛び去り、
窓にただ色あかき燈火點る。

四十一年八月

「やぶちゃん注…第五連二行目「をち」は「遠ち」。「遠方」(をちかた(おちかた))。遠くの所。ずっと向こうの方。」

夢の奥

ほのかにもやはらかきにほひの園生。
あはれ、そのゆめの奥。日と夜のあはひ。
薄あかる空の色ひそかに顫ひ
暮れもゆくそのしばし、聲なく立てる
眞白なる大理石の男の像、
微妙じくもまた貴に瞑目りながら
清らなる面の色かすかにゆめむ。

ものなべてさは妙に女の眼ざし
あはれそが夢ふかき空色しつつ、
にほやかになやましの思はうるむ。
そがなかに埋もれたる素馨のなげき、
蒸し甘き沈丁のあるは刺せども
なにほどの香の痛み身にしおぼえむ。
わかうどは聲もなし、清く、かなしく。

薄暮にせきもあへぬ女の吐息
あはれその愁如し、しぶく噴水
そことなう節ゆるうゆらゆるなべに、
いつしかとほのめきぬ月の光も。
その空に、その苑に、ほの青みに
靜かなる歔歔泣きもいでつつ、
いづくにか、さまだる愛慕のなげき。

やはらかきほの熱る女の足音
あはれそのほめき如し、燃えも生れゆく
ゆめにほふ心音のうつつなきかな。
大理石の身の白み、面もほのかに、
ひらきゆくその眼ざし、なけば閉ぢつつ、
ゆめのごと空仰ぎ、いまぞ見惚るる。
色わかき夜の星、うるむ紅。

四十一年七月

「やぶちゃん注…第二連の「女」を「をみな」とルビし、第三連のそれを「をんな」とし、第四連に振らないのはママ。これでは第四連のそれをどう音読すればよいか、朗読で

は迷う。後のある選集では前二箇所を「をんな」として第四連に振らない。個人的にはしかし、幻想性を保持するために「をみな」で統一したくなる私がいる。

「素馨」被子植物門双子葉植物綱シソ目モクセイ科ソケイ属 *Jasminum* 或いは狭義には同属ソケイ *Jasminum grandiflorum* を指す。属名(ヤスミヌム)から判る通り、幾つかの種が例の強い芳香を放つ花を持つジャスミン(英語: *jasmine*) 類及びその一種である。南アジアのインドやパキスタンの高地に自生するが、本邦へは恐らくは種としてのソケイが江戸後期に中国から琉球を経て、薩摩に伝来したものかと思われる。素馨は漢名で。五代十国時代の劉隠(八七四年〜九一年:晩唐の節度使で後梁の南海王。十国南漢の基礎を作り上げた)の侍女に「素馨」という名の少女がおり、死んだ彼女を葬った場所にこの素馨の花が咲き、何時までも香りがあったという伝説が由来という説がある。

「沈丁」双子葉植物綱フトモモ目ジンチョウゲ科ジンチョウゲ属ジンチョウゲ *Daphne odora*。花が強い芳香を放つ。属名「*Daphne*」はギリシア神話でアポロンの求愛を拒んで月桂樹に変じた女神ダフネに因み、種小名「*odora*」は「芳香がある」の意である。この部分、幻想の庭園の孤独な青年像とその恋の、心内の美妙的な哀しき葛藤を、二つの強い芳香を発する二種を掲げて拮抗させ、嗅覚的なイリュージョンとして表現した卓拔なシークエンスと言えよう。

「如し」は特異な用法で一般的とは言えない。通常ならば現実の動作の「成し」であろうが、ここでは、「あたかもそうしているかのようにする」「そのように成しているかの如くに見える」という状態の比喩的ニュアンスを出し、幻想性を高めていると言える。

「そことなう節ゆるうゆらゆるなべに」「其處と無く、節、緩く緩らゆる奈(那)邊に」で「どこと確かに示すことはできないけれど、女の吐息が、艶なる、あたかもある音曲の節のように、行き去り難くとどまっているような、それが、あの辺りに」という意味で私は採った。」

窓

かかる窓ありとも知らず、昨日まで過ぎし河岸。
今日は見よ、
色赤き花に日の照り、かなしくも依依匂ふ。
あはれまた病める Piano も・・・

四十一年九月

「やぶちゃん注…四点リーダはママ。
「依依兒」この場合は、「赤き花の魔睡」に出た空間を満たす仮想物質としての「エーテル」ではなからう。そちらでは、北原白秋はそのエーテルに「光素」の漢字を与えているからで、しかも本篇は「かなしくも」そのエーテルが実際の臭気として「匂」ってくるのである。さすれば、彼が見上げた川岸の窓とは病院なのではなからうか。そこから麻醉剤としての「依依兒」＝ ether ＝ ethyl ether（エチル・エーテル）の薬物の臭いが漂ってくるのである。その推定の確信は続く終行の「あはれまた病める Piano も・・・」によって補完されていると私は思う。」

昨日と今日と

わかうどのせはしさよ。
さは昨日^{きのふ}世をも厭^{いと}ひて重格魯密母^{ぢゆうくろまむと}求めも泣きしか、
今朝^{けさ}ははや林檎^{りんご}吸^すひつつ霧深^{きふか}き河岸^{がし}路^ぢを辿る。
歌樂^{ががく}し、鳴らす木履^{きぐつ}に：：

四十一年十一月

「やぶちゃん注：四点リーダはママ。

「重格魯密母^{ぢゆうくろまむ}」重クロム酸ナトリウム。二^にクロム酸ナトリウム（英語：sodium

dichromate）に同じ。革鞣^{なめ}しに用いられる無機顔料、染料・染色（木綿・毛織などの染色と捺染の媒染）、金属表面処理（金属着色）や腐食抑制剤として広く用いられるが、人体には有害と考えられており、「毒劇物取締法」で劇物として指定されている。また、現在では発癌性を持つことでも知られる。」

わかき日

『かくまでも、かくまでも、
わかうどは悲^{をみな}しかるにや。』

『さなり、女、

わかき日^{さい}には、
ましてまた才^{さい}ある身には。』

四十一年十一月

「やぶちゃん注」標題位置が上がっているのはママ（この標題位置の移動は以降の詩篇でも頻繁に見られるので、以降は特に注さない。次の「謀叛」に添えた「朱の伴奏」の底本画像を見られたい。本篇を以って第一部分「魔睡」は終わっている。なお、次のパート標題「朱の伴奏」の注にあるリンク先に本詩篇の原画像が右ページにあるので見られたい。」

朱の伴奏

「やぶちゃん注…[パート標題（赤字で右から左）と挿絵（石井柏亭）](#)。「魔睡」の最終篇「わかき日」と見開きなので、一緒にトリミングした。「朱」は「こほろぎ」に出る音「しゅ」（しゅ）で読んでおく。

以下の散文詩はこのパート標題ページの裏に記されている。底本は中央に極くポイント落ちで六行で書かれてある。句点の後の有意な字空けはママ。」

凡て情緒也。 静かなる精舎の庭にほのめきいでて紅の戦慄に盲ひたる井、オロンの響はわが内心の旋律にして、赤き絶叫のなかにほのかに啼けるこほろぎの音はこれ亦わが情緒の一絃によりて密かに奏でらるる愁也。 なげかひ也。 その他おほむね之に倣ふ。

謀 叛

ひと日、わが精舎の庭に、
晩秋の静かなる落日のなかに、
あはれ、また、薄黄なる噴水の吐息のなかに、
いとほのに井オロンの、その絃の、
その夢の、哀愁の、いとほのにうれひ泣く。

蠟の火と懺悔のくゆり
ほのぼのと、廊いづる白き衣は
夕暮に言もなき修道女の長き一列。
さあれ、いま、井オロンの、くるしみの、
刺すがごと火の酒の、その絃のいたみ泣く。

またあれば落日の色に、
夢燃ゆる、噴水の吐息のなかに、
さらになほ歌もなき白鳥の愁のもとに、
いと強き硝薬の、黒き火の、
地の底の導火燵き、井オロンぞ狂ひ泣く。

跳り来る車輛の響、
毒の彈丸、血の烟、閃めく刃、
あはれ、驚破、火とならむ、噴水も、精舎も、空も。
紅の、戦慄の、その極の
瞬間の叫喚燵き、井オロンぞ盲ひたる。

こほろぎ

微^{ほの}にいまこほろぎ啼^なける。

日か落つる——眼^めをみひらけば
朱^{しゆ}の畏^{おそれ}怖^{おそれ}くわと照^てりひびく。
内心^{ないしん}の苦^{にが}きおびえか、
めくるめく痛^{いた}き日の色
眼^めつぶれど、はた、照^てりひびく。

そのなかにこほろぎ啼ける。

とどろめく銃^{つゐ}音^{おと}しばし、
瘡^{きず}つける惡^{あく}のうごめき
そこここに、あるは疲^{つか}れて
轢^しきなやむ砲^{はう}車^{しゃ}のあへぎ、
逃^にげまどふ赤^{あか}きもろごゑ。

そのなかにこほろぎ啼ける。

盲^{めし}ひ、ゆく戀^{こひ}のまぼろし——
その底^{うづ}に疼^{うづ}きくるしむ
肉^{しむら}の鋭^{すざと}き絶^{さけ}叫^び、
はた、暗^{くら}き曲^{まが}の死^しの樂^{がく}
靈^{たま}ぞ彈^{たま}きも連^つれぬる。

そのなかにこほろぎ啼ける。

あなや、また呻^{うめ}吟^ぎは洩^もるる。
鉛^{なまり}めく首^{くび}のあたりゆ
幽^{いう}界^{かい}の呪^{のろ}咀^ひか洩^もるる。
寢^ねがへれば血^ちに染^ふみ顫^{ふる}ふ
わが敵^{かたき}面^{おも}ぞ死^しにたる。

そのなかにこほろぎ啼ける。

はた、裂^さくる赤^{あか}き火^かの彈^{たま}丸^ま

た、と笑ふ、と見る、我^{われ}燬^やき
我^まならぬ獸^{けもの}のつらね
眞^ま黒^{くろ}なる樂^{がく}して奔^{はし}る。
執^し念^{ふねん}の闇曳^はき奔^{はし}る。

そのなかにこほろぎ啼^なける。

日や暮^くるる。我^{われ}はや死^しぬる。
野^のをあけて末^{まつ}期^ごのあらび――
暗^{くら}き血^ちの海^{うみ}に溺^{おぼ}るる
赤^{あか}き悲^ひ苦^く、赤^{あか}きくるめき、
ああ、今^{いま}し、くわとこそ狂^{くる}へ。

微^ほになほこほろぎ啼^なける。

四十年十二月

「やぶちゃん注…標題開始位置はママ。見落とされる老婆心から言い添えておくと、第十連二行目の頭の字「た」はオノマトペイアで、右に傍点「、」が打たれてある。」

序 樂

ひと日、わが想の室の日もゆふべ、
光、もののね、色、にほひ—— 聲なき沈黙
徐にとりあつめたる室の内、いとおもむろに、
薄暮のタンホイゼルの譜のしるし
ながめて人はゆめのごとほのかにならぶ。

壁はみな鈍き愁ゆなりいでし
象の香の色まろらかに想鎖しぬれ、
その隅に瞳の色の窓ひとつ、玻璃の遠見に
冷えはてしこの世のほかの夢の空
かはたれどきの薄明ほのかにうつる。

あはれ、見よ、そのかみの苦惱むなしく
壁はいたみ、圓柱熔けくづれて
朽ちはてし熔岩に埋るるポンペイを、わが幻を。
ひとびとはいましゆるかに絃の弓、
はた、もろもろの調樂の器をぞ執る。

暗みゆく室内よ、暗みゆきつつ
想の沈黙重たげに音なく沈み、
そことなき月かげのほの淡くさし入るなべに、
はじめまづ井、オロンのひとすすりなき、
鈍色長き衣みな瞳をつぶる。

燃えそむるヴェス井、アス、空のあなたに
色新しき紅の火ぞ噴きのぼる。
廢れたる夢の古墟、さとあかる我室の内、
ひとときに渦巻きかへす序のしらべ
管絃樂部のうめきより夜には入りぬる。

四十一年二月

「やぶちゃん注：第一連二行目のダッシュの後の字空けは見た目のママ。
「タンホイゼル」「楽劇王」の異名を持つヴィルヘルム・リヒャルト・ワーグナー
(Wilhelm Richard Wagner 一八一三年～一八八三年) が作曲した、全三幕構成のオペラ
「タンホイザーとヴァルトブルクの歌合戦」(Tannhäuser und der Sängerkrieg auf Wartburg)

の略称。一八四五年十月ドレスデン宮廷歌劇場。詳しくは[ウィキの「タンホイザー」](#)を参照されたい。因みに、私はヴァルトブルク城に泊まったことがある。

「熔岩^{ラヴァ}」lava。英語。この語の語源はまさに「ポンペイ」と関わる。イタリア語で「濁流」の意で、紀元後七九年にヴェスヴィオ火山（イタリア語：Il monte Vesuvio：イタリア・カンパニア州にある火山。ナポリから東へ約九キロメートルのナポリ湾岸にある）が噴火した際に、その溶岩流を「lava」と呼んだことに基づくからである。

「ポンペイ」ラテン語で「Pompeii」、イタリア語で「Pompei」。イタリア・ナポリ近郊にあった古代都市。私は二度、行った。」

納曾利

入日のしばし、空はいま雲の震慄のあかあかと
鋭にわかく、はた、苦く狂ひただる樂の色。
また、高窓の鬱金香。かげに斃るる白牛の
眉間のいたみ、憤怒。血に笑む人がさけびごゑ。

さあれ、いま納曾利のなげき……

鈍き思の灰色の壁の家に、

吹き鳴らす古き舞樂の笙の節、

納曾利のなげき……

納曾利のなげき、ひとしなみ

おほらにほふ雅樂寮の古きいみじき日の愁、

納曾利の舞の

人のゆめ、鈍くものうき足どりの裾ゆるらかに、

おもむろの振のみやびの舞あそび、

納曾利のなげき……

くりかへし、さはくりかへし、

ゆめのごと後に連るる笙の節、

笛のねとりもすずろかに、廣き家内に、

おなじことおなじ嫋にくりかへし、

舞へる思の

倦める思のにはやかさ、

ゆるき鞆鼓の

音もにぶく、

古き納曾利の舞をさめ……

今しも街の空く消ゆる光のわななきに、

ほのかに青く、なほ苦く顫ひくづるる雲の色。

また、浮きのこる鬱金香。暮れて果てたる白牛の

聲なき骸。人だかり、血を見て黙す冷笑。

四十一年七月

「やぶちゃん注…本篇の第一連の終わった七八ページの左に挿入されている山本鼎の何処かの木場の挿絵。本篇第一連を含む見開きで示した。山本鼎（かなえ 明治一五（一八八

二)年(昭和二一(一九四六)年は画家・版画家。愛知県岡崎市生まれ。桜井曉雲に木口本版を学ぶ。東京美術学校卒業。明治四〇(一九〇七)年、本詩集装幀を取り仕切っている石井柏亭らと美術雑誌『方寸』を創刊し、創作版画運動を起こした。春陽会等に油絵を発表するとともに、日本創作版画協会・日本版画協会創立の立役者となり、日本近代版画の確立と普及に尽力した。この間、一九一九年から一九一六年にはフランスに遊学。帰国の途次、ロシア農民美術に啓発され、長野県上田近郊に日本農民美術研究所を設立、農家の副業としての農民美術の育成に努めた(平凡社「世界大百科事典」に拠る)。本作は

「[山本鼎アーカイブズ](#)」の[こちら](#)で、原画は明治四二(一九〇九)年の作品で(本詩集は明治四十二年三月十日印刷)、十八・九×十三・二センチメートルであることが判る。

「納曾利」雅楽のなかの高麗楽こまがくの曲名。「納蘇利」とも書く。高麗こま耆越調ちこつに属する。曲の由来は明らかでない。二人舞。二頭の竜りゅうが舞い戯れるさまをかたどったものといわれ、「双竜舞」の別称もある。笛の「小乱声」という前奏曲に続いて(他の辞書等の記載を見ると、この序に当たる部分は伝わっておらず、従って現在演奏される「序」は元来の本曲のものではない。また、白秋の本篇の大きな三パートの構成(中間部三連が総て一字下げ)は思うにその序破急を模したもののようにも思われる)、この曲の破と急が舞われる。音楽も舞いも、リズムカルで変化に富んでおり、曲の構成が整った名曲である。舞人は裱襠装束りょうどうそうそく(「うちかけ」とも読み、「打掛」とも書く。古代の武官の礼服らいふくに用いられる衣服で、貫頭衣かんとういの一種。長方形の布を二つ折りにし、中央の穴に頭を通して着用し、上から帯を締める。錦で作られ、縁どりが施されている。舞楽の装束の裱襠装束は金欄で縁どりしたものと、毛皮のような房飾りの附いたものがある)に、長く毛を垂らした濃い緑色の面をつけて、細長い銀色の髯ほちを持つ。正式には左方さほうの「陵王」という曲と対を成して舞われる。但し、「納曾利」を一人で舞うこともあり、この時の舞いは別して「落蹲」と呼ぶ。但し、春日大社に伝承される「納曾利」は一人舞で、「落蹲」のほうが二人舞である(以上は主文を「ブリタニカ国際大百科事典」に拠った)。[YouTube](#)のチャンネル「雅楽」の「[納曾利](#)」をリンクさせておく。

「ねとり」「音取」。雅楽に於いて、管弦合奏の始めに作法として行う一種の序奏。楽器の音調を整え、雰囲気醸成する。」

ほのかにひとつ

罌粟^{けし}ひらく、ほのかにひとつ、
また、ひとつ……

やはらかき麥生^{むぎふ}のなかに、
軟風^{なよかぜ}のゆらゆるそのに。

薄^{うす}き日の暮^{つき}るとしもなく、
月^{つき}しろの顫^{ふる}ふゆめちを、

縋^{もつ}れ入るピアノの吐息^{といき}
ゆふぐれになぞも泣かるる。

さあれ、またほのに生^あれゆく
色あかきなやみのほめき。

やはらかき麥生^{むぎふ}の靄^{なよかぜ}に、
軟風^{なよかぜ}のゆらゆる胸に、

罌粟^{けし}ひらく、ほのかにひとつ、
また、ひとつ……

耽溺

あな^{かな}悲^あし、紅^{あか}き帆^ほきたる。
聽^きけよ、今^{いま}、紅^{あか}き帆^ほきたる。

白日^{はくじつ}の光^ひの水^み脈^をに、
わが戀^きの器^が樂^くの海^みに。

あはれ、聽^{すがきこ}け、光^{むせ}は噎^むび、
海^{めぐる}顫^{かなしみ}ひ、清^{はて}搔^は焦^はがれ
眩^{めくる}暈^{めくる}めく悲^{かなしみ}愁^{はて}の極^{はて}、
苦^{もたえ}悶^{もたえ}そふ歡^{よろこび}樂^{よろこび}のせて
キュラソオの紅^{あか}き帆^ほひびく。

彈^ひけよ、彈^ひけ、毒^{どく}の井^い。オロン
吹^ふけよ、また媚^{びやく}藥^{やく}の嵐^{あらし}。
あはれ歌^{うた}、あはれ幻^{まぼろし}、
その海^{うみ}に紅^{あか}き帆^ほ光^ひる。

海^{うみ}の歌^{うた}きこゆ、このとき、
『噫^{あゝ}、かなし、炎^{ほのほ}よ、慾^{よく}よ、
接吻^{くちづけ}よ。』

聽^きけよ、また苦^{にが}き愛^{あい}着^{ちやく}、
肉^{しん}のおびえと恐^{おそ}怖^{おそ}、
『死^しねよ、死^しね』、紅^{あか}き帆^ほ響^{ひび}く、
『戀^{こひ}よ、汝^なよ。』

彈^ひけよ、彈^ひけ、毒^{どく}の井^い。オロン
吹^ふけよ、また媚^{びやく}藥^{やく}の嵐^{あらし}。

一瞬^{ひととき}よ、——光^ひよ、水^み脈^をよ、

樂^{がく}の音^ねよ——酒^{しゅ}のキュラソオ、
接吻^{くちづけ}の非^ひ命^{めい}の快^{けい}樂^{らく}、
毒^{どく}水^{すい}の火^かのわななきよ。

狂へ、狂へ、破滅の渚、
聴くははや樂の大極、
狂亂の日の光吸ふ
紅き帆の終のはためき。

死なむ、死なむ、二人は死なむ。

紅き帆きゆる。
紅き帆きゆる。

四十年十二月

「やぶちゃん注…「清搔」幾つかの意味があるが、原義を当てる。和琴の手法の一つで、全部の弦を一度に弾いて、手前から三番目又は四番目の弦の余韻だけを残すように、他の弦を左指で押さえるもの。

「キュラソオ」Curacao（フランス語）。リキュール的一种。古くからオランダが主産地で、現在もオランダ自治領であるカリブ海のクラサオ（キュラソー）島特産のビター・オレンジの未熟果の果皮を乾燥させ、基酒であるラムに浸出したもの。フランス産キュラソーはブランデーを基酒とする。オレンジ色のオレンジ・キュラソーや無色のホワイト・キュラソーなどがあり、アルコールは約四十度と高く、カクテルによく用いられる。ブルー・キュラソーの色がよく知られるが、オレンジ・キュラソーを樽熟成させたものは褐色を帯びる。ここで出た二箇所のは、後者はそのままであるが、前者は、その色を想像の航海する帆船の色に転じたものである。

「非命」天命でなく、思いがけない災難で死ぬこと。横死。」

といき

おほそら いりひ
大空に落日ただよひ、
旅しつづ燃えゆく黄雲。
そのしたの伽藍の蓑
なかばぎ
半黄になかばほのかに、
うすやみ らふ
薄闇に蠟の火にほひ、
まろはしら
圓柱またく暮れたる。

ほのめくは鳩の白羽か、
敷石の闇にはひとり
めじひ
盲の子ひたと膝つけ、
しやくはちふ
ほのかにも尺八吹ける、
おひわけ
あはれ、その追分のふし。

四十年十二月

「やぶちゃん注」底本には二箇所 of 難しい点がある。

まず、第一連の「黄」であるが、底本は明らかに「き」ではなく、「ぎ」と振つてある。
現行のものは、総て「き」であるが、後発の白秋自身の編集になる昭和三（一九二八）年ア
ルス刊の「白秋詩集Ⅱ」（国立国会図書館デジタルコレクション当該詩篇の画像）でも、明
らかに「ぎ」と振っている。「浅黄」などで判る通り、本字は正規の音ではないが、慣用読
みで「ぎ」が存在する以上、ここは「き」とする。

次に、二連構成という点にある。実は底本の初版本では、この一篇は見開きに印刷されて
あり、「ほのめくは鳩の白羽か、」以下が左ページに配されてある。ところが、他の詩篇の各
ページの開始位置を見ても、この前に一行分を開けている事実は組版上では認められない。
前の「圓柱またく暮れたる。」は版組の最終行であり、「ほのめくは鳩の白羽か、」は版組の
第一行相当なのである。されば、素直に版組を正規としてとるならば、この詩篇を一連構成
として採ることは極く尋常な読みではある（私は如何なる詩集でもこの検証をして、行空け
の有無を確認して読んでいるからである）。しかし、詩想から言えば、ここはやはり切れて
いると採るのが自然ではあるし、先に示したアルス版を見ると、悩ましいのだが、そこでも
改ページとなっているものの（ここ）、右下方のノンブルとの間に他のページと比して、明
らかに一行分の空けが施されていることが判る。されば、ここは現行の諸詩集と同様に一行
空けて、二連構成と採った。これは本詩集でこの篇の前後には、十一行に及ぶ連を作らない
一篇完結の詩篇が見当たらないからでもある。但し、後の「天草雅歌」には八篇出現し、そ
の後にも「紅玉」・「大寺」・「ひらめき」・「凋落」の四篇がある（孰れも十一行以上で、字下
げなどもないもののみを数えた）ことは言い添えておく。則ち、絶対的にここに一行空けが
「ある」として、これを問題にしないことは、本詩の原稿に当たらない限りは、あり得ない

ということである。但し、白秋は、本詩集では、改ページを強く意識して、詩篇の開始位置をズラしている事実もある。例えば、次の「黒船」が最たるもので、これは「九二」ページの見開きで始まるが、標題「黒船」のみが「九二」ページの最終行から一行後相当の位置にあって、最終行は空け、則ち、標題の「黒船」だけでその前の「九二」ページの部分は真っ白なのである。[これ](#)である。私は多くの詩集の初版を見てきたが、ここまで徹底したものは、そうそう見られる仕儀ではない。脱帽である。さればこそ、ここは二連構成として問題はないということで、私は納得しているとは言えるのである。ただ、意地悪く言わせて貰えば、そうした詩人は多かつただろう。しかし、ページ数が有意に増大すれば、金がかかる。白秋は父の金でこの贅沢な詩集を刊行した。誤植まみれの[宮澤賢治の詩集「心象スケッチ春と修羅」](#)（リンク先は私の正規表現注釈版。ああっ！そこでは[扉の標題のそれからして「心象スケッチ」](#)なのだ！）を考える時、私は何か悶々とした思いに驅られるのである。」

黒 船

黒煙ほのにひとすぢ。……

あはれ、日は血を吐く悶あかあかと
濡れつつ淀む惡の雲そのとどろきに
燃え狂ふ戀慕の樂の斷末魔。

遠目に濁る蒼海の色こそあかれ、
黒潮の水脈のはたての水けぶり、
はた、とどろ撃つ毒の砲彈、清しき喇叭、
薄暮の朱のおびえの戦に
疲れくるめく衰ぞああ音を搾る。

黒煙またもふたすぢ。――

序のしらべ絶えつ續きつ、いつしかに
黒き惱の旋律ぞ渦巻き起る。

逃げ來るは密獵船の旗じるし、
疾き噎ぶ血と汚穢、はた憤怒
おしなべて黄ばみ騒立つ樂の色。

空には苦き嘲笑に雲かき亂れ、
重りゆく煩悶のあらびはやもまた
黒き恐怖のはたためき海より煙る。

黒煙三すぢ、五すぢ。――

幻法のこれや苦しき脅迫
いと淫らかに蒸し挑む疾風のもとに、
現れて眞黒に歎く樂の船、

生あをじろき鱧の腹ただほのぼのと、
暮れがての赤きくるしみ、うめきごゑ、
血の甲板のうへにまた爛れて叫ぶ
樂慾の破片の砲彈ぞ慄ける。

ああその空にはたためく黒き帆のかげ。

黒煙終に七すぢ。――

吹きかはす銀の喇叭もたえだえに、
渦巻き猛る樂の極、蒼海けぶり、
惡の雲とどろとどろの亂擾に
急忙しくも呪はしき夜のたたずまひ。

濡れ焙^いぶる水無月ぞらの日の名残^{なごり}
はた搔^あき濁^あし、暗澹^{あんたん}と、あはれ黒船^{くろふね}、
眞黒^{まぐろ}なる管絃^{オケストラ}樂^らの帆^ひの響^{ひびき}
死^しと悔恨^{くわいこん}の闇擾^{みだ}し壊^{くづ}れくづるる。

四十一年二月

「やぶちゃん注：前の「といき」の注で示した通り、冒頭に標題と第一連の見開き原画像（「九二」ページと「九三」ページ）を掲げておいた。なお、第一連の末尾のリーダはかすれているが、後の連の冒頭のようにダッシュとは判断出来ず、六点リーダのズレである。後発の白秋自身の編集になる昭和三（一九二八）年アルス刊の「白秋詩集Ⅱ」（国立国会図書館デジタルコレクション当該詩篇の画像）では確かにダッシュではあるが、ここは正規表現版として六点リーダで示した。

「樂慾^{げう}」この場合の「樂」は「願う」の意で、「願い求めること・欲望」の意。この音「ガウ（ゴウ）」「ゲウ（ギョウ）」は表外音であるが、呉音から転じたものらしい（ネット上で調べるに根拠は薄弱らしい）仏教用語の慣用音である。」

地 平

あな哀れ、今日もまた銅の雲をぞ生める。
あな哀れ、明日も亦鈍き血の毒をや吐かむ。

見るからにただ熱し、心は重し。
察るだにいや苦し、愁はおもし。

かの青き國のあこがれ、
つねに見る地平のはてに、
大空の眞晝の色と、
連れて弾く緑ひとつら。

その緑琴柱にはして、
弾きなづむ鳩の羽の夢、
幌の星、劍のなげき、
清搔はほのかに薫ゆる。

さては、日の白き恐怖に
靜かなる太鼓のとりぎ、
晝領らす神か拊たせる、
ころころとまたゆるやかに。

また絶えず、吐息のつらね
かなたより笛してうかび、
こなたより絃して消ゆる、――
ほのかなる夢のおきふし。

しかはあれ、ものなべて壓す
南國の熱病雲ぞ
猥らなる毒の謠言
とどろかに歌かき濁す。

おもふ、いま水に華さき、
野に赤き駒は斃れむ。
うらうへに病ましき現象
今日もまたどよみわづらふ。

あな哀れ、あは 昨きのの日も銅あかがねのなやみかかりき。
あな哀れ、明日もまた鈍にぶき血にじりの濁にごりかからむ。

聴くからにただ熱あつし、心は重し。
思ふだにいやくるし、愁は重し。

四十年十二月

「やぶちゃん注」・「清搔すががき」「耽溺」に既出既注であるが、再掲する。幾つかの意味があるが、原義を当てる。和琴わごんの手法の一つで、全部の弦を一度に弾いて、手前から三番目又は四番目の弦の余韻だけを残すように、他の弦を左指で押さえるもの。

「拊うたせる」「打たせる」に同じ。或いは「軽く叩かせる」の意でもある。遠い雷鳴と読むが、少なくとも、後の「ころころとまたゆるやかに」強烈に叩かせるようにの意ではない。」

ふえのね

ほのかに見ゆる青き頬、
あな、あな、玻璃のおびゆる。

かなたにひびく笛のね、……
青き頬ほのに消えゆく。

室にもつるふえのね、……
ふたつのにほひ盲ひゆく。

きこえずなりぬふえのね、……
内と外とのなげかひ。

またしも見ゆる青き頬。
あな、また玻璃のおびゆる。

下枝のゆらぎ

日はさしぬ、白楊はくやうの梢こずゑに赤く、
さはあれど、暮れ惑まどふ下枝しづえのゆらぎ……

水みづの面おものやはらかきにほひの嘆なげき
波なみもなき病やましさに、漣とろみうつれる
晩春おそはるの窓閉とざす片側街かたかはまちよ、
暮れなやむ靄うちつつみの内鼓うちづつみをうてる。

いづこにか、もの甘き蜂はちの巢すのこゑ。
幼子をさなこのむれはまた吹笛フルウト鳴らし、
白楊はくやうの岸きしにそひ曇きり黄きばめる
教會けうくわいの硝子窓がらすまどながめてくだる。

日はのこる兩側もうがはの梢こずゑにあかく、
さはあれど、暮れ惑まどふ下枝しづえのゆらぎ……

またあれば、公園こうえんの長椅子ベンチにもたれ、
かなたには戀慕れんぼびと苦惱なやみに抱く。
そのかげをのどやかに嬰兒あかご匍はひいで
驚がとりの鳥とを捕らむとて岸きしゆ落ちぬる。

水面みづのなるひと騷擾さやぎ、さあれ、このとき、
驀然ましからに急いぎくる一列ひとつらの郵便馬車いうびんばしやよ、
薄闇うすやみににほひゆく赤き曇くもりの
快こころよさ、人はただ街まちをばながむ。

燈點あかりともる、さあれなほ梢こずゑはにほひ、
全またくいま暮れはてし下枝しづえのゆらぎ……

四十一年八月

「やぶちゃん注」…「白楊はくやう」後の「冷めがたの印象」では白秋「白楊やまならし」と読んでいる。これは音数律の關係上での読みの違いであると考えられ、後に引用で示すように、他にも「白楊」を用いて「ほびゆら」「はこやなぎ」ともルビするのであるが、これはまず、キントラノオ目ヤナギ科ヤマナラシ属ヨーロッパヤマナラシ変種ヤマナラシ *Populus tremula* var. *sieboldii* と採って問題ないと思う。「ヤマナラシ」は「山鳴らし」で、葉がわずかな風にも

揺れて鳴ることに由来する標準和名なのだが（この「さざめき」は本篇の「下枝のゆらぎ」と親和性があり、また、白秋好みであるように私は思う）、ヤマナラシは木製の箱の材料にするところ「ハコヤナギ」（漢字表記は「箱柳」「白楊」）の別名がある。但し、白楊には、今一種、同じヤマナラシ属ドロノキ *Populus suaveolens* の別名としてもあるから、それを同定候補と挙げぬわけにはゆかぬ。ドロノキは水分の多い土壌を好み、よく川岸や湿地などに生えている点では、第二連の光景との親和性を持つとも言える。但し、ドロノキは日本では北海道から中部地方かけてに分布が限定される点では、「邪宗門」総体の空間的な漠然とした南蛮・南方といった属性とは、ややズレがあるように思われる。両者は孰れも属名は「ポピュラス」であるから、言い換えだけを採り上げる限りは、圧倒的にヤマナラシが有利で、白秋が熊本生まれで福岡の柳川育ちであることから、ヤマナラシの方に遙かに分がある。但し、以前に示した、[今野真二氏の論文「イメージの連鎖―詩的言語分析の覚え書き―」](#)（『清泉女子大学人文科学研究所紀要』第三十七号・二〇一六年三月。PDFでダウン・ロード可能）の最後には（読みはルビではなく、本文）、『邪宗門』には、「白楊（はくやう）」（下枝のゆらぎ・暮春）「白楊（ほびゆら）」（月の出）「白楊（やまならし）」（冷めがたの印象）「白楊（はこやなぎ）」（赤き恐怖）のように漢字列「白楊」がしばしば使われている。漢字列「白楊」は、『ハクヨウ』『ポピュラ』『ヤマナラシ』『ハコヤナギ』といった異なる語にあてられているのであって、白秋の意識は語そのものではなく、漢字列側にあつたようにもみえなくはない。そうであるとすれば、語を離れた漢字列そのものが表現の手段であつたとみることができ、きわめて興味深い」と記されていることを考えると、この「白楊」を植物学的に特定種に規定すること自体は、或いは詩想の解析には重要な意味を持たないとも言えるのかも知れない。白秋の詩語への独特のフェティシズム的嗜好は確かにある。」

雨の日ぐらし

ち、ち、ち、ち、と、もののせはしく
刻む音……

河岸のそば、
微の香のしめりも暗し、

かくてあな暮れてもゆくか、
驛遞の局の長壁
灰色に、暗きうれひに、
おとつひも、昨日も、今日も。

さあれ、なほ薰りのこれる
一列の紅き花罍粟
かたかげの草に濡れつつ、
うちしめり浮きもいでぬる。

雨はまたくらく、あかるく、
やはらかきゆめの曲節……

ち、ち、ち、ち、と絶えずせはしく
刻む音……

角窓の
玻璃のくらみを
死の報知ひまなく打電てる。

さてあればそこはかとなく
出でもゆく
薄ぐらき思のやから
その歩行夜にか入るらむ。

しばらくは
事もなし。

かかる日の雨の日ぐらし。

ち、ち、ち、ち、とものせはしく

刻む音……

さもあれや、

雨はまたゆるにしとしと
暮れもゆくゆめの曲節……

いづこにか鈴の音しつつ、
近く、

はた、遠のく軋、
待ちあぐむ郵便馬車の
旗の色見えも来なくに、
うち曇る馬の遠嘶。

さあれ、ふと

夕日さしそふ。
瞬間の夕日さしそふ。

あなあはれ、

あなあはれ、
泣き入りぬ罌粟のひとつら、
最終に燃えてもちりぬ。

日の光かすかに消ゆる。

ち、ち、ち、ち、とものせはしく
刻む音……

雨の曲節……

ものなべて、

ものなべて、

さは入らむ、暗き愁に。

あはれ、また、出でゆきし思のやから
歸り来なくに。

ち、ち、ち、ち、とものせはしく
刻む音……

雨の曲節……

灰色の局は夜に入る。

「やぶちゃん注…私の好きな半翅（カメムシ）目同翅（ヨコバイ）亜目セミ上科セミ科セミ亜科ホソヒグラシ族ヒグラシ属ヒグラシ *Tanna japonensis* の詩。私はもう楽曲を聴くことが殆んどない。作業しながら聴くのは専ら——亡きアリスと散歩しながら聴いた——それだ。例えば——YouTube の TOMOKI Nature Sounds & Landscapes の【睡眠用 BGM】ひ

ぐらしの鳴き声と川のせせらぎ」——

「驛遞の局」郵便局。

「死の報知ひまなく打電てる」電話による電報が開始されるのは明治二三（一八九〇）年で、それまでは郵便局で電報を扱っていたから、これは、或いは白秋の記憶の幼少期の記憶に基づくとすれば（彼は明治一八（一八八五）年一月二十五日生まれ）、この電報を打っている場所はやはり同じ「驛遞局」であると考えてよいと私は思う。但し、これは言わずもがな、実際の訃報電報の打電音ではなく、ヒグラシの音を不吉なそれにオノマトペイアとしたもの。その気持ちはひどく判る。」

狂人の音楽

空氣は甘し……また赤し……黄に……はた、緑……

晩夏の午後五時半の日光は晷を見せて、
蒸し暑く噴水に濡れて照りかへす。
瘋癲院の陰鬱に硝子は光り、
草場には青き飛沫の茴香酒冷えたちわたる。

いま狂人のひと群は空うち仰ふぎ―
饗宴の樂器とりどりかき抱き、自棄に、しみに、
傷つける獸のごとき雲の面
ひたに怖れて色盲の幻覺を見る。

空氣は重し……また赤し……黄に……はた緑……

* * * * *

オボー鳴る……また、トロムボオン……
狂ほしき井、オラの唸……

一人の酸ゆき音は飛びて怜羊となり、
ひとつは赤き顔ゑがき、笑ひわななく
音の恐怖……はた、ほのしろき髑髏舞……

弾け弾け……鳴らせ……また舞踏れ……

セロの、喇叭の蛇の香よ、
はた、爛れ泣く井、オロンの空には赤子飛びみだれ、
妄想狂のめぐりにはバツソの盲目
小さな骸色の呪咀して逃れふためく。

弾け弾け……鳴らせ……また舞踏れ……

クラリネットの槍尖よ、
メロデア
曲節のひらめき緩く、また急く、

アルト歌者のなげかひを暈ましながら、
一列、血しほしたたる神経の
壁の煉瓦のもとを行く……

弾け弾け……鳴らせ……また舞踏れ……、

かなしみの蛇、緑の眼
槍に貫かれてまた歎く……

弾け弾け……鳴らせ……また舞踏れ……

はた、吹笛の香のしぶき、
青じろき花どくだみの鋭さに、
濁りて光る山椒魚、沼の調に音は澁む。

弾け弾け……鳴らせ……また舞踏れ……

傷きめぐる観覧車、
はたや、太鼓の悶絶に列なり走る槍尖よ、
窓の硝子に火は叫び、
月琴の雨ふりそそぐ……

弾け弾け……鳴らせ……また舞踏れ……

赤き神経……盲ひし血……
聳せる脳の鑢の音……

弾け弾け……鳴らせ……また舞踏れ……

* * *
* * *

空気が酸し……いま青し……黄に……なほ赤く……

はやも見よ、日の入りがたの雲の色
狂気の楽の音につれて波だちわたり、
悪獣の蹠のごと血を滴す。

そがもとに噴水のむせび
濡れ濡れて薄闇に入る……

空氣は重し……なほ赤し……黄に……また緑……

いつしかに蒸汽の鈍き船腹の
ごとくに光りかぎろひし瘋癲院も暮れゆけば、
ただ冷えしづく茴香酒、鋭き玻璃のすすりなき。

草場の赤き一群よ、眼ををののかし、
躍り泣き弾きただらかす歡樂の

はてしもあらぬ色盲のまぼろしのゆめ……

午後の七時の印象はかくて夜に入る。

空氣は苦し……はや暗し……黄に……なほ青く……

四十一年九月

「やぶちゃん注…かなりの通常と異なる点や不審点がある。

・第一パート第三連一行目のダッシュ一字分はママ（後の自身の編になる昭和三（一九二八）年アルス版「白秋詩集Ⅱ」では通常の二字分ある）。

・第一パート第四連（最終行）「空氣は重し……また赤し……黄に……はた緑……」の「黄に」の後のリーダ九点はママ。前記アルス版ではこの詩篇に限らず、殆んどの詩篇のリーダが八点で統一されてある。

・第二パート第二連三行目の「音の恐怖……はた、ほのしろき懺懺舞……」の四点リーダはママ。実は「恐怖」の後には有意な半角空きがあるのだが、これは再現しなかった。半角分が二点リーダの脱活字と採れると言われる方がいるかも知れない。しかし、それは「そうかも知れない」し、「そうではなくて半角空けてある」という可能性が限りなくあるからである。何故かと言うと、本篇に限らず、実は、不規則な字空けが、一々挙げているときりがないほどに、本詩集には多数認められるからである。それら総てが白秋の指示や意図によるものとは、実は、到底、思えないことも事実である。だからと言って、植字ミスで済まされるかという、実は前記の後発のアルス版では、この空きをもっと頻繁に随所に見られるという事実があるのである（[国立国会図書館デジタルコレクションのこちら](#)を見られたい）。単にこうした植字のバラつきを彼自身が全く問題にしなかっただけと考えるのが自然ではあるが、ルビに異様に凝り、連構成にも拘っている白秋にして、そこだけが杜撰というのは、寧ろ、考え難い気もする。しかし、そこまで忠実に再現すると、実は寧ろ、読む際の音律上の躓き、障害になるばかりで、実は何の有益な効果もないように私には見られるのである。

・第三パート第四連単独一行の「空氣は重し……なほ赤し……黄に……また綠（みどり）……」のリーダーが総て九点なのはママ。アルス版は他と同じ八点である。

「瘋癲院」精神病院。

「茴香酒」アブサント absinthie で、フランス語。音写するなら「アブサアント」。古くからフランス・

スイス・チェコ・スペインなどを中心にヨーロッパ各国でニガヨモギ（双子葉植物綱キク亜綱キク目キク科キク亜科ヨモギ属ニガヨモギ *Artemisia absinthium*）・アニス（英語

anise。双子葉植物綱セリ目セリ科ミツバグサ属アニス *Pimpinella anisum*）・ウイキョウ

（セリ科ウイキョウ属ウイキョウ *Foeniculum vulgare*）などを中心に複数のハーブやスパイスを主成分として作られてきたアルコール度の高い（四十〜八十九%）薬草系リキュールの一つ。元はギリシア語の「ヨモギ」を意味する「アプシンシオン」に由来する。

「オボイ」管楽器のオーボエ（英語：oboe）。

「井、オラ」弦楽器のヴィオラ（英語：viola）。

「バツソ」バツソ（イタリア語：basso）。最低音のバスのこと。

「月琴」（げつきん）は中国のリュート系の撥弦楽器で、満月のような円形の共鳴胴に短い首、琴杵ちんがんを持つ。弦数は時代や国によって異なるが概ね二弦から四弦。弦を親指以外の指先で押さえつけて弾片（ピック）で弦を弾いて音を出す。共鳴孔は無い。演奏時は椅子に座りながら月琴を腿の上に置き、胴を自分の体から少し離して弾く。胴内に不安定な金具が仕込んであり、それを振ったり、叩いて音を鳴らす、鳴り胴と呼ばれる機構を備えたものもある。起源は阮咸琵琶や阮と呼ばれるものであるとされているが、よくわかっていない。日本の明清楽でも使われるが、明楽の「月琴」が棹の長い「阮咸」であるのに対し、清楽の「月琴」は胴の丸い円形胴の月琴であり、両者は全く別の楽器である。明楽は清楽に押されて早くに衰退したこともあり、日本で単に「月琴」と言えば、清楽で使う月琴を指す。参照したウイキの「月琴」によれば、『清楽の月琴は長崎経由で中国から輸入されたが、ほどなく日本国内でも模倣製作され、清楽以外の俗曲の演奏にも用いられるようになった。江戸時代から幕末・明治期にかけて大いに流行し、演歌師や法界屋、更には瞽女等にも演奏された』。『司馬遼太郎の歴史小説』「竜馬がゆく」の『中で、坂本龍馬の妻・お龍』（りょう）『がつま弾く描写がある（現在の知名度の高さはそれによるところが大きい）。しかし日清戦争』（明治二七（一八九四）年七月から翌年にかけて起こった。当時、白秋は満九〜十歳）『時に「敵性楽器」とされてからは廃れた』とある。リンク先で実物の画像が見られる。

「臙」あなづら この「臙」（音は「セキ・シヤク」。この漢字もルビの「あなうら」も「足の裏」の意。「あ」が「足」、「な」は所有の格助詞「の」）は底本では、「庶」の部分で、「鹿」の

「比」の代わりに「从」を入れた奇体な字体である。漢字字形自由共有サイト「グリフウィキ」の「臙」の異体字にもない。最も近いのはこれである。表記出来ないことを正直示して「※」でやることも考えたが、それは如何にも詩全体の雰囲気壊すので、ここは現行の正字であるこれで示した。なお、上記アルス版「白秋詩集Ⅱ」では「臙」を使用している。」

風のあと

夕日はなやかに、
こほろぎ啼く。
あはれ、ひと日、木の葉ちらし吹き荒みたる風も落ちて、
夕日はなやかに、
こほろぎ啼く。

四十一年八月

月の出

ほのかにほのかに音色ぞ揺る。
かすかにひそかににほひぞ鳴る。
しみに列立つわかし白楊、
その葉のくらみにこころ顫ふ。

ほのかにほのかに吐息ぞ揺る。
かすかにひそかに雫ぞ鳴る。
あふげばほのめくゆめの白楊、
愁の水の面を權はすべる。

吐息のをのき、君が眼ざし
やはらに縋れてたゆたふとき、
光のひとすぢ——顫ふ白楊
文月の香爐に濡れてけぶる。

さてしもゆるけくにほふ夢路、
したりしたたる權のしづく、
薄らに沁みゆく月のでしほ
ほのかにわれらが小舟ぞゆく。

ほのめく接吻、からむ頸、
いづれか戀慕の吐息ならぬ。
夢見てよりそふわれら、白楊、
水上透かしてこころ顫ふ。

四十一年二月

「やぶちゃん注」：「白楊」「下枝のゆらぎ」の私の「白楊」の注を参照されたい。
本篇を以って「朱の伴奏」は終わっている。」

外光と印象

「やぶちゃん注…[パート標題と石井白亭の絵](#)」

近世佛國繪畫の鑑賞者をわかき旅人にたとへばや。もとより Watteau の羅曼底、Corot の敘情詩は唯微かにそのおぼろげなる記憶に残れるのみ。やや暗き Fontainebleau の森より曇れる道を巴里の市街に出づれば Seine の河、そが上の船、河に臨める Café の、皆「刹那」の如くしるく明かなる Manet の陽光に輝きわたれるに驚くならむ。そは Velazquez の灰色より俄に現れいでたる午后の日なりき。あはれ日はやうやう暮れてぞゆく。金縁に紅薔薇を覆輪にしたりけむ Monet の波の面も青みゆき、青みゆき、ほのかになつかしくはた悲しき Café の夕は来る。燈の薄黄は Whistler の好みの色とぞ。月出づ。Pissarro のあをき衝を Verlaine の白月の賦など口荒みつつ過ぎゆくは誰が家の子ぞや。

太田正雄

「やぶちゃん注…以上は前の本パート表題の裏(右ページ)に記されてある。底本では極くポイントが小さい。なお、ブラウザの表示字のフォントの大きさをよつては、フランス語の単語が行末から次行にかかる場合、或いは、同様に句読点がそうなる場合、自動的に送られて空間が生ずるが、そのような字空きは存在しないので注意されたい。また、但し、フランス語の前後には底本の見た目に似るように半角分の字空けを施してある。太田正雄とは詩人(劇作・翻訳もよくした)にしいて美術史や切支丹史研究家であり、また医学者(皮膚科学)でもあった木下奎太郎(明治一八(一八八五)年〜昭和二〇(一九四五)年)の本名である。而して彼の手に成る、この「外光と印象」パートへの序文である。

「Watteau」ジャン＝アントワヌ・ヴァトー(Jean-Antoine Watteau 一六八四年〜一七二一年)はロココ時代のフランスの画家で、「シテール島への船出」(L'embarquement pour Cythère : 第一ヴァージョン : 一七一七年)や「ジル」(Gilles : 一七一八年〜一七一九年)で知られる。

「羅曼底」恐らくは「ろまんちつく」(歴史的仮名遣)或いは、フランス語原音に近づけるならば、「ロマンテイク(ロマンティック)」と読んでいる。英語なら「romantic」であるが、ここはフランス語で「romantique」。ここは、空想好きな、夢見がちな「わかき旅人」ということになる。但し、北原白秋自身は後に出る詩篇「羅曼底の瞳」では高い確率で「ロマンチック」と読んでいる。しかし、ここではそれに倣う必要はない。

「Corot」十九世紀のフランスの画家で「バルビゾン派」(École de Barbizon : 自然主義的・写実主義的一団)の一人で次世代の「印象派」との橋渡しをした画家ジャン＝バティスト・カミーユ・コロー(Jean-Baptiste Camille Corot 一七九六年〜一八七五年)。私が真つ先に思い浮かべるのは晩年の「青い服の婦人」(La dame en bleu : 一八七四年)。

「Fontainebleau の森」フォンテーヌブローの森 (Forêt de Fontainebleau : フォレ・ド・フォンテーヌブロー)。パリ南東郊外のフォンテーヌブロー市街の西側一帯に広がる二百五十平方キロメートルに及ぶ広大な森。[ここ](#) (グーグル・マップ・データ)。

「Seine の河」セーヌ川 (la Seine)。

「Manet」十九世紀のフランスの画家で「印象派」の先駆者とされるエドゥアール・マネ (Édouard Manet 一八三二年～一八八三年)。絵画界にスキャンダルを巻き起こした「草上の昼食」(*Le Déjeuner sur l'herbe* : 一八六二年～一八六三年。但し、初題は「水浴」(*Le Bain*)。一八六七年に画家自身が改題した)と「オランピア」(*Olympia* : 一八六三年)が彼の代表作とされる。

「Velazquez」バロック期、スペイン絵画の黄金時代であった十七世紀を代表する巨匠ディエゴ・ロドリゲス・デ・シルバ・イ・ベラスケス (Diego Rodriguez de Silva y Velázquez 一五九九年～一六六〇年)。先のエドゥアール・マネは彼のことを「画家の中の画家」(peintre des peintres) と呼んだ。

「Monet」印象派」を代表するフランスの画家クロード・モネ (Claude Monet 一八四〇年～一九二六年)。代表作「印象・日の出」(*Impression, soleil levant* : 一八七二年)が「印象派」の名の由来となったことはとみに有名。

「Cafin」画家の名らしいが、不詳。但し、島内裕子氏の論文『「舞踏会」におけるロティとヴァトーの位相』(**放送大学研究年報** 十二。一九九四年。PDFでダウン・ロード可能)で、本篇全部を掲げ(そこでは島内氏は本引用を詩集「邪宗門」の『「外光と印象」と題された三一編の白秋の詩に付けられた木下杢太郎の序文』と規定しておられる)、『本論からはやや逸れるが』と前置きされた上で、『ここに出てくる何人もの画家の名前やヴェルレーヌのような詩人は、よく知られた芸術家であるのに対して、ただひとり、Cafinという人物だけが未詳である、という点に関して、『一言述べておきたい』とされ、『現在は忘れ去られてしまっても、当時はよく知られた芸術家だった可能性はある。杢太郎の書き方だけからは、この人物が画家であるのか、あるいはヴェルレーヌのような詩人であるのかも不明瞭である。しかしながら、「ほのかになつかしくはた悲しきCafinの夕は来る」という表現から、少なくとも、この芸術家の世界が、夕暮に象徴されるものであることだけはわかる。このことを手がかりとして、杢太郎の翻訳した『リヒャルト・ムウテル著』『十九世紀仏国絵画史』を読んでゆくと、次のような箇所がある』として、フランスの風景画家ジャン＝シャルル・カザン (Jean-Charles Cazin 一八四〇年～一九〇一年)についての記載部分を引用された後、『このカザンという画家についての記述と、先の序文のCafinの記述には共通性が見られないだろうか。カザンは、白昼の明るい絵を描かず、夕方から夜のほの暗い絵を描いたという。「聖書の風景画」ということばや、星空の夜を特に好んだという記述は、やや杢太郎の序文とイメージの違いがあるようにも思われるが、全体の書き方から感じられるカザンの画題や画風は、杢太郎が言うところの「ほのかになつかしくはた悲しき」という雰囲気とかなり近いようにも思われる。そのように考えると、『邪宗門』序文のCafinは、あるいは、このムウテルの美術論に出てくるカザンのことではないだろうか。カザン Cazin と Cafin は、綴りがよく似ているので、誤植されたの

ではないか、というのがわたしの推測である。従来この点については注意されてこなかったようなので、本論からは逸れたが気付いたこととして、ここに書いた』とある。私はこの見解に全面的に賛同する。ジャン＝シャルル・カザンは彼の[日本語版ウィキ](#)（但し、かなり不備があるので、仏文ウィキその他を参照にして追記した。継ぎ接ぎだらけなのはそのためである）によれば、『パイド＝カレー県』（Pas-de-Calais）『のサメール（Samer）で生まれた』。一八四六年に『家族とブローニュ＝シュル＝メール』（Boulogne-sur-Mer：フランス北部のドーバー海峡沿岸）『に移った』。一八六二年、二十二歳の時、『パリに出っ』、『工芸学校でオラース・ルコック・ド・ボワボードラン』（Horace Lecoq de Boisbaudran）『に学んだ』。一八六三年の『落選展』（フランスで公式のサロンの審査員によって落選させられた作品を集めた展覧会。特にこの一八六三年の展覧会を指すことが多い。落選作には先のマネの「草上の昼食」や、後に出るホイッスラーの「白の少女」が含まれていた）『に展出している』。一八六三年から一八六八年までエミール・トトラ（Émile Trélat）が『校長を務める私立の建築学校（École Spéciale d'Architecture）で絵を教えた』。一八六八年に画家・版画家であったマリー・クラリス・マルゲリッタ・ギエ（Marie Clarisse Marguerite Guillet 一八四四年～一九二四年）と『結婚した』。一八六八年には『トゥール』（Tours：フランスの中部）『の美術館の学芸員に任じられ、美術館の絵画学校の校長も務めた』。『普仏戦争の後、混乱していたフランスを離れ』、一八七〇年代の初めに、『アルフォンス・ルグロ』（Alphonse Legros）『と彫刻家のジュール・ダルー』（Jules Dalou）『とイギリスに渡り、イギリスで美術学校を開こうとしたが』、『これは成功しなかった。イギリスではヴィクトリア&アルバート博物館（Victoria and Albert Museum）』で工芸品を研究し、磁器のデザインの仕事をした』。一八七四年に『イギリスを離れ、イタリア、オランダを旅してフランスに戻った』。一八七六年に「サロン・ド・パリ」（Salon de Paris）『に居を展した。パイド＝カレー県のブローニュ＝シュル＝メール』（Boulogne-sur-Mer）『に居を構え、宗教的な題材や歴史画も描いたがパイド＝カレー県の風景を主に描いた。パリのパンテオンのピエール・ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ』（Pierre Puvis de Chavannes 一八二四年～一八九八年）『の未完の装飾画を完成させた』。『パリの工芸学校で同窓であったオーギュスト・ロダン』（François-Auguste-René Rodin 一八四〇年～一九一七年）『の友人で、ロダンの彫刻』「カレーの市民」（*Les Bourgeois de Calais*：ロダンの著名な彫刻の一つ。一八八八年完成。「百年戦争」時の一三四七年にイギリス海峡に於けるフランス側の重要な港カレーが一年以上に亘ってイギリス軍に包囲されていた「カレー包囲戦」の出来事に基づいて作られたもの）『一人のウスタシュ・ド・サン・ピエール』（Eustache de Saint Pierre：カレー市の指導者の一人）『の像のモデルを務めた』とある。

「Whistler」アメリカの画家・版画家ジェームズ・アボット・マクニール・ホイッスラー（James Abbott McNeill Whistler 一八三四年～一九〇三年）。主にロンドンで活動した。「印象派」の画家たちと同世代であるが、その色調や画面構成などには浮世絵を始めとする日本美術の影響が濃く、「印象派」とも伝統的アカデミズムとも一線を画した独自の絵画世界を展開した。「落選展」に出た「白のシンフォニー第一番：白の少女」（*Symphony in White, No. 1: The White Girl*：一八六二年）がよく知られる。ここで李太郎が想起している

のは、恐らく「青と金のノクターン…オールド・バターシー・ブリッジ」(Nocturne: Blue and Gold - Old Butterssea Bridge : 一八七二年～一八七五年頃)であろう。

「Pissarro」[印象派]のフランスの画家カシユー・ピサロ (Camille Pissarro 一八三〇年～一九〇三年)。田園風景画を好んだ。

「Verlaine の白月の賦」フランス「象徴派」の詩人ポール・マリイ・ヴェルレーヌ (Paul Marie Verlaine 一八四四年～一八九六年) の「白き月影」などと訳される詩集「優しき歌」(*La Bonne Chanson* : 一八七〇年刊) の中の一篇 (*La lune blanche...*) のこと。[原文は](#)[フランスのサイトのこちらを](#)、[国立国会図書館デジタルコレクションの川路柳虹訳「ヴェルレーヌ詩抄」\(大正四\(一九一五\)年白日社刊\)](#)の中のそれをリンクさせておく(左ペー
ージの「Ⅲ」とある詩篇)。」

冷めがたの印象

あわただし、旗ひるがへし、
朱の色の驛遞馬車跳りゆく。

曇日の色なき街は
清水さす石油の噓、
轆かれ泣く停車場の鈴、溝の毒、
晝の三味、鑢磨る歌、
茴香酒の青み泡だつ火の叫、
絶えず眩めく白楊、遂に疲れて
マンドリン奏でわづらふ風の群、
あなあはれ、そのかげに乞食ゆきかふ。

くわと来り、燃えゆく旗は
死に墮つる、夏の光のうしろかげ。

灰色の亞鉛の屋根に、
青銅の擬寶珠の錆に、
また寒き萬象の愁のうへに、
爛れ弾く猩紅熱の火の調、
狂氣の色と冷めがたの疲勞に、今は
ひた嘆く、悔と、悩と、戰慄と。

あかあかとひらめく旗は
猥らなるその最終の夏の曲。

あなあはれ、あなあはれ、
あなあはれ、光消えさる。

四十年十一月

「やぶちゃん注」驛遞馬車」郵便馬車。

「茴香酒」「天鵝絨のにほひ」の私の注を参照。

「白楊」「下枝のゆらぎ」の私の「白楊」の注を参照されたい。

「猩紅熱」（しょうこうねつ）溶血性連鎖球菌によつて起こる感染症。咽喉が痛み、急に高熱を出し、全身に発疹が現われる。小児に多く、治療にはペニシリンが有効。以前は「法定伝染病」・「学校伝染病」の一つであったが、ペニシリンで治療すれば軽症で治るこ

とが多いことから、「溶連菌感染症」という病名で在宅治療を行うのが普通となり、現在では猩紅熱という病名で法的な規制は受けない（小学館「大辞泉」に拠った）。」

赤子

赤子啼く、
急き瀬の中。

壁重き女囚の牢獄、
鐵の門、
淫慾の蛇の紋章
くわとおびえ、
水に、落日に
照りかへし、
黄ばむひととき。

赤子啼く、
急き瀬の中。

四十一年六月

暮 春

ひりあ、ひすりあ。
しゅッ、しゅッ……

なやまし、河岸かしの日のゆふべ、
日の光。

ひりあ、ひすりあ。
しゅッ、しゅッ……

眼科がんくわの窓の磨硝子すりがらす、しどろもどろの
白楊はくやうの温ぬるき吐息といきにくわとばかり、
ものあたたかに、くるほしく、やはく、まぶしく、
蒸ゆふひし淀む夕日の光。
黄きのほめき。

ひりあ、ひすりあ。
しゅッ、しゅッ……

なやまし、またも
いづこにか、

なやまし、あはれ、
音ねも妙たへに
紅あかき嘴はしある小鳥らのゆるきさへづり。

ひりあ、ひすりあ。
しゅッ、しゅッ……

はた、大河おほかはの饅すえ濁にごる、河岸かしのまちかを
ぎちぎちと病やましげにとろろぎめぐる
灰色はひいろき黄こじようきばむ小蒸汽こじようきの温ぬるく、まぶしく、
またゆるくとりぎ噴ふく湯氣ゆげ
いま懈たゆく、
また絶えず。

ひりあ、ひすりあ。
しゅツ、しゅツ……

いま病院の裏庭に、煉瓦のもとに、
白楊はくやうのしどろもどろの香かのかげに、
窓がらすの硝子に、
まじまじと日向求ひなたもとむる病人やまうしは目も悩なやましく
見ぞ夢む、暮春ぼしゆんの空と、もののねと、
水と、にほひと。

ひりあ、ひすりあ。
しゅツ、しゅツ……

なやまし、ただにやはらかに、くらく、まぶしく、
また懈たゆく。

ひりあ、ひすりあ。
しゅツ、しゅツ……

四十一年三月

「やぶちゃん注…「しゅツ、しゅツ……」の「ツ」は明らかにポイントが落ちて右方に打たれて、明白な促音表記がなされてあるようにしか見えない。しかし、実際には「**狂人の音楽**」で使用された「クラリネット」の促音表記は明白な右肩小文字のそれであり、これはそれと比較するならば、促音表記の小さな「ツ」ではないことになる。そしてそれは「狂人の音楽」の直前にある平字の促音でない「バツソ」の「ツ」と同じ活字なのである。私の言っている意味が判らない方のために、画像で示す。まず、本篇「暮春」の冒頭部（「ツ」の部分に赤い矢印を附した。次も同じ）。

★ 次に同サイズでスキャンした「狂人の音楽」の「バツソ」と「クラリネット」の現われる部分。

★ 次に、「暮春」の「しゅツ」の「ツ」をトリミングして示す。

★ 次に同サイズでスキャンした「狂人の音楽」の「バツソ」の「ツ」を示す。

★ 御覧の通り、同じポイントの活字「ツ」であることが判る。これは例えば、後発の昭和三
（一九二八）年の自身の編に成る「白秋詩集Ⅱ」で、先の「狂人の音楽」の平字の「バツ
ソ」の「ツ」と「クラリネット」の「ツ」を比較して見る（国立国会図書館デジタルコレ

クシヨンの画像。左ページ中央と左ページ後ろから三行目」と、後者が明らかにやや小さな別の活字の「ツ」を使用していることで明らかである。而して、この後発のそちらの「暮春」の「ツ」と、前に示した同じ後発の「狂人の音楽」の「バツソ」（同前。左ページ中央）の「ツ」の両者を拡大して比較して見ても、誠に残念なことに、同じ大きさの「ツ」であることが判るのである。しかしながら、私は見た目上の印象を大事にしたい。そこで、本篇では「ツ」のポイントを落した。なお、現行詩集類に見る「暮春」の「しゆツ」の

「ツ」は促音ではないものが殆んどであると思われる。

さて、この「ひりあ、ひすりあ。」「しゆツ、しゆツ……」は非常に手の込んだ（或る意味で「やや意地の悪い」と評してもよい）オノマトペイアであることが判る。無心に読んだ時は、誰もが「この音は何だろう？」と惑うと思われる。第六連まで読んで、「これは、この『小鳥ら』の囀りかしら？」と一瞬、思うのだが、にしては、何か気に障る厭な印象が、囀りとは思われない。それが、第八連に来て、実はそれは眼科医院の傍らを流れる川、或いは白秋の故郷柳川の運河を行き来する小蒸汽船の立てる発動機の音（或いはその船の運航に付随する水切音などを含む）であることが判明する。ここまで不明に眩暈されて少し憎くなるまでに味な用法なのである。

「白楊」^{はくやう}「下枝のゆらぎ」^{はくやう}の私の「白楊」^{はくやう}の注を参照されたい。」

噴水の印象

噴水のゆるぎしたたり。――
霧しぶく苑の奥、夕日の光、
水盤の黄なるさざめき、
なべて、いま
ものあまき嗟嘆の色。

噴水の病めるしたたり。――
いづこにか病児啼き、ゆめはしたたる。
そこここに接吻の音。
空は、はた、
暮れかかる夏のわななき。

噴水の甘きしたたり。――
そがもとに瘳つける女神の瞳。
はた、赤き眩暈の中、
冷み入る
銀の節、雲のとどろき。

噴水の暮るるしたたり。――
くわとぞ蒸す日のおびえ、晩夏のさけび、
濡れ黄ばむ憂鬱症のゆめ
青む、あな
しとしとと夢はしたたる。

四十一年七月

「やぶちゃん注…「憂鬱症」このルビは意味上のそれと漢字の単語との乖離があっていただけない。「憂鬱症」の示す「メランコリー」と、ルビの「ヒステリー」の孰れを意味で採るかで迷ってしまうからである。私は前者のメランコリーの意味で採るべきと思う。なお、「ヒステリー」はドイツ語の *Hysterie* であるが、元は「子宮」を意味するギリシャ語から生まれた語で、古代ローマに於いては女性の様々な病気の原因としての子宮に、因果関係に求めたことに由来するものの、現在の身体的障害を示すヒステリーとは一致しない。」

「やぶちゃん注…[詩篇群「顔の印象 六篇」の冒頭](#)。石井柏亭の挿絵とともに。ご覧に通

り、「六篇」の文字はポイント落ちでやや右寄りである。

以下、「顔の印象」六篇は纏めて電子化し、各篇の間は三行空けた。これは、各篇が総て、右ページ始まりに整除されているからである。標題の字下げが、「A」のみ三字下げで、後は総て四字下げであるのもママである。」

顔の印象 六篇

A 精 舍

うち沈む廣額、夜のごとも凹める眼——
いや深く、いや重く、泣きしづむ靈の精舍。
それか、實に聲もなき秦皮の森のひまより
熟視むるは暗き池、谷その水のをののき。

いづこにか薄日さし、きしりこきり斑鳩なげく
寂寥や、空の色なほ紅にほひのけれど、
靜かなる、はた孤獨、山間の霧にうもれて
悔と夜のなげかひを懇に通夜し見まもる。

かかる間も、底ふかく青の魚盲ひあぎとひ、
口そそぐ夢の豹水の面に血音たてつつ、
みな冷やき石の世と化りぞゆく、あな恐怖より。

かくてなほ聲もなき秦皮よ、秘に火ともし、
精舍また水晶と凝る時愁やぶれて
響きいづ、響きいづ、最終の靈の梵鐘。

以下五篇——四十一年三月

「やぶちゃん注…[「秦皮」「陰影の瞳」](#)の私の注を参照されたい。

「斑鳩」スズメ目アトリ科イカル属イカル *Eophona personata* のことであるが、[ウィキの「イカル」](#)によれば、この漢字表記は正しくないとし、「鶇」「桑鶇」が正しいとする。同種は『木の実を嘴（くちばし）で廻したり』『転がしたりするため』『古くは「マメマワシ」や「マメコロガシ」、木の実を好んで食べるため「まめうまし」、「豆割り」などと呼ばれた。イカルという名の由来は』『奈良県の斑鳩とも』『鳴き声が「イカルコキー」と聞こえるからとも言われるが、定かではない。また「イカルガ（斑鳩）」と呼ばれること

もあるが、『厳密には「斑鳩」の文字を使うのは誤用であり、「鶇」は角のように丈夫な嘴を持つ』こと『に由来する』とある。但し、聖徳太子の宮があったとされる斑鳩の里に、この鳥が多くいたことによる古名とする説はある。ただ、その「斑鳩」に多くいたとする鳥が現在のイカルであるという確証はなく、大修館書店「廣漢和辭典」では「斑鳩（ハンキウ）」をハト目ハト科キジバト属ジュスカケバト *Streptopelia risoria* としてあり（『いかる』とも記しているものの、解説は明らかにジュスカケバトのものである）、明の李時珍の「本草綱目」の「禽之三」の頭に「斑鳩」を出すのが、その記載は、『鳩也』と始まっており、「廣漢和辭典」の比定根拠として挙げているのも、「本草綱目」である。因みに、寺島良安の「和漢三才図会」でも、[巻第四十三「林禽類」冒頭に「斑鳩」](#)として出すのはハトであって、イカルではない（リンク先は私の電子化注）。良安はイカルは同巻に「[桑鳩（まめどり・まめうまし・いかるが）](#)（イカル）」として出しており、その本文では、わざわざ最後の部分で『倭名抄』に『鶇【伊加流加（いかるが）】・斑鳩【同。】（とあれど）、共に誤りなり』と書いてさえいる。また、現代中国語では、「斑鳩」をハト目ハト科キジバト属 *Streptopelia* の中文属名「斑鳩属」としていることが、[中文ウィキのこちらで判る](#)。されば、やはりイカルを斑鳩に比定同定するの甚だ無理であると言わざるを得ないと私は思う。以下、[ウィキの「イカル」](#)から引く。『ロシア東部の沿海州方面と日本で繁殖し、北方の個体は冬季に中国南部に渡り』、『越冬する』。『日本では北海道、本州、四国、九州の山林で繁殖するが』、『北日本の個体は冬季は本州以南の暖地に移動する』。『全長は約』二十三センチメートルで、『太くて大きい黄色い嘴を持つ。額から頭頂、顔前部、風切羽の一部が光沢のある濃い紺色で体の上面と腹は灰褐色で下腹から下尾筒は白い。初列風切羽に白斑がある。雌雄同色である』。『主に樹上で生活するが、非繁殖期には地上で採食している姿もよく見かける。木の実や草の種子を採食する。時には、昆虫類も食べている』。『繁殖期はつがいで生活するが』、『巣の周囲の狭い範囲しか縄張りせず、数つがいが隣接してコロニー状に営巣することが多い。木の枝の上に、枯れ枝や草の蔓を組み合わせて碗状の巣を作る。産卵期は』五〜七月で、三〜四個の『卵を産む。抱卵期間は約』十四『日。雛は孵化してから』十四『日程で巣立つ』。『非繁殖期は数羽から数十羽の群れを形成して生活する』。『波状に上下に揺れるように飛翔する』。以下「聞きなし」の項。『各地に様々な聞きなしが伝わり、』「比志利古木利（ひしりこきり）」（これは**白秋の『きしりこきり』**のオノマトペイアに酷似する）、「月日星（つきひほし）」とも成し、『月・日・星と囀ることから三光鳥とも呼ばれている』とある。[YouTubeの野鳥動画図鑑 Wild Bird Japanの「イカル（一）さえざり（戸隠）」](#)をリンクさせておく。]

B 狂へる街

緒^{あか}らめる暗^{くら}き鼻^{はな}、なめらかに禿^はげたる額^{ひたひ}、
瘰^{ひきつ}癧^{くち}れる唇^{はし}の端^{はし}、光^{まなこ}なくなやめる眼^{まなこ}
なにか見る、夕^{ゆふ}榮^{ばえ}、のひとみぎり噎^{むせ}ぶ落^{いり}日^ひに、
熱^{ねつ}病^{びやう}の響^{ひびき}する煉^{れん}瓦^{くわ}家^やか、狂^{まじ}へる街^{まち}か。

見るがまに焼^{せう}酎^{ちゆう}の泡^{あわ}しぶきひたぶる歎^{なげ}く
そが街^{まち}よ、立てつづく尖^{とがり}屋^や根^ね血^ちばみ疲^{つか}れて
雲^{なや}赤^{あか}くもだゆる日^ひ、惱^{なや}ましく馬^ば車^{しや}驅^かるやから
靈^{たま}のありかをぞうち惑^{まど}ひ窓^{まど}ふりあふぐ。

その窓^{まど}に盲^{めし}ひたる爺^{おぢ}ひとり鈍^{にぶ}き刃^は研^とげる。
はた、啞^{おふし}朱^{しゆ}に笑^{をみな}ひ痺^{しび}れつつ女^{をみな}を説^とける。
次^{つぎ}なるは聾^{ろう}しぬる清^{あま}き尼^{しや}三^み味^み線^{せん}彈^ひける。

しかはあれ、照^あり狂^{まじ}ふ街^{まち}はまた酒^{さけ}と歌^{うた}とに
しどろなる舞^{まひ}の列^{れつ}あかあかと淫^{たは}れくるめき、
馬^ば車^{しや}のあと見^みもやらず、意^い味^みもなく歌^{うた}ひ倒^{たふ}るる。

「やぶちゃん注…第一連三行目の「なにか見る、夕^{ゆふ}榮^{ばえ}、のひとみぎり噎^{むせ}ぶ落^{いり}日^ひに、」の
「夕^{ゆふ}榮^{ばえ}」の後の読点は、音数律から見ても明らかに誤植であるが、そのままに再現した。
後の昭和三（一九二八）年アルス版『白秋詩集Ⅱ』では、正しく除去されている。

「ひとみぎり」聴いたことのない語である。小学館「日本国語大辞典」にも載らない。し
かし、後に出る「浴室」や「華のかけ」にも出現し、詩集「東京景物詩及其他」の中の
「青髯」の「畜生」にも出現する。それらを並べて見ても、しかし、今一つ、意味が判然
としない。個人的には「砌^{みぎり}」（時節・折り・頃）に、不特定の一時期や大体の範囲などを
表わす接頭語の「ひと」が附いたもので、「丁度、その折の辺りに」の意であろうか。」

C 醋 の 甕

蒼あをざめし汝なが面おもて鏡すえよどむ瞳ひとみのにごり、
薄暮くれがたに熟視みつめつつ撓たわみちる髪かの香かきけば――
醋すの甕かめのふたならび人もなき室むろに沈うれみて、
ほの暗くらき玻璃はりの窓まどひややかに愁うれひわななく。

外面とのもなる嗟嘆なげかひよ、波なみもなきいんくの河かに
旗青うつろふねき獨木舟ひとりふねそこはかと巡めぐり漕こぎたみ、
見えわかぬ惱なやみより錨いかり曳ひき鎖くさり巻まかれて、
伽羅きよらまじり消え失うする黒蒸汽笛くろじょうきふえぞ呻うめける。

吊橋つりばしの灰白はひしろよ、疲つかれたる煉瓦れんぐわの壁かべよ、
たまたまに整ととのはぬ夜よのピアノ淫みだれさやげど、
ひとびとは聲こゑもなし、河かの面おもをただに熟視みつむる。

はた、甕かめのふたならび、さこそあれ夢ゆめはたゆたひ、
内うちと外そとかぎりなき懸隔へだたりに帷墮とばりおつれば、
あな悲かなし、あな暗くらし、醋すの沈黙しじま長くひびかふ。

「やぶちゃん注…「漕ぎたみ」「たみ」は「回む・廻む」で「ぐるりと漕ぎ廻る」・「迂回す
して漕ぐ」の意。

「伽羅」梵語の漢訳。狭義には香木として有名な沈香じんこう（例えばアオイ目ジンチョウゲ科ジ
ンコウ属アキラリア・アガローチャ *Aquilaria agallocha* 等）の別名。」

D 沈 丁 花

なまめけるわが女、汝は弾きぬ夏の日の曲、
悩ましき眼の色に、髪際の紛おしろひに、
緘みたる色あかき唇に、あるはいやしく
肉の香に倦める猥らなる頬ほほゑみに。

響かふは呪はしき執と欲、ゆめもふくらに
頸巻く毛のぬくみ、眞白なるほだしの環
そがうへに我ぞ聴く、沈丁花たぎる畑を、
堪へがたき夏の日を、狂はしき甘きひびきを。

しかはあれ、またも聴く、そが畑に隣る河岸側、
色ざめし淺葱幕しどけなく張りもつらねて、
調ふるは下司のうた、はしやげる曲馬の囃子。

その幕の羅馬字よ、くるしげに馬は嘶き、
大喇叭鄙びたる笑してまたも挑めば
生あつき色と香とひとさやぎ歎きもつるる。

「やぶちゃん注…「髪際」「かみぎは」の音変化で中世以降の古文に既に見られる。意味は無論、「髪が生え際」。現代仮名遣は「こうぎわ」となる。

「ほだし」「絆し」。人の心や行動の自由を縛るもの、手かせ・足かせの意であるが、ここは愛人から貰った指輪であろう。

「曲馬」「秋の瞳」の「曲馬師」の私の注を見られたい。」

E 不調子

われは見る汝が不調、――菱びたる瞳の光澤に、
衰の頬にほふおしろひの厚き化粧に、
あはれまた褪せはてし髪の鬢強きくゆりに、
肉の戦慄を、いや甘き欲の疲勞を。

はた思ふ、晩夏の生あつきにほひのなかに、
倦みしごとと纏れ入るいと冷やき風の吐息を。
新開の街は鏽びて、色赤く猥るる屋根を、
濁りたる看板を、入り残る窓の落日を。

なべてみな整はぬ色の曲……ただに鋭き
最高音の入り雑り、埃たつ家なみのうへに、
色にぶき土藏家の江戸芝居ひとり古りたる。

露はなる日の光、そがもとに三味はなまめき、
拍子木の歎またいと痛し古き痕に、
かくてあな衰のもののいろ空は暮れ初む。

F 赤き恐怖

わかうどよ、汝はくるし、尋めあぐむ苦悶の瞳、
秀でたる眉のゆめ、ひたかわく赤き唇
みな戀の響なり、熟視むれば——調かなでて
火のごとき馬ぐるま燃え過ぐる窓のあなたを。

はた、辻の眞晝どき、白楊にほひわななき、
雲浮かぶ空の色生あつく蒸しも汗ばむ
街よ、あな音もなし、鐘はなほ鳴りもわたらね、
炎上の光また眼にうつり、壁ぞ狂へる。

人もなき路のべよ、しとしとと血を滴らし
膽抜きて走る鬼、そがあとにただに饑ゑつつ
色赤き郵便函のみくるしげにひとり立ちたる。

かくてなほ窓の内すすしげに室は濡るれど、
戸外にぞ火は熾る、……………哀れ、哀れ、棚の上に見よ、
水もなき消火器のうつろなる赤き戦慄。

「やぶちゃん注…第一連末の「火のごとき馬ぐるま燃え過ぐる窓のあなたを」というのは、現実としては、軒に吊るした走馬燈の目くるめく回転がそのイメージのもとにはありながら、それがしかし、詩想の中では完全に後退して走馬燈の形象は分解され、再構築されて、実際の炎を上げて馬と馬車が燃えつつ窓の彼方を走り過ぎてゆく、という慄然とさせる観念的なメタモルフォーゼを起こしているように私には読める。

「白楊」「[下枝のゆらぎ](#)」の私の「白楊」の注を参照されたい。」

盲ひし沼

午後六時、血紅色の日の光
盲ひし沼にふりそそぎ、濁の水の
聲もなく傷き眩む生おびえ。
鐵の匂のひと冷み沁みは入れども、
影うつす煙草工場の煉瓦壁。
眼も痛ましき香のけぶり、機械とどろく。

鳴きたる鵞鳥のうから
しらしらと水に飛び入る。

午後六時、また噴きなやむ管の湯氣、
壁に凭りたる素裸の若者ひとり
腕拭き鐵の匂にうち噎ぶ。
はた、あかあかと蒸氣罐音なく叫び、
そこここに咲きこぼれたる芹の花、
あなや、しとどにおしなべて日ぞ照りそそぐ。

聲もなき鵞鳥のうから
色みだし水に消え入る

午後六時、鵞鳥の見たる水底は
血潮したたる沼の面の負傷の光
かき濁る泥の臭みに疲れつつ、
水死の人の骨のごとらばふなかに
もの鈍き鉛の魚のめくるめき、
はた浮びくる妄念の赤きわななき。

逃げいづる鵞鳥のうから
鳴きさやぎ汀を走る。

午後六時、あな水底より浮びくる
赤きわななき——妄念の猛ると見れば、
強き煙草に、鐵の香に、わかき男に、
顔いだす硝子の窓の少女らに血潮したたり、
歡樂の極の恐怖の日のおびえ、

顫^{ふる}ひ高^{くる}まる苦^{あけ}痛^{しみ}ぞ朱^{あけ}にくづるる。

刹那^は、ふと太^{ふと}く湯^ゆ氣^げ吐^きき
吼^ほえいづる休^{やすらひ}息^ひの笛^{ふえ}。

四十一年七月

青き光

哀れ、みな悩み入る、夏の夜のいと青き光のなかに、
ほの白き鐵の橋、洞圓き穹窿の煉瓦、
かげに來て米炊ぐ泥舟の鉢の撫子、
それを見ると見下せる人々が倦みし面も。

はた絶えず、悩みし角光り電車すぎゆく
河岸なみの白き壁あははと瓦斯も點れど、
うち向ふ暗き葉柳震慄きつ、さは震慄きつ、
後よりはた泣くは青白き屋の幽靈。

いと青きソプラノの沈みゆく光のなかに、
饅えて病むわかき日の薄暮のゆめ。――
幽靈の屋よりか洩れきたる呪はしの音の
交響體のくるしみのややありて交りおびゆる。

いづこにかうち囃す幻燈の伴奏の進行曲、
かげのごと往來する白の衣うかびつれつつ、
映りゆく繪のなかのいそがしさ、さは繰りかへす。――
そのかげに苦痛の暗きこゑまじりもだゆる。

なべてみな悩み入る、夏の夜のいと青き光のなかに。――
蒸し暑き軟ら風もの甘き汗に揺れつつ、
ほつほつと點もれゆく水の面のなやみの燈、
鹹からき執の譜よ……………み空には星ぞうまるる。

かくてなほ悩み顫ふわかき日の薄暮のゆめ。――
見よ、苦き闇の滓街衢には淀みとろげど、
新にもしぶきいづる星の華――泡のなげきに
色青き酒のごと空は、はた、なべて澄みゆく。

四十一年七月

「やぶちゃん注」第一連「穹窿」アーチ。Arch。橋下の下部のそれ。
第一連「泥舟」泥や土砂を積んで運ぶ荷船。土船。これはそうした舫に揺られる生業に生
きる者たちが、その船の一角に家族で住んでいる。炊ぐのは妻か娘か。小さな小さな「撫

子」の鉢植えの一輪のピンクだけが、モノクロームの画面にぼうつと発色する。一九八一

年公開の小栗康平監督の名品「泥の河」を髭髯させる一行である。

第二連「悩^{なや}ましの角^{つの}光り電車すぎゆく」パンタグラフのスパーク。

第二連「瓦斯」「がす」或いは「ガス」。ガス灯。」

樅のふたもと

うちけぶる樅のふたもと。
薄暮の山の半腹のすすき原、
若草色の夕あかり濡れにぞ濡るる
雨の日のもののしらべの微妙さに、
なやみ幽けき Chopin の樂のしたたり
やはらかに絶えず霧するにほやかさ。
ああ、さはあかれ、嗟嘆の樅のふたもと。

はやにほふ樅のふたもと。
いつしかに色にほひゆく靄のすそ、
しみらに燃ゆる日の薄黄、映らふみどり、
ひそやかに暗き夢彈く列並の
遠の山々おしなべてものやはらかに、
近ほとりほのめきそむる歌の曲。
ああ、はやにほへ、嗟嘆の樅のふたもと。

燃えいづる樅のふたもと。
濡れ滴る柑子の色のひとつらね、
深き青みの重りにまじらひけぶる
山の端の縫れのなやみ、あるはまた
かすかに覗く空のゆめ、雲のあからみ、
晩夏の入日に噎ふ夕ながめ。
ああ、また燃ゆれ、嗟嘆の樅のふたもと。
色うつる樅のふたもと。
しめやげる葬の曲のかなしみの
幽かにもののなまめきに揺曳くなべに、
沈みゆく雲の青みの階調、
はた、さまざまのあこがれの吐息の薫、
薄れつつうつらふきは日のおびえ。
ああ、はた、響け、嗟嘆の樅のふたもと。

鱧え暗む樅のふたもと。
燃えのこる想のうるみひえびえと、
はや夜の沈黙しのびねに弾きも絶え入る
列並の山のくるしみ、ひと叢の

柑子かうじの靄のおぼめきも音ねにこそ呻うめけ、
おしなべて御みづし龕そらの空ぞ饒すえよどむ。
ああ、見よ、悩なやむ、嗟嘆なげかひの縦もみのふたもと。

暮れて立つ縦もみのふたもと。
聲こゑもなき悲願ひくわんの通夜つっやのすすりなき
薄らの闇に深みゆく、あはれ、法悦はふえつ、
いつしかに筆ひちりき築あかる谷のそら、
ほのめき顫ふるふ月魄つきしろのうれひ沁みつつ
夢青むれかむ忘我の原の靄の色。
ああ、さは顫ふるへ嗟嘆なげかひの縦もみのふたもと。

四十一年二月

「やぶちゃん注」第一連「Chopin」後半生、主にフランスで活躍した、ポーランド生まれの前期ロマン派音楽を代表するピアニストにして名作曲家であったフレデリック・フランソワ・ショパン（ポーランド語：Fryderyk Franciszek Chopin／フランス語：Frédéric François Chopin 一八一〇年（一八〇九年とも）～一八四九年）。想起されているのは二十一番まである「夜想曲」（ノクチュルヌ：Nocturne）群の内の孰れかであろうが、ここの「なやみ幽かすけき」とすれば、短調のもの（十曲ある）であろう。というより、この詩篇全体がノクチュルヌ群以下ショパンの諸楽曲をイメージしながら進行し、後半の第四連以降から最終連までは、特に主調を、かの「葬送」「葬送行進曲付き」の呼称で知られる「ピアノソナタ第二番変ロ短調作品三十五」（*Sonate pour piano no 2*）に基づいているものと思われる。最終連三行目以下では、寧ろ、ノクチュルヌの長調の楽曲が響いているように感じられる。第一連「あかれ」は「別れ」。別れ別れになっっている、それ。この縦（裸子植物門マツ亜門マツ綱マツ亜綱マツ目マツ科モミ属モミ *Abies firma*）の木は双樹である。第二連「濡れ滴る柑子かうじの色のひとつらね」モミの樹皮はかなり茶色がかっており、伸びた枝葉の主幹部は朝露に濡れて陽光に光ったりすると、明るい柑子色に見える。最終連「筆ひちりき築あかる谷のそら」谷から覗かれる夜空の星の視覚的な輝きのさんざめくさまを筆築の音ねに換か喻したメタファー。最終連「月魄つきしろ」は月（の姿）。」

夕日のにほひ

晩春の夕日の中に、
順禮の子はひとり頬をふくらませ、
濁りたる眼をあげて管うち吹ける。
腐れゆく檻樓のにほひ、
酢と石油……にじむ素足に
落ちちれる果實の皮、赤くうすく、あるは汚なく……

片手には嚙りのこせし
林檎をばかたく握りぬ。
かくてなほ頬をふくらませ
怖おづと吹きいづる………珠の石鱗よ。

さはあれど、珠のいくつは
なやましき夕暮のにほひのなかに
ゆらゆらと圓みつつ、ほつと消えたる。
ゆめ、にほひ、その吐息……

彼はまた、
怖々と、怖々と、………眩しげに頬をふくらませ
蒸し淀む空氣にぞ吹きもいでたる。

あはれ、見よ、
いろいろのかがやきに濡れもしめりて
圓らにものぼりゆく大きなひとつの珠よ。
そをいまし見あげたる無心の瞳。

背後には、血しほしたたる
拳あげ、
霞める街の時計睨みつめたる
山門の仁王の赤き幻想……

その裏を
ちやるめらのゆく……

「やぶちゃん注…リーダ数は一箇所を除いてママ。実は第一連最終行末の「あるは汚なく……」のリーダは五点しかない。しかし、後ろの二点は有意に右方向に曲がっており、恐らくは三点リーダの植字不全のミスと受け取れることから、特異的に推定で六点リーダとした。五点リーダにするのであれば、そのひしゃげたものも再現せねばならぬと思うたが、それはあまりにも無体なことと考えたからである。

本篇は「邪宗門」の中でも忘れ難い一篇である。私はこの巡礼の少年の姿に不思議に強い既視感(déjà-vu : デジャヴ…フランス語)を感じるからである。振り返った彼は――或いは――私自身――なのかも知れない……………」

浴室

水落つ、たたど……浴室の眞白き湯壺
大理石の苦惱に湯氣ぞたちのぼる。
硝子の外の濁川、日にあかあかと
小蒸汽の船腹光るひとみぎり、太鼓ぞ鳴れる。

水落つ、たたど……灰色の亞鉛の屋根の
繫留所、わが窓近き陰鬱に
行徳ゆきの人はいま見つつ聲なし、
川むかひ、黄褐色の雲のもと、太鼓ぞ鳴れる。

水落つ、たたど……兩國の大吊橋は
うち煤け、上手斜に日を浴びて、
色薄黄ばみ、はた重く、ちやるめらまじり
忙しげに夜に入る子らが身の運び、太鼓ぞ鳴れる。

水落つ、たたど……もの甘く、あるひは赤く、
うらわかきわれの素肌に沁みきたる
鐵のほひと、腐れゆく石鹼のしぶき。
水面には荷足の暮れて呼ぶ聲す、太鼓ぞ鳴れる。

水落つ、たたど……たたどあな音色柔らに、
大理石の苦惱に湯氣は濃く、温るく、
鈍きどよみと外光のなまめく靄に
疲れゆく赤き都會のらうたげさ、太鼓ぞ鳴れる。

四十一年八月

「やぶちゃん注…本篇については、[本庄あかね氏の論文『北原白秋「浴室」の詩法…時の推移の表現をめぐって』](#)（『稿本近代文学』（二〇一一年十二月発行）所収・PDF）が優れている。ロケーションはグーグル・マップ・データではこの範囲で、「[今昔マップ](#)」で示すところの範囲。」

入日の壁

黄に潤る港の入口、
切支丹邪宗の寺の入口の
暗めるほとり、色古りし煉瓦の壁に射かへせば、
静かに起る日の祈禱、
『ハレルヤ』と、奥にはほふ讃頌の幽けき夢路。

あかあかと精舎の入口。――
ややあれば大風琴の音の吐息
たゆらに嘆き、白蠟の盲ひゆく涙。――
壁のなかには埋もれて
眩暈き、素肌に立てるわかうどが赤き幻。

ただ赤き精舎の壁に、
妄念は熔くるばかりおびえつつ
全身落つる日を浴びて眞夏の海をうち睨む。
『聖マリヤ、イエスの御母。』
一齊に禮拜終る老若の消え入るさけび。

はた、白む入日の色に
しづしづと白衣の人らうちつれて
濕潤も暗き戸口より浮びいでつつ、
眩しげに數珠ふりかざし急げども、
など知らむ、素肌に汗し熔けゆく苦惱の思。

暮れのこる邪宗の御寺
いつしかに薄らに青くひらめけば
ほのかに薫る沈の香、波羅韋増のゆめ。
さしもまた埋れて顫ふ妄念の
血に染みし踵のあたり、蟋蟀啼きもすずろぐ。

四十一年八月

「やぶちゃん注」『踵』の「かがと」のルビは誤りではない。古くは濁音であった。
「蟋蟀」私はキリギリスとコオロギの近代以前と現代の一律相互転換には激しく反対するものであるが、ここは映像設定とSE（サウンド・エフェクト）から考えても、音数律から

「きりぎりす」を選んだもので、
実体は蟋蟀せつぱつ。こおろぎ。コオロギであることは言うまでもあるまい。」

狂へる椿

ああ、暮春。ぼしゆん

なべて惱まし。なや

溶けゆく雲のまろがり、とろ
大ぞらのにほひも、ゆめも。おほ

ああ、暮春。

大理石のまぶしきにほひ――なめいし

幾基の墓の日向にいくもと

照りかへし、

くわと入る光。

ものやはき眩暈の甘き恐怖よ。くるめき おそれ

あかあかと狂ひいでぬる藪椿、やけ れつや たま やぶつばき

自棄に熱病む霊か、見よ、枝もたわなに

狂ひ咲き、

狂ひいでぬる赤き花、

赤き謠言。うはごし

そがかたへなる崖の上、がけ うへ

うち濕り、熱り、まぶしく、また、ねぶくしめ ほて おほち

大路に淀むもののおと。おほち

人力車夫はじんりきしやふ

ひとつらね青白の幌をならべぬ。あをじろ ほろ

客を待つところごころに。

ああ、暮春。

さあれ、また、うちも向へる

いと高く暗き崖には、がけ

窓もなき牢獄の壁のまど ひとや

長き列はては閉せるつら

灰黒の重き裏門。はいくろ うらもん

はたやいま落つる日ひびき、

照りあかる窪地くぼちのそらの
いづこにか、
さはひとり、
湿りしめ吹きゆく
幼をさなごころの日のうれひ、
そのちやるめらの
笛ふしの曲。

笛ふしの曲……
かくて、はた、病やみぬる椿つばき、
赤く、赤く、狂くるへる椿つばき。

四十一年六月

吊橋のほひ

夏の日の激しき光
噴きいづる銀の濃雲に照りうかび、
雲は熔けてひたおもて大河筋に射かへせば、
見よ、眩暈く水の面、波も眞白に
聲もなき潮のさしひき。

そがうへに懸（かか）る吊橋。
煤けたる黝の鐵の桁構、
半月形の幾圓み絶えつつ續くかげに、見よ、
薄らに青む水の色、あるは煉瓦の
圓柱映ろひ、あかみ、たゆたひぬ。

銀色の光のなかに、
そろひゆく櫂のなげきしらしらと、
或は灰の水鳥のそこしもなく音のうれひ、
河岸の水室の壁も、はた、ただに眞晝の
白蠟の冷みの沈黙。

かくてただ悩む吊橋、
なべてみな眞白き水の面、はた、光、
ただにたゆたふ眩暈の、恐怖の、灰の哀愁の
銀の眞晝に、色重き鐵のほひぞ
鬱憂に吊られ壓さるる。

鋼鐵のほひに噎び、
絶えずまた直裸なる男の子
眞白に光り、ひとならび、力あふるる面して
柵の上より躍り入る、水の飛沫や、
白金に濡れてかがやく。

眞白なる眞夏の眞晝。
汗滴るしとの熱に薄曇り、
暈みて歎く吊橋のほひ目當にたぎち來る
小蒸汽船の灰ばめる鈍き唸や、
日は光り、煙うづまく。

「やぶちゃん注」あるひ「或は」の「ひ」はママ。

四十一年八月

硝子切るひと

君は切る、
色あかき硝子がらすの板いたを。
落日いりひさす暮春ぼしゆんの窓に、
いそがしく撰えらびいでつつ。

君は切る、
金剛こんがうの石のわかさに。

茴香酒アブサンのごときひとすぢ
つと引きつ、切りつ、忘れつ。

君は切る、
色あかき硝子がらすの板を。

君は切る、君は切る。

四十年十二月

「やぶちゃん注」アブサン「茴香酒」「天鵝絨のほひ」の私の注を参照。」

「やぶちゃん注…[『悪の窓』パート冒頭見開き](#)。右にパート標題と石井白亭の挿絵。左ページは挿入画で、これは、本詩集の最後（奥附の前）に配されてある装幀・挿絵その他のリストにある、『太田正雄』（木下李太郎）の「私信『四十一年七月廿一日便』」とするものと思われる。ご覧の通り、太田の北原白秋書簡（葉書であろう）を写真版に起こしたものである。奇体な絵の四隅の文面は、やや読み難いが、右上↓左上↓右下↓左下の順に（私が判読できなかったものは□で示した）、

*

僕ハ六五日頃一たん帰岡
しやうと思つてゐる。

九月にどういふ

事でもどつ

てくる

かわ

らぬ

也國の実□

と、我を以て家を建て

それまで、一廻あつて

また「美き日の歌」

でも歌はふ

て□返るかも知れない

*

か。「帰岡」李太郎の故郷は静岡である。左上の二行目は「國の実兄」と読みたかったが、「兄」の崩してはない。或いは「國」は「圓」ではないかとも思った。彼の次兄は太田圓三（土木技師・鉄道技師）という名であるからである。最終の左下も存外に読めなかった。「て（で）も」「ち（ち）き」等を考えたが、崩しが合わない。識者の御教授を乞う。

全七断篇を纏めて電子化注する。総標題下の「断篇七種」は底本では御覧の通り、右寄りである。各断篇は一作毎に改ページ開始で整序されているので（「五」と「六」は見開き左右に各篇分置）、改ページした。」

惡の窓 斷篇七種

一 狂念

あはれ、あはれ、

あをじろ

青白き日の光西よりのぼり、

くれがた

薄暮の燈のほひ晝もまた點りかなしむ。
とも

わが街よ、わが窓よ、なにしかも焼酎叫び、
まち
つるはし
鶴嘴のひとつらね日に光り悶えひらめく。
もた

汽車ぞ來る、汽車ぞ來る、眞黒げに夢とどろかし、
きしや
く
はひろ
窓もなき灰色の貨物輜約ぞ積みたる。
くわもつばこへう

あはれ、はや、焼酎は醋とかはり、人は轢かれて、
せうちう
す
とほ
あわ
盲ひつつ血に叫ぶ豹の聲遠に泡立つ。
めし
へう

二 疲れ

あはれ、いま暴^{あら}びゆく接吻^{くちつけ}よ、肉^{ししむら}の曲^{きよく}。……

かくてはや青白^{つか}く疲^{つか}れたる獸^{けもの}の面^{おもて}
今日^{けふ}もまた我^{われ}見^み据^すゑ、果^は敢^かなげに、いと果^は敢^かなげに、
色濁^{にじ}る窓硝子^{まじがらす}外面^{のう}より呪^{のろ}ひためらふ。

いづこにかうち狂^{くる}ふ井^い。オロンオロンよ、わが唇^{くちびる}よ、
身^みをも燬^やくべき砒^ひ素^その壁^{かべ}夕日^{ゆじつ}さしそふ。

三 薄暮の負傷

血潮したたる。

薄暮の負傷なやまし、かげ暗き溝のほひに、
はた、胸に、床の鉛に……

さあれ、夢には列なめて駱駝ぞ過ぐる。
埃及のカイロの街の古煉瓦
壁のひまには砂漠なるオアシスうかぶ。
その空にしたたる紅きわが星よ。……

血潮したたる。

「やぶちゃん注…「古煉瓦」のルビはママ。」

四 象のほひ

日をひと日。

日をひと日。

日をひと日、光なし、色も盲^{めし}ひて

ふくだめる、はた、病^やめるなやましきもの
窓ふたぎ窓ふたぎ氣^け倦^だるげに唸^{うな}りもぞする。

あはれ、わが幽^{いう}鬱^{うつ}の象^{ざう}
亞^あ弗^ふ利^り加^かの鈍^{にぶ}きにほひに。

日をひと日。

日をひと日。

五 惡のそびら

おどろなす髪けの亞麻色あさいろ
背向そびらけ、今日けふもうごかず、
さあれ、また、絶えずほつほつ
息しほり『死』にぞ吹くめる、
血のごとき石鹼しゃげんの珠たまを。

六 薄暮の印象

うまし接吻……歡語……

さあれ、空には眼に見えぬ血潮したたり、
なにか負傷ひくるしむ叫ぶ、
など痛む、あな薄暮の曲の色、——光の沈黙。

うまし接吻……歡語……

七 うめき

暮れゆく日、血に濁る床の上にひとりやすらふ。
街しづみ、窓しづみ、わが心もの音もなし。

載せきたる板硝子過ぐるとき車轂きつつ
落つる日の照りかへし、そが面噎びあかれば
室内の汚穢、はた、古壁に朽ちし鉞
一齊に屠らるる牛の夢くわとばかり呻き悶ゆる。

街の子は戯れに空虚なる乳の罐たたき、
よぼよぼの飴賣は、あなしばし、ちやるめらを吹く。

くわとばかり、くわとばかり、
黄に光る向ひの煉瓦
くわとばかり、あなしばし。――

悪の窓畢――四十一年二月

「やぶちゃん注…最後のクレジット注記の「悪の窓」の「窓」はママ。冒頭のパート総標題は『悪の窓』である。」

蟻

おほらかに、
いとおほらかに、
大きな鬱金うこんの色の花おもの面。

日は眞晝まひる、
時は極熱ごくねつ、
ひたおもて日射ひきしにくわつと照りかへる。

時に、われ
世の蜜みつもとめ
雄蕊ゆうずゐの林の底をさまよひぬ。

光の斑ぶ
燂やけつ、斷ちぎれつ、
豹へうのごと燃えつつ濕しめる徑みちの隈。

風吹かず。
仰そらふげば空は
烈れつ々と鬱金うこんを篩ふるふ蕊ずゐの花。

さらに、聞く、
爛ただれ、饅すえばみ、
ふつふつと苦痛くつうをかもす蜜の息。

樂欲げうよくの
極きよくみか、甘かんき
寂寞じやくまくの大光明だいくわうみやう、に喘あへぐ時。

人界にんがいの
七谷ななたに隔へだて、
丁とう々と白檀びやくだんを伐うつ斧をのの音おと。

四十年三月

「やぶちゃん注」第四連「光の斑ぶ」の「ぶ」はママ。現行、ここは「ふ」とルビされている。しかし、[原本を見て戴きたい](#)（赤い矢印は私が打った）。このページの前にある明らか

なルビの濁音表記である「ご」「ぎ」「ず」と比較しても、この「ふ」は印刷のスレなどではない、真正正銘の「ぶ」という濁音表記である。勿論、正規の「斑」とい漢字には「ブ」という音はない。しかし、「ぶち」という訓はあり、本詩集で北原白秋は音数律から自在に読みを変形させていることは既に見てきた通りである。彼が《光りの斑模様》（まだらもよう）を「光の斑（ぶち）」と表現し、韻律からそれを「ひかりのぶ」と読んだとしても、私は何ら違和感を感じない。いや、寧ろ、これに違和感を覚えるという御仁は、本詩集に散在する他の奇妙な短縮音や清音・濁音を問題にすべきであろう。さらにあなた方には困ったことに、後発の白秋自身の編集になる昭和三（一九二八）年アルス刊の「白秋詩集Ⅱ」（国立国会図書館デジタルコレクション当該詩篇の画像）では、悩ましくもこの「ふ」のルビにカスレが生じてしまっているのである。但し、当該書籍の活字の様態からは「ふ」の第一画のすぐ右側に濁点はあるはずであるから、これは「ふ」と執つてよいと思う。されば、少なくとも、アルス版では白秋は「ふ」と読ませていると譲つてよいと思うものの、それを以って、私はこの「ぶ」を単なる現行の誤記或いは植字工・校正者の誤植であると断ずることは出来ないのである。見た目を重視し、しか「ぶ」の読みが私には不自然とは思わない以上、ここは上記の通り、「ぶ」で示した。当時の有意な数の読者も書かれた通りに「ぶ」で読んだと私は思うからである。」

華のかげ

時は夏、血のごと濁る毒水の
鰐住む沼の眞晝時、夢ともわかず、
日に嘆く無量の廣葉かきわけて
ほのかに青き青蓮の白華咲けり。

ここ過ぎり街にゆく者、――
婆羅門の苦行の沙門、あるはまた
なまかはあき
生皮漁る旃陀羅が鈍き刃の色、
たまたまに火の布卷ける奴隸ども
石油の鑪を地に投げて鋭に泣けど、
この早何時かは止まむ。これやこれ、
饑に墮ちたる天竺の末期の苦患。

見るからに氣候風吹く空の果
銅色のうろこ雲濕潤に燃えて
恒河の鰐の脊のごとはらばへど、
日は爛れ、大地はあはれ柚色の
熱黃疸の苦痛に吐息も得せず。

この恐怖何に類へむ。ひとみぎり
地平のはてを大象の群御しながら
槍揮ふ土人が晝の水かひも
終へしか、消ゆる後姿に代れる列は
こは如何に殖民兵の黒奴らが
喘ぎ曳き来る眞黒なる火薬の車輛
掲ぐるは危嶮の旗の朱の光
絶えず饑ゑたる心臓の呻くに似たり。

さはあれど、こなる華と、圓き葉の
あはひにうつる色、匂、青みの光、
ほのほのと沼の水面の毒の香も
薄らに交り、晝はなほかすかに顫ふ。

「やぶちゃん注…「旃陀羅」「梅陀羅」とも書く。梵語「チャンドーラ」の漢字音写で、語源的には「チャンダ」（激しい・寧猛な・残酷な）の意）から来た語とみられる。中国では「嚴熾執」「暴惡人」「屠殺者」「殺者」などと訳されている。所謂カースト四姓外の最下級とされた階級で狩獵・畜などを生業とした。これは中国を経由して本邦にもそのままに伝わり、江戸時代には、このインドに起源をもつ「旃陀羅」と、その成立を異にするはずの中国の「屠者」と、日本の「穢多・非人」とが結びつけられて差別の合理化が謀られた。被差別部落の人々には、その死後に「桃源旃陀羅男」などの戒名をつけ、墓石にきざまつけて差別した事実がある。

「熱黃疸」高い熱と、肝障害による黄疸を呈した病態。種々の疾患で見られる。黄熱病（事実、高熱が出て重症化すると黄疸が見られることによる命名）を想起されるかも知れぬ（或いは北原白秋はそれを念頭に置いたのかも知れぬ）が、黄熱病は熱帯アフリカと中南米に特徴的な風土病でインドは感染分布域に含まれない。」

幽 閉

色濁るぐらすの戸もて
封じたる、白日の日のさすひと間、
そのなかに蠟のあかりのすすりなき。

いましてた、蓋閉したる風琴の忍びのうめき。
そがうへに瞳盲ひたる嬰兒ぞ戯れあそぶ。
あはれ、さは赤裸なる、盲ひなる、ひとり笑みつつ、
聲たてて小さく愛しき生の臍をまさぐりぬ。

物病ましさのかぎりなる室のといきに、
をりをりは忍び入るらむ戯けたる街衢の囃子、
あはれ、また、嬰兒笑ふ。

ことごと、ひそかなる母のおとなひ
幾度となく戸を押せど、はては敲けど、
色濁る扉はあかず。
室の内暑く悒鬱く、またさらに嬰兒笑ふ。

かくて、はた、硝子のなかのすすりなき
蠟のあかりの夜を待たず盡きなむ時よ。
あはれ、また母の愁の恐怖とならむそのみぎり。

あはれ、子はひたに聴き入る、
珍らなるいとも可笑しきちやるめらの外の一節。

鉛の室

いんきは赤し。――さいへ、見よ、室の腐蝕に
うちにじみ倦じつつゆくわがおもひ、
暮春の午後をそこはかと朱をば引けども。

油じむ末黒の文字のいくつらね
悲しともなく誦しゆけど、響らぐ聲は
鏽びてゆく鉛の悔、しかすがに、

強き薫のなやましき、鉛の室は
くわとばかり火酒のごとき噎びして
壁の濕潤を玻璃に蒸す光の痛さ。

力なき活字ひろひの淫れ歌、
病める機械の羽たたきにあるは沁み來し
新らしき紙の刷られの香も消ゆる。

いんきや盡きむ。――はやもわがころのそこに
聴くはただ饅えに饅えゆく匂のみ、――
はた、滓よどむ壺を見よ。つとこそ一人、

手を棚へ延すより早く、とくとくと、
赤き硝子のいんき鑷傾むけそそぐ
一刹那、壺にあふるる火のゆらぎ。

さと燃えあがる間こそあれ、翻ると見れば
手に平む吸取紙の骸色
爛れぬ――あなや、血はしと、と卓に滴る。

四十年九月

「やぶちゃん注…「卓」は現代仮名遣「しよく」で、これは唐音。かく読んだ場合、狭義には仏前に置いて香華を供える机を指し、これは茶の湯にも用いる。広義には食卓で、私はここは後者の「テーブル」でよいと考えている。」

眞 晝

日は眞晝——野づかさの、寂寥の心の臓にか、
ただひとつ聲もなく照りかへす硝子の破片。
そのほとり WHISKY の匂蒸す銀色の内、
聲するは、密かにも露吸ひあぐる、
色赤き、色赤き花の吐息……

四十一年十二月

「やぶちゃん注…本篇を以って「外光と印象」パートは終わっている。」

「やぶちゃん注…[「天草雅歌」](#)パートの解説付き（解説は実際にはポイント落ち）[標題ページ](#)。活字ポイントの違いを判って戴くために前の「外光と印象」パート最後の「真晝」との見開き画像で示した。絵は石井柏亭のタッチであるから、白秋がスケッチしてきたものをもとに石井氏が描いたものと思われる。」

このさんたくるすは三百年まへより大江村の切支
丹のうちに忍びかくして守りつたへたるたつとき
みくるすなり。これは野中に見いでたり。

天草島大江村天主堂秘藏

天草雅歌

「やぶちゃん注…以下は、上記パート標題ページの裏に記されてある。クレジット（実際には画像の通り、二行書きの辞の後に凡そ四行分の行空けがある）も含めて、底本では有意にポイントが小さい。その左ページの挿絵とパート標題再表示と、その上に石井柏亭の挿絵があり、第一篇「角を吹け」が始まる。[両開きの画像](#)。」

四十年八月、新詩社の諸友とともに遠く
天草島に遊ぶ。こはその記念作なり。

「四十年十月作」

「やぶちゃん注…以上の明治四〇（一九〇七）年八月の旅については、既に[詩集巻頭の「邪宗門扉銘」](#)で引用した吉田精一氏の解説に出るが、ここでは[個人サイト「天草探見」](#)の[「五足の靴文学碑」](#)をリンクさせておく。この旅を記念した各種文学碑の画像と説明板が電子化されている。中でも木下奎太郎歌碑の記載が詳しく、奎太郎が『東京帝大医学部一年の』時、明治四十年八月、『新詩社主幹の与謝野寛、北原白秋（早稲田大文科一年）』、『吉井勇（早稲田大文科一年）』、『平野万里』（ぼんり 明治一八（一八八五）年、昭和二二（一九四七）年…化学者・官僚で歌人・詩人。農商務省・商工省に勤めた。大正一〇（一九二一）年に第二次『明星』創刊に参画した後、与謝野夫妻が没するまで協力し、作品を発表した。大正一二（一九二三）年には「鷗外全集」の編集も務めた）『（東大工学部一年）の五人が九州のキリシタン遺跡探訪の旅をした』。『約一ヶ月ほどの日程で、一行が天草の土を踏んだのは』八月八日、『長崎県茂木港から天草下島の富岡港に上陸し

て一泊し』、翌九日には『天草町大江まで』、『炎天下』三十二キロメートルの『陰阻な山道を歩いた。其の夜は海岸近くの本賃宿に一泊』し、翌十日、『大江教会で』フランス『人司祭のガルニエ神父から話を聞き』、『深い感銘を受けた。このガルニエ神父との会見の旅の中核となっている。この九州旅行の後、五人の文芸活動は噴出し、異国情緒の漂った南蛮文学が展開した』とある。与謝野寛がこの旅を紀行記録「五足の靴」として、少し遅れる形のルポルタージュ風の記事として同年八月七日から九月十日にかけて『東京二六新聞』紙上に連載したことから、この旅を「五足の靴」と呼ぶ。この旅を特集した[旅行サイトのこちら](#)の「五足の靴」文学碑の説明板によって、旅自体は同年七月三十一日から八月十七日までであったことが判る。」

天艸雅歌

角を吹け

わが佳耦^{とも}よ、いざともに野にいでて
歌はまし、水牛^{すゐぎう}の角^{つの}を吹け。
視よ、すでに美果^{みくだもの}實あからみて
田にはまた足穂^{たりほ}垂れ、風のまに
山鳩^{やま鳩}のこゑきこゆ、角^{つの}を吹け。
いざさらば馬鈴薯^{ばれいしょ}の畑^{はた}を越え
瓜哇^{ジャワ}びとが園に入り、かの岡に
鐘やみて蠟^{ろう}の火の消ゆるまで
無花果^{いちじゅく}の乳^ちをすすり、ほのぼのと
歌はまし、汝^なが頸^{くび}の角^{つの}を吹け。
わが佳耦^{とも}よ、鐘きこゆ、野に下りて
葡萄樹^{ぶどう}の汁^{つゆ}滴^{した}る邑^{むら}を過ぎ、
いざさらば、パアテルの黒き袈裟^{けさ}
はや朝^{あさ}の看經^{つとめ}はて、しづしづと
見えがくれ棕櫚^{しゆろ}の葉に消ゆるまで、
無花果^{いちじゅく}の乳^ちをすすり、ほのぼのと
歌はまし、いざともに角^{つの}を吹け、
わが佳耦^{とも}よ、起き來れ、野にいでて
歌はまし、水牛^{すゐぎう}の角^{つの}を吹け。

「やぶちゃん注…この詩篇は一行字数をかなり意識して合わせるようにしていることが判る。

「佳耦^{とも}」「耦^も」（音「グウ」）は「二人がならぶこと・向きあうこと・類^{たぐ}い・連れ合い」の意がある。

「パアテル」先の注の[旅行サイトのこちら](#)によれば、大江天主堂に到着した五人は『大江教会で、地元信者から「パアテルさん」と呼ばれるフランス人宣教師ガルニエ神父に對面し』たとある。「パアテル」はラテン語「pater」で「父・神父」の意である。[彼のウィキ](#)他によれば、パリ外国宣教会所属のフランス人カトリック司祭フレデリック・ルイ・ガルニエ (Frederic Louis Garner 一八六〇年〜昭和一九四一年…なお、彼はフランスから送られてくる一時帰国費用も蓄え、全ての財産を大江天主堂の建設に投じ、この地で亡くなった) はオート＝ロワール県ル・ピュイ＝アン＝ヴレ市出身。明治二三（一八八五）年十二月、二十四歳の時に来日、京都での日本語修得を経て明治一九（一八八六）年長崎県伊王島の大明寺教会、二年後には上五島の魚の目教会、明治二五（一八九二）年に

天草のこの大江教会に司祭として赴任した（昭和二（一九二七）年まで崎津教会司祭を兼任）。以来、同地に没するまでの四十九年間、質素な生活を送りながら、天草島民への布教に従事した。この間、昭和八（一九三三）年には私費を投じて大江教会の現会堂（通称「大江天主堂」）を完成させている。ロマネスク様式の同会堂は、ガルニエ司祭の布教に捧げた生涯の記念碑であると同時に、日本の大工職人がヨーロッパの教会建築の技術を摂取して明治から昭和期の日本各地に建てた、いわゆる「天主堂」の作例として、近代建築史上でも重要なものである。」

ほのかなる蠟の火に

いでや子ら、日は高し、風たちて
棕櫚の葉のうち戦ぎ冷ゆるまで、
ほのかなる蠟の火に羽をそろへ
鳩のごと歌はまし、汝が母も。
好き日なり、媼たち、さらばまづ
禱らまし讃美歌の十五番、
いざさらば風琴を子らは弾け、
あはれ、またわが爺よ、なにすとか、
老眼鏡ここにこそ、座はあきぬ、
いざともに禱らまし、ひとびとよ、
さんた・まりや。さんた・まりや。さんた・まりや。
拜めば香爐の火身に燃えて
百合のごとわが靈のうちふるふ。
あなかしこ、鳩の子ら羽をあげて
御龕なる蠟の火をあらためよ。
黒船の笛きこゆいざさらば
ほどもなくパイテルは見えまさむ、
さらにまた他の燭をたてまつれ。
あなゆかし、ロレンゾか、鐘鳴らし、
まめやかに安息の日を祝ぐは、
あな樂し、眞白なる羽をそろへ
鳩のごと歌はまし、わが子らよ。
あはれなほ日は高し、風たちて
棕櫚の葉のうち戦ぎ冷ゆるまで、
ほのかなる蠟の火に羽をそろへ
鳩のごと歌はまし、はらからよ。

「やぶちゃん注：YouTube の [yu000000000](https://www.youtube.com/watch?v=yu000000000) 氏の『讃美歌 15 番「われらのみ神は」(パイプオルガン) Hymn: The Lord is king! lift up thy voice(pipe organ)』をリンクさせておく。普通の信徒の合唱付きを探したが、いいものが見出せなかった。歌詞は画像に出る。

「パイテル」「角を吹け」の私の注を参照されたい。
「ロレンゾ」イタリア語圏の男性名ロレンツォ (Lorenzo) で知られるが、元はラウレンティウス (Laurentius) で、ラテン語の男性名「ローマを含むイタリア中央西部地方に位置していたラティウム地方出身の男」の意。ここは邦人に与えられたクリスチャン・ネーム。よく知られた聖人で総ての宗派から崇められる人物としては「ローマのラウレンティウ

ス」(聖ラウレンチオ助祭殉教者：St. Laurentius Martyr／イタリア語：San Lorenzo martire 二二五年～二五八年)が挙げられる。彼は生きながら熱した鉄格子の上で火炙りにされて殉教(切支丹用語「まるちり」)した。因みに、私の偏愛する芥川龍之介の「奉教人の死」(大正七(一九一八)年九月発行『三田文学』初出)の「ろおれんぞ」が登場するに
は、まだ、十一年、待たねばならない(私は因みに、[奉教人の死](#)〔[岩波旧全集版](#)〕・[作品集](#)〔[傀儡師](#)〕版「[奉教人の死](#)」、及び芥川自身によって隠蔽された原拠である[斯定筌](#) (Michael Steichen 1857-1929) 著「[聖人伝](#)」より「[聖マリナ](#)」の他(以上はサイト版)、[芥川龍之介](#)「[奉教人の死](#)」(自筆原稿復元版)ブログ版と、[同前やぶちゃん注](#) [ブログ版](#)を
作成済みである。)」

艣を抜けよ

はやも聴け、鐘鳴りぬ、わが子らよ、
御堂にははや夕の歌きこえ、
蠟の火もともるらし、艣を抜けよ。
もろもろの美果實籠に盛りて、
汝が鴿ら畑に下り、しらしらと
歸るらし夕づつのかけを見よ。
われらいま、空色の帆のやみに
新なる大海の香爐採り
籠に炷きぬ、ひるがへる魚を見よ。
さるほどに、跪き、ひとびとは
目見青き上人と夜に禱り、
捧げます御くるすの香にや酔ふ、
うらうらと咽ぶらし、歌をきけ。
われらまた祖先らが血によりて
洗禮がれし假名文の御經にぞ
主よ永久に恵みあれ、われらも、と
鴿率つつ禱らまし、帆をしぼれ。
はやも聴け、鐘鳴りぬ、わが子らよ、
御堂にははや夕の歌きこえ、
蠟の火もくゆるらし、艣を抜けよ、

「やぶちゃん注…最終行を読点で終わるのは、本詩集の中でも特異点である。
「艣」「櫓・艫」に同じ。舟を漕ぐそれである。」

汝にささぐ

をみなご
女子よ、

汝に捧ぐ、

ただひとつ。

然はあれ、汝も知らむ。

このさんた・くるすは、かなた

檳榔樹の實の落つる國、

夕日さす白珙瑯の石の階

そのその心の心、――

えめらるど、あるは紅玉、

褐の埴八千層敷ける眞底より、

汝が愛を讃へむがため、

また、清き接吻のため、

水晶の柄をすげし白銀の鍬をもて、

七つほど先の世ゆ世を繼ぎて

ひたぶるに、われとわが

採りいでし型、

その型を

汝に捧ぐ、

女子よ。

「やぶちゃん注」〔檳榔樹〕単子葉植物綱ヤシ目ヤシ科ビンロウ属ビンロウ *Areca catechu*。本邦の南日本に植生する同じヤシ科ビンロウ属ビンロウ *Livistona chinensis* とは異なる植物なので注意が必要（同じ「檳榔」と漢字表記するが別種である）。

「白珙瑯」白い珙瑯引きの（珙瑯を焼き付けた）石段。珙瑯は鉄やアルミニウムなどの金属材料表面にシリカ（二酸化ケイ素）を主成分とするガラス質の釉薬を高温で焼き付けたもの。英語では「Enamel」（エナメル）。「珙」は「釉薬」の、「瑯」は「金属や玉が触れ合う音」或いは「美しい石」の意である。金属材料由来の機械的耐久性と、ガラス質由来の化学的耐久性を併せ持ち、食器・調理器具・浴槽などの家庭用品・屋外広告看板・道路標識・鉄道設備用品・化学反応容器などに用いられる。工芸品の珙瑯は「七宝」或いは「七宝焼き」と呼ばれ、工芸品としてのそれらの素地には主に銅・銀・金が使われる。その歴史は古く、紀元前一四二五年頃に製作されたと推測される世界最古の珙瑯製品とおぼしき加工品が、エーゲ海中部のキクラデス諸島に属するギリシャ領のミコノス島で発見されている。その後、この技術が、ヨーロッパ方面とアジア方面に伝播し、十六世紀頃には朝鮮半島に流れ、そこを経て、日本へと渡ってきたと考えられている。また、ツタンカーメン

の黄金のマスクの表面には瑠瑯加工が施されてあった（[以上はウィキの「瑠瑯」に拠った](#)）。

「紅玉」ルビー（英語：Ruby）ダイヤモンドに次ぐ硬度を持つ。

「褐の埴」肌理の細かい黄赤色の粘土で作った褐色の瓦或いは陶板。

「八千層」贅沢に何層にも積み重ねた。

「世ゆ」の「ゆ」は上代の格助詞で、動作の起点を示す「くから・く以来」、或いは經由点を示す「くを通って」。上代の歌語で、本詩集の使用の特異点。類義語に「ゆり」「よ」

「より」があったが、中古に入り、「より」に統一され、歌語のみで辛うじて生き残った。」

ただ秘めよ

日ひけるは、
あな、わが少女、
天艸の蜜の少女よ。
汝が髪は鳥のごとく、
汝が唇は木の實の紅に没薬の汁滴らす。
わが鴿よ、わが友よ、いざともに擁かまし。
薫濃き葡萄の酒は
玻璃の壺に盛るべく、
もたらしし麝香の臍は
汝が肌の百合に染めてむ。
よし、さあれ、汝が父に、
よし、さあれ、汝が母に、
ただ秘めよ、ただ守れ、齋き死ぬまで、
虐の罪の鞭はさもあらばあれ、
ああただ秘めよ、御くるすの愛の徴を。

「やぶちゃん注」…「没薬」もつやく ムクロジ目カンラン科カンラン科 Burseraceae のコンミフオラ
(ミルラノキ) 属 *Commiphora* の樹木から分泌される赤褐色の植物性ゴム樹脂を指す。
イキの「没薬」によれば、『スーダン、ソマリア、南アフリカ、紅海沿岸の乾燥した高地
に自生』し、『起源についてはアフリカであることは確実であるとされる』。『古くから香
として焚いて使用されていた記録が残され』、『また殺菌作用を持つことが知られており、
鎮静薬、鎮痛薬としても使用されていた。古代エジプトにおいて日没の際に焚かれていた
香であるキフィの調査には没薬が使用されていたと考えられている。またミイラ作りに遺
体の防腐処理のために使用されていた。ミイラの語源はミルラから来しているという説があ
る』とある。

「汁」しゆ 小学館「日本国語大辞典」の「汁」の方言欄に『島原方言』として「シユル」を載
せる。これは直に発音を聴かないと判らぬが、「しゆる」の摩擦音「しゆ」の後の「る」
は脱落表記されても、強ち、不自然ではない。』

さならずば

わが家の可愛ゆき鴿を
その雛を

汝せちに戀ふとしならば、

いでや子よ、

逃れよ、早も邪宗門外道の教

かくてまた遠き祖より傳へこし秘密の聖蹟

とく柱より取りいでよ。もし、さならずば

もろもろの麝香のふくろ、

桂枝、はた、没藥、蘆薈

および乳、島の無花果、

如何に世のにほひを積むも、――

さならずば、

もしさならずば――

汝いかに陳じ泣くとも、あるは、また

護摩炷き修し、伴天連の救よぶとも、

ああ遂に詮業なけむ。いざさらば

接吻の妙なる蜜に、

女子の葡萄の息に、

いで『ころべ』いざ歌へ、わかうどよ。

「やぶちゃん注…個人的には最終行は「いで、『ころべ』、いざ、歌へ、わかうどよ。」とあるべきと思う。

「没藥」[前の詩篇](#)の私の注を参照されたい。

「蘆薈」現代仮名遣「ろかい」。单子葉植物綱キジカクシ目ススキノキ科ツルボラン亜科アロエ属 *Aloe* のアロエのこと。」

嗅煙艸

『あはれ、あはれ、深江の嫗よ。
髪も頬も煙艸色なる、
棕櫚の根に蹲む嫗よ。
汝が持てる象牙の壺は
また薰る褐なる粉は
何ぞ。また、せちに鼻つけ
涙垂れ、あかき眼擦るは。』
このときに渡の嫗
呻ぶらく。『わが葡萄酒、
かを嗅ぎてわかきと思ふ。』
『さらば、汝は。』『責めそ、さな、さな、
養生を骸はただ欲れ。』
さればこそ、この嗅煙艸。』

鵠

わかうどなゆめ近よりそ、
かのゆくは邪宗じやしゆうの鵠くぐひ、
日のうちに七度八度ななたびやたび
潮あび化粧うしほすといふ
伴天連ばてれんの秘ひその少女をとめぞ。
地になびく髪には蘆薈ろくわい、
嘴はしにまたあかき實みを塗ぬる
淫みだらなる鳥にしあれば、
絶えず、その眞白羽ましろはひろげ
乳香にふかうの水したたらす。
されば、子なゆめ近よりそ。
視よ、持つは炎ほのほか、華はなか、
さならずば實みの無花果いちじゆくか、
兎とにもあれ、かれこそ邪法じやほう。
わかうどなゆめ近よりそ。

「やぶちゃん注…「鵠」「鵠」(現代仮名遣「くぐい」は広義の「白鳥」(鳥綱カモ目カモ科ハクチヨウ属 *Cygnus*、或いはそれに類似した中・大型の白い鳥) 上古より古名であるが、辞書によっては、ハクチヨウ属コハクチヨウ亜種コハクチヨウ *Cygnus columbianus bewickii* に比定する。個人的には私も協議のそれを採るが、ここはただ広義の「白鳥」一般でよからう。私の「[和漢三才圖會第四十一 水禽類 鵠\(くぐひ\)](#)」(コハクチヨウ)をリンクさせておく。

「蘆薈」先行する「さならずば」の私の注を参照されたい。

「乳香」インド・イランなどに産する樹の脂やにの一種で、盛夏に砂上に流れ出でて固まり、石のようになったものを指し、香料・薬用とする「薰陸香」(くんりくこう…呉音で「くんろく(つ)こう」とも読み、「くろく」「なんばんまつやに」などとも呼ばれる。その中で乳頭状の形状を有するものを特に「乳香」と称し、狭義にはムクロジ目カンラン科ボスウェリア属 *Boswellia* の常緑高木から採取されるそれを指すとされる。』

日ごとに

日ごとにわかき姿（すがた）して

日ごとに歌ふわが族（ぞう）よ、

日ごとに紅（あか）き實（み）の乳房（ちぶさ）

日ごとにすてて漁（あさ）りゆく。

「やぶちゃん注」：「族（ぞう）」「ぞく」の音変化で「一族・子孫」の意。」

黄金向日葵

あはれ、あはれ、こがねひぐるま黄金向日葵
みまし汝また太陽にも倦きしか、
なんごく南國の空の眞晝を
かなしげに疲れて見ゆる。

「やぶちゃん注」こがねひぐるま「黄金向日葵」キク目キク科キク亜科ヒマワリ属ヒマワ
リ *Helianthus annuus* のこと。」

一 炷

香爐^{かうろ}いま

一炷^{いつす}のかをり。

あはれ、火はこころのそこに。

さあれ、その

一炷^{いつす}のけむり、

かの空^{そら}の青き龕^{みづし}に。

「やぶちゃん注…「一炷」「一炷^{いつす}」香を一炷^{ひとた}き薫^{くゆ}らすこと。また、その「一炷^{ひとくゆ}」。^{ひとくゆ}読みは「い
つしゆ（いっしゆ）」「いつちゆう（いっちゆう）」だが、拗音を嫌ってかくしたもののよ
うで、前者が発音上、かく変化することは特に不審とは思われない。

本篇を以って「天艸雅歌」パートは終わっている。」

「やぶちゃん注…パート標題と石井柏亭の挿絵。」

青き花

南紀旅行の記念として、且はわが羅曼底時代のあえかなる思出のために、この幼き一章を過ぎし日の友にささぐ。

「四十年二、三兩月中作」

「やぶちゃん注…以上は、パート標題ページの裏(右ページ中央にごくポイント落ちで示されてある辞。底本ではクレジットとの間は辞の三分ほどの行空けが施されてある。この「南紀旅行」というのは、年譜によれば、作詩された前年の明治三九(一九〇六)年十月に、與謝野鉄幹・吉井勇・茅野蕭々(明治一六(一八八三)年〓昭和二一(一九四六)年…ドイツ文学者で歌人。長野生まれ。本名は儀太郎。東京帝大卒。「明星派」の新進歌人として注目され、『明星』廃刊後は白秋・啄木らと『スバル』に作品を発表した。後、三高・慶大・日本女子大の教授を務めた。著作に「ゲョエテ研究」・「独逸浪漫主義」が、訳書に「リルケ詩抄」などがある。私はカテゴリ「詩歌俳諧俳句」で彼のリルケの訳詩を幾つかランダムに電子化している)らとともに伊勢及び京都方面を歴遊しているので、その時のことを指しているものと推定される。

「羅曼底」恐らくは「ろまんちつく」(歴史的仮名遣)或いは、フランス語原音に近づけるならば、「ロマンテイク(ロマンティック)」と読んでいる。英語なら「romantic」であるが、ここはフランス語で「romantique」ととりたい。ここは、空想好きな、夢見がちな、「青」くさい、若き日の放浪の「旅」の時代、ということになるうか。但し、後に出る詩篇「羅曼底の瞳」では高い確率で「ロマンチック」と読んでいる。

「過ぎし日の友」個人的には「天鵝絨のほひ」の注で記した、白秋の親友で彼が愛し、自死して果てた中島鎮夫(なかじましずお(しづを) 明治一九(一八八六)年五月九日〓明治三七(一九〇四)年二月十三日…ペン・ネームは白雨。享年十九(満十七歳)を指しているものと私は読む。」

青き花

そは暗きみどりの空に
むかし見し幻なりき。
青き花

かくてたづねて、
日も知らず、また、夜も知らず、
國あまた巡りありきし
そのかみの
われや、わかうど。

そののちも人とうまれて、
微妙くも奇しき幻
ゆめ、うつつ、
香こそ忘れね、

かの青き花をたづねて、
ああ、またもわれはあえかに
人の世の
旅路に迷ふ。

君

かかる野に

何時いつかありけむ。

佛手柑ぶしゆかんの青む南國なんこく

薫る日の光なよらに

身をめぐりほめく物の香か、

鳥うたひ、

天そらもゆめみぬ。

何時いつの世か

君と識しりけむ。

黄金こがねなす髪もたわたわ、

みかへるか、あはれ、つかのま

ちらと見ぬ、わかき瞳ひとみに

にほひぬる

かの青き花。

「やぶちゃん注」ぶしゆかん「佛手柑」ムクロジ目ミカン科ミカン属シトロン変種ブツシュカン

Citrus medica var. *sarcodactylis*。但し、北原白秋は後の「抒情小曲集 おもひで」の冒頭の「わが生ひたち」の「6」の冒頭で、「靜かな晝のお葬式に、あの取澄ました納所坊主の折々ぐわららんと鳴らす鐺鉞ねうばちの音を聴いたばかりでも笑ひ轉ころげ、單に佛手柑の實が酸すゆかつたといつては世の中をつくづく果敢はかなむだ頃の Tonka John の心は今思ふても罪のない鷹揚なものであつた。さうしてその恐ろしく我儘な氣分のなかにも既にしをらしい初戀の芽は萌えてゐた」と幼少期の柳川の記憶の中に記しているから、果肉の少ないブツシュカンではなく、変種でない、もとの被子植物門双子葉植物綱ムクロジ目ミカン科ミカン属シトロン *Citrus medica* で、和名「丸仏手柑マルブツシュカン」のことを指しているのではないかと思う。ウ

イキの「シトロン」によれば、『漢名は枸櫞（くえん）。レモン』（ミカン属レモン *Citrus limon*）『と類縁関係にある』。『原産はインド東部、ガンジス川上流の高地。しかし紀元前にはすでにローマや中国に伝来していた。またアメリカ大陸にはコロンブスによる到達以降に伝わった。日本では「本草図譜」（『文政一一（一八二八）年成立』）に記載されているので、江戸時代以前に伝わっていたと思われる』。『枝にはとげが多い。葉は淡黄綠色、細長い楕円形で縁に細かいぎざぎざ（鋸齒）がある。新芽や花は淡紫色を帯びている品種が多く、花弁は細長い』。『熟した果実の表面は黄色く、形状は品種により様々だが、一般に紡錘形で重さは』百五十〜二百グラムで、『頂部に乳頭が発達している。果皮はやわらかいが分厚く、果肉が少なく、果汁も少ない。また』、『果肉がかなりすっぱい品種とそうでない品種がある』。『ユダヤ教では一部の品種の果実をエトログ』と呼び、「仮庵の

祭り」で新年初めての降雨を祈願する儀式に用いる四種の植物の『一『つとする』。現代
『フランス語でシトロン (Citron) と言った場合は』、『本種ではなく』、『レモンを指す。
現在のフランス語でシトロンを示す場合はセトラ (Cédrat) と呼ぶ』とある。』

桑 名

夜となりぬ、神世に通ふやすらひに
早や門鎖す古伊勢の桑名の街は
路も狭に高き屋づくり音もなく、
陰森として物の隈ひろごるにほひ。
おほらかに零落の戸を瞰下して
愁ふるがごと月光は青に照せり。

参宮の衆にかあらむ、旅びとの
二人三人はさきのほどひそかに過ぎぬ。
貸旅籠札のみ白き壁つづき
ほとほと遠く、物ごゑの夜風に消えて、
今ははた数添はりゆく星くづの
天なる調やはらかに、地は闌けまさる。

時になほ街はづれなる老舗の戸
少し明りて火は路へひとすぢ射しぬ。
行燈のかけには清き女の童物縫ふけはひ、
そがなかにたわやの一人髪あげて
戸外すかしぬ。――事もなき夜のしづけさに。

「やぶちゃん注」：「たわや」「手弱女」（「たわや」は「撓」に親しみを示す接尾語「や」の付いたもの。「手弱」は当て字）の白秋による縮約（但し、「たわやか」を「たわや」と略す場合が古くからあるので問題はなからう）で、「なよなよとした女性・たおやめ」のこと。」

朝

——汽車のなかにて——

わが友よ、はや眼をさませ。
玻璃の戸にのこる灯ゆらぎ、
夜はわかきうれひに明けぬ。
順禮はつとにめざめて
あえかなる友をおもふ。
清しげの髪のそよぎに
笈のいろもほのぼの。

わが友よ、はや眼をさませ。
かなた、いま白む野のそら、
薔薇にはほのかに薄く
葦よりやや濃きあはひ、
かのわかき瞳さながら
あけぼのの夢より醒めて
わだつみはかすかに顫ふ。

紅　　玉

かかるとき、
海ゆく船ににんぎよ
まどはしの人魚にんぎよが蹤つける。
美しくじゆつ　ゆふべ術の夕に、
まどろみの香油かうゆしたたり、
ころまた
けぶるともなく、
まぼろし幻の黒髪きたり、
よ夜のごとも
わが眼蔽めおほへり。

そことなく
おほくのひとの
あえかなるかたらひおぼえ、
われはただひとと凝視みつめぬ。
夢ふかき黒髪おくの奥
しゆ朱に喘ぐ
こうぎよく紅玉ひとつ、
これや、わが胸より落つる
わかき血の
もゆ燃る滴したたり。

海邊の墓

われは見き、
いつとは知らね、
薄^{うす}あかるにほひのなかに
夢ならずわかれし一人^{ひとり}、
ものみなは涙のいろに
消えぬとも。

ああ、えや忘る。
かのわかき黒髪のなか、
星のごと濡れてにほひし
天色^{そらいろ}の勾玉^{まがたま}七つ。

われは見ぬ、
漂^{さす}浪^らひながら、
見もなれぬ海邊の墓^はに
うつつにも眠れる一人^{ひとり}、
そことなき髪のにほひの
ほのめきも、

ああ、えや忘る。
いま寒き夕闇^{ゆふやみ}のそこ、
星のごと濡れてにほへる
天色^{そらいろ}の露草^{つゆくさ}七つ。

渚の薔薇

紀の南、白良の渚、
荒き灘高く碎けて
天暗う轟くほとり、
ひとならび夕陽をうけて
面ほてり、むらがり咲ける
色紅き薔薇の族よ。
瞬く間、問近に寄せて
崩れうつ浪の穂を見よ。
今しさと滴るばかり
激瀾の飛沫に濡れて、
彌さらに匂ひ閃めく
火のごとき少女のむれよ。
寄せ返し、遠く消えゆく
鹽漚暗き音を聴け。
ああ薔薇、汝にむかへば
わかき日のほこりぞ躍る。
薔薇、薔薇、あてなる薔薇。

「やぶちゃん注」『白良』和歌山県西牟婁郡白浜町にある砂浜海岸である白良浜（しららはま）グーグル・マップ・データ。私も行ったことがある。

「族」「ぞく」の音変化で「一族・子孫」の意。

「鹽漚」打ち寄せる泡立つ波のこと。」

紐

海の霧にほやかなるに
灯も見ゆる夕暮のほど、
ほのかなる旅籠の窓に
在るとなく暮れもなやめば、
やはらかき私語まじり
咽びきぬ、そこはかとなく、
火に焼くる薔薇のほひ。

ああ、薔薇、暮れゆく今日を
そぞろなり、わかき喘に
圖らずも思ひぞいづる。
そは熱き夏の渚邊、
濡髪のなまめかしさに、
女つと寝がへりながら、
みだらなる手して結びし
色紅き鞆の紐。

畫

蜜柑船^{みかんぶね}にうかびて

壁白き濱^{かきしろ}のかなたは

あたたかに物賣^{ものひる}る聲す。

波もなき港^{しりがね}の眞畫、

白銀^{しろがね}の挿櫛^{さしぐし}撓^{たは}み

いま遠く二つら三つら

水の上をすべると見つれ。

波もなき港^{しりがね}の眞畫、

また近く、二つら三つら

飛^{とび}の魚すべりて安^{やす}し。

「やぶちゃん注…「飛^{とび}の魚」「波もなき港^{まひる}の眞畫」に「白銀^{しろがね}の挿櫛^{さしぐし}」を「撓^{たは}」ませて、「いま」「遠く二つら」「三つら」「水の上をすべると見^み」た。また、「波もなき港^{まひる}の眞畫」に「また近く、二つら」「三つら」「飛^{とび}の魚」が「すべりて安^{やす}し」（如何にも気持ちよさそうに飛ぶ）というのである。大方の読者はこれを文字通りの「飛び魚」「とびうを」（本邦産代表種であり、南紀に分布する条鰭綱新鰭亜綱棘鰭上目ダツ目トビウオ科ハマトビウオ属トビウオ *Cypselurus agoo agoo* を挙げておく）として読むと思う。確かに紀州では本種を「とびうを」と呼んでいることが、[宇井縫藏著「紀州魚譜」（昭和七（一九三二）年淀屋書店出版部・近代文芸社刊）のトビウオの項標題に添えて「トビノウヲ」とあることから、トビウオを「飛^{とび}の魚」と呼ぶことに異論はない。しかし私は、「波もないすっかり凪いだ港から、十月（明治三九（一九〇六）年）という時期に、トビウオが港の近くや相対的に少し離れた近位置（そこも凪いでいるのでなくても現認は出来ない）、あちこちで胸鰭を撓^{たは}ませて何匹も飛ぶだろうか？」という強い疑問を持つ。そもそものが、トビウオ全体が沖合・外洋（遠洋）性の魚類である。飛翔にはエネルギーを使うので、主に何らかの天敵その他からの逃走手段として飛ぶのであって、年柄年中、飛んでいるわけではない。宇井氏も述べておられるが、確かに沿岸に寄って来る時期はある。しかしそれは、初夏の産卵期である。また、トビウオは別名を「春飛び」とも呼び、春告魚とされるのだが、この南紀旅行とトビウオは時期の附合が甚だ悪いのである。「じゃあ、何だ？」と言われるだろう。私は一読、直ちに思い浮かべた映像は、ボラ目ボラ科ボラ属ボラ *Mugil cephalus* の群れのジャンプである。彼らはしばしば、海面上にジャンプし、時には体長の二倍から三倍もの高さまで跳躍する（\[ウィキの「ボラ」\]\(#\)によれば、『跳びあがる理由は周囲の物の動きや音に驚いたり、水中の酸素欠乏やジャンプの衝撃で寄生虫を落とすためなど諸説あるが、まだ解明には至っていない』とある）。ボラは体側から腹側が銀白色で、ジャンプすると非常に目立ち（それを「白銀^{しろがね}の挿櫛^{さしぐし}撓^{たは}み」と形容したとしても、私は、はなはだ腑に落ちる）、大型（最大八十センチメートル（「トド」と呼ぶ）で標準成体は五十センチメートル前後）個体の場合は正](#)

直、吃驚するほどである。時にジャンプを数匹で何度も行うこともある。私は南の海沿いで暮らしたことがないから、トビウオの飛翔を実際に見たことは一度もない。しかし、ボラのジャンピングは六年間いた富山県高岡市伏木の港内で、何度も見た。ただ、白秋の詩語の内、「白銀の挿櫛撓^{しろがね さくしたは}み」という部分は、ボラの体側下部の輝きよりも、トビウオの開いた胸鰭に相応しい、詩語から現実にはフィード・バックさせる点ではトビウオに軍配が拵^はがると思ふ（トビウオはまた南洋的な本詩集の持つ異国情緒幻想にも適合はする）。さても、これが間違いなくトビウオであるという断定は、南紀の現地の人にしか判らぬ。識者の御教授を乞うものである。」

夕

あたたかに海は笑ひぬ。
花あかき夕日の窓に、
手をのべて聴くとしもなく
薔薇摘み、ほのかに愁ふ。
いま聴くは市の遠音か、
波の音か、過ぎし昨日か、
はた、淡き今日のうれひか。

あたたかに海は笑ひぬ。
ふと思ふ、かかる夕日に
白銀の絹衣ゆるがせ、
いまあてに花摘みながら
かく愁ひ、かくや聴くらむ、
紅の南極星下
われを思ふ人のひとりも。

「やぶちゃん注…標題「夕」は「ゆふべ」と読んでおく。

「南極星」北極星に対応するような南極星（明るい星）は存在しない（石坂千春氏のサイ
ト内の「南天の星空　＼天の南極のさがし方」を参照されたい）。個人的には「紅の」
と形容したところで、天の南極の近くの本邦から辛うじて見えるカノープス（Canopus）
を想起する。或いは本邦からは見えない南十字星も近いから、白秋の文字通り、南蛮趣味
に色染めされた「邪宗門」の「サザン・クロス」と赤い「カノープス」の交点の幻しの星
とでもとっておこう。」

羅曼底の瞳

この少女はわが稚きロマンチックの幻象也、假にソフィヤと呼びまゐらす。

美しくしきソフィヤの君。

悲しくも戀しくも見え給ふわがわかきソフィヤの君。

なになれば日もすがら今日はかく瞑目り給ふ。

美しくしきソフィヤの君、

われ泣けば、朝な夕なに、

悲しくも靜かにも見ひらき給ふ青き華——少女の瞳。

ソフィヤの君。

「やぶちゃん注…「羅曼底」添え辞から「ロマンチック」と読んでいると読むべきであろう。

「ソフィヤ」女性名ソフィア (Sophia・Sofia・Sofij) は古代ギリシア語で「智慧」「叡智」を意味する「ソピアー」由来。

本篇を以ってパート「青い花」は終わっている。」

古 酒

「やぶちゃん注…[パート標題と石井柏亭の挿絵](#)。亀の形を模した吹き出しを持った手水鉢のようである。「古酒」は迷ったが、以下の辞を読むに、これのみ「ふるざけ」と読むのはおかしいと感じたので、「こしゅ」と読んでおく。」

こは邪宗門の古酒なり。近代白耳義の所謂フアンドシエクルの神経には柑桂酒の酸味に豎笛の音色を思ひ浮かべ梅酒に喇叭を嗅ぎ、甘くして辛き茴香酒にフルウトの鋭さをたづね、あるはまたウ井スキイをトロムボオンに、キウムメル、ブランデーを嚙喰として鼻音を交へたるオボイの響に配して、それぞれ匂強き味覺の合奏に耽溺すと云へど、こはさる驕りたる類にもあらず。黴くさき穴倉の隅、曇りたる色硝子の窓より洩れきたる外光の不可思議におぼめきながら煤びたるフラスコのひとつに湛ゆるは火酒か、阿刺吉か、又はかの紅毛の珍醪の酒か、えもわかねど、われはただ和蘭わたりのびいどろの深き古色をゆかしみて、かのわかき日のはじめに秘め置きにたる様々の夢と匂とに執するのみ。

「やぶちゃん注…以上は「古酒」のパート表題の裏、見開き右ページにごくポイント落ちで印刷された辞。

「白耳義」ベルギー（オランダ語：België／フランス語：Belgique）。

「フアンドシエクル」フランス語の「fin de siècle」（ファン・ダァ・シエクル）フランスなどで文芸方面に於いて退廃的傾向が強く現われた「世紀末」の意。

「柑桂酒」音で読めば「かんけいしゅ」であるが、前に徴すれば、白秋高い確率で「キュラソ」と読んでいる。「Curacao」（フランス語）でリキュールの一種。古くからオランダが主産地で、現在もオランダ自治領であるカリブ海のクラサオ（キュラソー）島特産のビター・オレンジの未熟果の果皮を乾燥させ、基酒であるラムに浸出したもの。フランス産キュラソーはブランデーを基酒とする。オレンジ色のオレンジ・キュラソーや無色のホワイト・キュラソーなどがあり、アルコールは約四十度と高く、カクテルによく用いられる。ブルー・キュラソーの色がよく知られるが、オレンジ・キュラソーを樽熟成させたものは褐色を帯びる。ここが出た二箇所のは、後者はそのままであるが、前者は、その色を想像の航海する帆船の色に転じたものである。

「喇叭」「らっぱ」（ラッパ）。

「茴香酒」そのまま読むなら、「ういきやいしゅ（ういきょうしゅ）」であるが、前に徴すれば、白秋高い確率で「アブサン」と読んでいる。「absinthe」（フランス語）。音写するなら「アブサアント」。古くからフランス・スイス・チェコ・スペインなどを中心にヨーロッパ各国でニガヨモギ（双子葉植物綱キク亜綱キク目キク科キク亜科ヨモギ属ニガヨモギ *Artemisia absinthium*）・アニス（英語 *anise*。双子葉植物綱セリ目セリ科シツバグサ属 *Anis* *Pimpinella anisum*）・ウイキョウ（セリ科ウイキョウ属ウイキョウ *Foeniculum vulgare*）

などを中心に複数のハーブやスパイスを主成分として作られてきたアルコール度の高い（四十〜八十九[㊤]）薬草系リキュールの一つ。元はギリシア語の「ヨモギ」を意味する「アプシンシオン」に由来する。

「キュムメル」キュンメル。「Kümmel」（ドイツ語）。リキュールの一種。名称はヒメウイキョウ（キャラウェイ：caraway）のドイツ語。キャラウェイの香りが強い無色の酒で、他にコリアンダー・アニス・レモンなどの香味を精製アルコールに配合してある。初め、バルト海岸のリガで造られ、オランダ・フランス・北ヨーロッパへと普及した。香りの強さやアルコール分・糖分の含有量によって三タイプがある。糖分十〜二十%、アルコール度数四十度。

「嚙喰」「りうりやう（りゅうりよう）」と読む。楽器・音声が冴えてよく響くさま。

「類」「たぐひ」と読んでおく。

「火酒」「くわしゆ（かしゆ）」であるが、「ウオツカ」或いは「ウオトカ」（ロシア語：vodka）と読みたい気はする。

「阿刺吉」「あらぎ」（オランダ語：Arak：アラック）で、オランダの火酒の一種。

「珍酛」「ちんた」（ポルトガル語：Vinho-tinto：ヴィーニョ・テイント：「Vinho」が「ワイン」、「tinto」は「赤」の意）で、ポルトガル産の赤葡萄酒の名。

「和蘭」オランダ。」

戀慕ながし

春ゆく市のゆふぐれ、
角なる地下室の玻璃透き
うつらふ色とにほひと
見惚れぬ。――潤るむ笛の音。

しばしは雲の縹と、
灯うつる路の濡色、
また行く素足しらしら、――
あかりぬ、笛の音色も。

古き醋甕と街衢の
物焼く薫いつしか
薄らひ饅ゆれ。――澄みゆく
紅き音色の摇曳。

このとき、玻璃も眞黒に
四輪車軋るはためき、
獣の温き肌の香
過ぎりぬ。――濁る夜の色。

ああ眼にまどふ音色の
はやも見わかぬかなしさ。
れんほ、れれつれ、消えぬる
戀慕ながしの一曲。

四十年二月

「やぶちゃん注」：「戀慕ながし」「戀慕流し」で、「鈴慕流し」の別名。これは、虚無僧が尺八曲「鈴慕」を吹きながら托鉢して歩くこと、或いは、その虚無僧や曲を言う。曲は [YouTube の yaoibo192 B-sides 氏の西村虚空氏の「鈴慕」](#) で聴くことが出来る。

「地下室」「cellar」（英語）・「cave」（フランス語：カークヴ…フランス語では「人工的な地下室」の意）で、語源は「地下の食料庫・酒庫」を意味するラテン語「cellarium」（ケラリウム）。老婆心乍ら、「角なる」は「地下室」ではなく、「玻璃」の窓を修飾する。

「縹」空の縹色。明度が高い薄青色のこと。「雲の」とすることで、その白さが暮れ行く空の最後の青さを引き立てている。

「れんほ、れれつれ、」曲調とその曲の別名から引き出したオノマトペイア。」

煙 草

黄^きのほてり、夢のすががき、
さはあまきうれひの華^{はな}よ。
ほに汝^なを嗅^かぎゆくこち、
QURACIO^{キュラソ}の酒もおよばじ。

いつはあれ、ものうき胸^{いたみ}に
痛^{いたみ}知るささやきながら、
わかき火のにほひにむせて
はばたきぬ、快^{けい}樂^くのうたは。

そのうたを誰かは解^とかむ。
あえかなる罪のまぼろし、――
濃^こき華^くの裾^{すそ}に沁^{しみ}みゆく
愛^{あい}欲^{よく}の千^ち々^ちのうれひを。

向日葵^{ひぐるま}の日に蒸^もすにほひ、
かはたれのかなしき怨^{かじ}言^ご
ゆるやかにくゆりぬ、いまも
絶^{たえ}間^まなき火のささやきに。

かくてわがころひねもす
傷^{いた}むともなくてくゆりぬ、
あな、あはれ、汝^なが香^かの小鳥
そらいろのもやのつばさに。

四十年九月

「やぶちゃん注」：「すががき」「清搔」。二度、既出既注であるが、再掲する。幾つかの意味があるが、原義を当てる。和琴^{わじん}の手法の一つで、全部の弦を一度に弾いて、手前から三番目又は四番目の弦の余韻だけを残すように、他の弦を左指で押さえるもの。

「QURACIO^{キュラソ}」この綴りは何語をもとにしているのか不審。リキユールの一種である

Curacao（フランス語）であることは疑問の余地はない。やはり複数回既出既注であるが、再掲しておく。古くからオランダが主産地で、現在もオランダ自治領であるカリブ海のクラサオ（キュラソー）島特産のビター・オレンジの未熟果の果皮を乾燥させ、基酒であるラムに浸出したもの。フランス産キュラソーはブランデーを基酒とする。オレンジ色のオ

レンジ・キュラソーや無色のホワイト・キュラソーなどがあり、アルコールは約四十度と高く、カクテルによく用いられる。ブルー・キュラソーの色がよく知られるが、オレンジ・キュラソーを樽熟成させたものは褐色を帯びる。

「かごと怨言」「かごと託言」。複数回既出既注。古語で「不平・愚痴・恨みごと」の意がある。」

舗 石

夏の夜あけのすずしき、
氷載せゆく車の
いづちともなき軌に、
潤みて消ゆる瓦斯の火。

海へか、路次ゆみだれて
大族なす鷺の鳥
鳴きつれ、霧のまがひに
わたりぬ——しらむ舗石。

人みえそめぬ。煙草の
ただよひ濕るたまゆら、
辻なる窓の繪硝子
あがりぬ——ひびく舗石。

見よ、女が髪の花めき
濡れこそかかれ、このとき
つと寄り、男、みだらの
接吻——にほふ舗石。

ほど經て窓を閉す音。
枝垂柳のしげみを、
赤き港の自動車
けたたましくも過ぎぬる。

ややあり、ほのに緋の帯、
水色うつり過ぐれば、
縋れぬ、はやも、からころ、
かろき木履のすががき。

驟雨前

長月の鎮守の
からうじてどよもしながら、
雨もよひ、夜もふけゆけば、
蒸しなやむ濃き雲のあし
をりをりに赤くただれて、
月あかり、稻妻すなる。

このあたり、だらだらの坂、
赤楊高き小學校の
柵盡きて、下は黍畑
こほろぎぞ闇に鳴くなる。
いづこそや女聲して
重たげに雨戸繰る音。

わかれ路、辻の濃霧は
馬やどののこるあかりに
幻燈のぼかしのごとも
蒸し青み、破れし土馬車
ふたつみつ泥にまみれて
ひそやかに影を落しぬ。

泥濘の物の汗ばみ
生ぬるく、重き空氣に
新しき木屋まじり、
馬槽の臭氣ふけつつ、
懶うげのさやぎはたはた
暑き夜のなやみを刻む。

足音す、生血の滴り
しとしととまへを人かげ、
おちうどか、はたや、六部か、
背に高き龕をになひ、
青き火の消えゆくごとく
呻きつつ闇にまぎれぬ。

生騒ぎ野をひとわたり。
とある枝に蟬は寝おびれ、
ちと嘆き、鳴きも落つれば
洞圓き橋臺のをち、
はつかにも断れし雲間に
月黄ばみ、病める笑ひす。

夜の汽車の重きとどろき。
凄まじき驟雨のまへを、
黒烟深き峽は
一面に血潮ながれて、
いま赤く人轢くけしき。
稻妻す。――嗚呼夜は一時。

三十九年九月

「やぶちゃん注」本篇はある意味で、本詩集の中では非常に珍しい、凄絶なシークエンスを波状的に畳み上げたホラー詩篇と称してよい、素敵に慄とする一篇である。

「赤楊」ブナ目カバノキ科ハンノキ属ハンノキ *Alnus japonica*。古名は「榛」。「楊」に似ているとは私は思わないが、「赤」は樹皮が紫褐色から暗灰褐色を呈すること、冬の十一月から四月頃に、葉に先だって単性花をつけるが、同種は雌雄同株で、雄花穂は枝先に一く五個つき、黒褐色の円柱形で、尾状に垂れ下がる。一方、雌花穂は楕円形で紅紫色を帯び、雄花穂の下部の葉腋に、同じく一く五個をつける（但し、花はあまり目立たない）こと、その樹皮や果実が昔から褐色の染料として使われていることから、腑に落ちる。湿気に非常に強く、湿原のような過湿地にあっても森林を形成する数少ない樹木である（以上はウィキの「ハンノキ」を参考にした）。

「六部」六十六部の略。「法華経」を六十六回書写して、一部ずつを日本の全六十六ヶ所の霊場（当初は各国の国分寺。但し、後は六十六国の内訳を知りたければ、ブログ「礫川全次のコラムと名言」の「日本六十六か国とその唐名・その2」を見られたい。この礫川全次氏には、三十代の初め、著作読者カードで詳細な賛同を書いたところ、直筆の葉書で「歴史民俗学研究会」への入会のお誘いを受けた。妻が手術を受けた頃で、結構、やんちやな連中の多い学校に勤めていたので、丁重に辞退したが、懐かしく思い出される）の霊場に納めて歩いた行脚僧・巡礼者。室町時代にはあったことが判っているので、そこらが始まりらしい。江戸時代には、白か鼠木綿の着物に、同色の股引・手甲・甲掛（草鞋を履く際には甲に紐を巻き付けるため、旅などで長時間履き続けると、甲や側面に擦過傷が生じる。主にそれを防ぐための履き物で、足袋によく似ているが、底がない。材料はやはり木綿で、強度を増すために刺子にすることが多かった）・脚絆をつけ、天蓋と仏像を入れた厨子を背負って、帯の前に出した小さな畳につけた鉦を鳴らし、鈴を振り、読経しながら、家々を回って米銭を報酬として乞うて回国して歩く単なる回国聖・遊行聖となつてし

まったが（男だけでなく女もいた）、この呼称は生き残った。中には江戸から出ない偽者の乞食があり、「仲間六部」と呼ばれた（以上は主に三谷一馬氏の「江戸商売図絵」（一九五五年中公文庫刊の「六十六部」の解説を参考にした）。一般には怪談落語の傑作「もう半分」で知られる、所謂「六部殺し」という怪奇譚群が頭に上りやすく、白秋自身、それを意識に昇らせるための確信犯の用語であるようにも私には見える。

「橋臺^{はしだい}」橋梁の両端を支える部分を指す。」

解 纜

解纜す、大船あまた。――
ここ肥前長崎港のただなかは
ながあめ 長雨ぞらの幽闇に海づら鈍み、
もんもん 悶々と櫓 けぶるたたずまひ、
くさり 鎖のむせび、帆のうなり、傳馬のさけび、
あるはまた阿蘭船なる黒奴が
き 氣も狂ほしき諸ごゑに、硝子切る音、
うち濕り――嗚呼午後七時――ひとしきり、落居ぬ騷擾。

解纜す、大船あまた。
あかあかと日暮の街に吐血して
らくじつあへ 落日喘ぐ寂寥に鐘鳴りわたり、
いんいん 陰々と、灰色重き曇日を
つ 死を告げ知らすせはしさに、響は絶えず
てんしゆ 天主より。――闇澹として二列、
かいはい 海波の鳴咽、赤の浮標、なかに黄ばめる
きやく 帆は瘡に――嗚呼午後七時――わなわなとはためく恐怖。

解纜す、大船あまた。――
黄髪に伴天連信徒蹣跚と
あんけつだう 闇穴道を磔負ひ驅られゆくごと
なま 生ぬるき悔の唸順々に、
くろけふ どうえう 流るる血しほ黒煙り動揺しつつ、
なんばん 印度、はた、南蠻、羅馬、目的はあれ、
しやうがい ただ生涯の船がかり、いづれは黄泉へ
うづい 消えゆくや、――嗚呼午後七時――鬱憂の心の海に。

三十九年七月

「やぶちゃん注」第一連最終行「うち濕り――嗚呼午後七時――ひとしきり、落居ぬ騷擾。」の後のダッシュ一字分はママ。他のダッシュに比しても明らかに前後に半角の空隙がある。一篇中の対句から見ても、単なる誤植の可能性が高く、後発の白秋自身の編集になる昭和三（一九二八）年アルス刊の「白秋詩集Ⅱ」（国立国会図書館デジタルコレクション）当該詩篇の画像）では通常の「――」になっているが、ここはあくまで見た目上の再現を優先した。「灰色」のルビはママ。
「蹣跚と」足もとがしっかりせず、よろめくさま。

「闇穴道」唐の玄宗の護持僧であつた一行阿闍梨が楊貴妃との仲を疑われ、果羅の国（未詳。「大唐西域記」巻一の覩貨邏国の略称か。重罪の者が流される国という。現在のアフガニスタン北部のアム河上流にあつたともされる）に送られた時に通つたとされる重罪の咎人を送るに通させた難道の名。「平家物語」の巻第二の「一行阿闍梨」には、『件の國には三つの道あり。「輪池道」とて御幸の道、「幽地道」とて雜人の通ふ道、「闇穴道」とて重科の者を遣はす道なり。この暗穴道と申すは、七日七夜、月日の光も見ずして行く所なり。しかれば、一行は重科の人とて、件の闇穴道へ遣はさる。冥々として人もなく、行歩に前途迷ひ、森々として、山、深し。ただ、澗谷に鳥の一聲ばかりにて、苔の濡れ衣、干しあへず。無實の罪によつて遠流の重科を被ぶることを、天道、哀れみ給ひて、九曜の形を現じつつ、一行阿闍梨を守り給ふ。ときに、一行、右の指を食ひ切りて、左の袖に九曜の形を寫されけり。和漢兩朝に、眞言の本尊たる「九曜の曼荼羅」、これなり』とある。「九曜」とは大きな丸の回りを八つの小さな丸が取り巻く九曜紋で、古代インド以来の九曜星信仰という日・月・火・水・木・金・土の七曜に羅睺（らご／らごう…もとは日月を蔽つて蝕を起こすとされた悪魔星で、仏教では阿修羅を当て、青牛に乗り、また犬の形象を持って描かれることもあつた）と計都（けつ…日月を両手に捧げ、青龍に乗つて憤怒の形相をした神像で表わされる。彗星のことともされる）の二星を加えたもので、仏教では天地四方を守護する仏神としての信仰と、妙見信仰の星辰崇拜との関わりから、土星を中央に、水と火、日と月、木と金、羅と計が対称に配され、仏教では羅睺を不動明王・土曜を聖觀音・水曜を弥勒・金曜を阿弥陀・日曜を千手觀音・火曜を虚空蔵、計都を釈迦、月曜を勢至、木曜を薬師とし、これを圖像化したものを「九曜曼陀羅」と称し、平安時代には眞言の本尊として崇拜された。特に道祖神的な信仰として好まれ、公家の牛車などの多くにこれが描かれたと伝えられる。但し、玄宗の護持僧一行が生きたのは貴妃が入内する前で、彼が流罪となつた事実も全くなく、これは後世にでっち上げられた俗説に過ぎない。

本詩篇は「二八四」ページ（右ページ）で終わり、見開きの左側には、石井白亭の挿絵「硝子吹く家」（本詩集最終ページにある挿絵等のリストにこの名で出る）がある。」

日ざかり

嗚呼、今し午砲のひびき
おほどかにとどろきわたり、
遠近の汽笛しばらく
饑うるごと呻きをはれば、
柳原熱き街衢は
また、もとの沈黙にかへる。

河岸なみは赤き煉瓦家。
牢獄めく工場の奥ゆ
印刷の響たまたま
薄鐵葉切る鋏の音と、
柩うつ槌と、鑢と、
懶うげにまじりきこえぬ。

片側の古衣屋つづき、
衣紋掛重き恐怖に
肺やみの咳洩れて、
饑えてゆく物のいきれに、
陰濕のほひつめたく
照り白み、人は默坐す。

ゆきかへり、やをら、電氣車
鉛だつ體をとどめて
ぐどぐどとかたみに語り、
鬱憂の唸重げに
また軋る、熱く垂れたる
ひた赤き満員の札。

恐ろしき沈黙ふたたび
酷熱の日ざしにただれ、
ぺんき塗褪めし看板
毒滴らし、河岸のあちこち
ちぢれ毛の瘦犬見えて
苦しげに肉を求食りぬ。

あぶら
油うく線路レエルの正面、
てつおも
鐵重き橋かまへの構に
雲ひとつまろがりいでて
くらくらかがやく眞晝まひる、
あせ
汗ながし、車曳ひきつつ
は
匍匐はふがごと撒水みづまき夫きたる。

三十九年九月

「やぶちゃん注…これはまさに映像にしてみたい強い欲求に駆られる。各連のアップの対
象とそのモニタージュ、視聴嗅覚の総てが否応なしに動員されるカット・バック―これ
は他の追従を許さぬ、一見、強烈なりアリズムを持ったシュールレアリスムの映像と言っ
てもよいように私は感ずる。」

軟 風

ゆるびぬ、潤^{うる}む罌粟^{けし}の火は
わかき瞳^めの濡^{ぬれ}いろ色^{いろ}に。
熟^み視^つめよ、ゆるる麥^{あわ}の穂^ほの
たゆらの色のつぶやきを。

たわやになびく黒^{くろ}髪^{かみ}の
君^{きみ}の水^み脈^をこそ身^みに翻^{あふ}れ。――
うかびぬ、消えぬ、火^しの雫^く
匂^{にお}の海^{うみ}のたゆたひに。

ふとしも歎^{なげ}く蝶^{てふ}のむれ
ころりんころと……頬^ほのほめき、
觸^ふる吐^{とい}息^きに縋^{もつ}るれば、
色^{いろ}も、にほひも、つぶやきも、

同じ音^ね色^{いろ}の揺^ゆ曳^びに
倦^{うん}じぬ、かくて君^{きみ}が目^めも。――
あはれ、皐^さ月^{つき}の軟^な風^{かぜ}に
ゆられてゆめむわがおもひ。

大 寺

大寺の庫裏くりのうしろは、
枇杷こがねあまた黄金たわわに、
六月そらの天そらいろ洩るる
路次ろじの隅、竿さかけわたし
皮交り、襦袢むつきを乾ほせり。
そのかけに穢むさき姿なりして
面子めんこうち、子らはたはぶれ、
裏店うらだなの洗流ながしの日かげ、
顔青やしき野師やしの女房ら
首いだし、煙草吸ひつつ、
鈍にぶき目に蓑いらかあふぎて、
はてもなう罵りかはす。
凋しをれたるものにほひは
溝板どふいたの臭氣くさみまじりに
蒸あつし暑く、いづこともなく。
赤黒き肉屋の旗は
屋根越に垂れて動かず。
はや十時、街まちの沈黙しじまを
しめやかに沈ちんの香しづみ、
しらじらと日は高まりぬ。

三十九年八月

「やぶちゃん注…「野師やし」は香具師やし・的屋てきやに同じ。盛り場や寺社の縁日・祭礼などに露店を出して商売をしたり、見世物などの興行をしたりする人。
「しめやかに沈ちんの香しづみ、」の「沈ちんの香」は、言わずもがなであるが、表面的にはその大寺院から漂ってくる抹香の香りを「ぢんのか」（実際の高級な沈香じんこうではない）と言ったもので、それよりも、遙かに感覚的な詩語としての装飾音として使用されていると私は思う。則ち、前行の午前十時の「まち」の「しじま」の持つ「チ」「シ」「ジ」音が、「しめやかにぢんのしづみ」の「シ」「ヂ」「シヅ」へと、さらに最終行の「しらじらと」の「シ」「ジ」音へと、それらの音が、水面の波紋のように不思議に広がって、ハレーションを起こしながら、ティルト・アップして太陽を捉え、画像がホワイト・アウトしてゆく仕掛けとなっているのだと思う。」

ひらめき

十月じふぐわつのとある夜よの空。
北國ほつくの郊野かうやの林檎
實みは赤く梢こすゑにのこれ、
はや、里くだものの果物採ひは
影絶えぬ、遠く灯ひつけて
ただ軋きしる耕作かうさくぐるま。
鬱憂うついうに海は鈍にばみて
闇澹あんたんと氷雨ひさめやすらし。
灰濁はいだめる暮雲ほうんのなた
血紅けっこうの火花ひばなひらめき
燦さんとして音おとなく消えぬ。
沈痛ちんつうの呻吟うめきこの時、
闇重ほうはつき夜色やしよくのなかに
蓬髮ほうはつの男蹠よろめ踏ふき
落涙らくなみす、蒼白あをしろき頬ほに。

三十九年八月

立 秋

憂愁いうしうのこれや野の國、
柑子かうじだつ灰色こがしのすゑ
夕汽車ゆふぎしやの遠音とほねもしづみ、
信號柱しんごうのちさき燈とも
淡々とみどりにうるむ。

ひとしきり、小野をのに細雲ほそぐも。
南瓜畑かぼちやばた北へ練りゆく
旗赤みぎやうき異形いけいの列れつは
戯おどろめけたる廣告ひろめの囃子はやし
賑にぎやかに遠くまぎれぬ。

うらがなし、落日いりひの黄金こがね
片岡かたおかの槐えんじゆにあかり、
鳴きしきる蝸かなかな、あはれ
誰葬たれはふるゆふべなるらむ。

「やぶちゃん注…」異形みぎやう」のルビはママ。
「片岡」のルビはママ。

三十九年八月

玻 璃 罎

うすぐらき 罎あなぐらのなか、
瓢ひさごなり狀、なにか湛たたへて、
十とをあまり圓まろうならべる
夢ゆめいろの薄うすら玻はり璃びん罎。

靜しづけさや、靄もやの古ふるびを
黃わうらふ蠟くゆは燻くりまどかに
照ありあかる。吐といき息きそこ、ここ、
哀あいらく樂らくのつめたきにほひ。

今いましこそ、ゆめの歡くわんらく樂らく
降ふりそそげ。生いのち命なみの脈なみは
ゆらぎ、かつ、壁かにちらほら
玻はり璃す透すきぬ、赤あかき火かの色。

三十九年八月

微笑

朧月か、眩ゆきばかり
髪むすび紅き帯して
あらはれぬ、春夜の納屋に
いそいそと、あはれ、女子。

あかあかと据ゑし蠟燭
薔薇潮す片頬にほてり、
すずろけば夜霧火のごと、
いづこにか林檎のあへぎ。

嗚呼愉樂、朱塗の樽の
差口抜き、酒つぐわかさ、
玻璃器に古酒の薫香
なみなみと……遠く人ごゑ。

やや暫時、瞳かがやき、
髪かしげ、微笑みながら
なに紅む、わかき女子。
母屋にまた、おこる歡語……

三十九年八月

「やぶちゃん注…本パート標題「古酒」は本詩に基づくものであらう。
「朧月」朧ろ月。
「差口」酒樽の栓。小学館「日本国語大辞典」に、「だぶそ」で見出しし、方言として、

最初に「樽の栓」を挙げて、用例として『だぶそを抜く』として、採取地を山口県大島・高知県を示し、「だぶし」として対馬を、「だぶす」として高知県を例示している。」

砂 道

日の眞晝、ひとり、懶く
眞白なる砂道を歩む。
市遠く赤き旗見ゆ、
風もなし。荒蕪地つづき、
廢れ立つ礎燃えて
烈々と煉瓦の火氣に
爛れたる果實のほひ
そことなく漂ひ濕る。

數百歩、娑婆に音なし。

ふと、空に苦熱のうなり、
見あぐれば、名しらぬ大樹
千萬の羽音に靡け、
鈴狀に熟るる火の粒
潤やかに甘き乳しぶく。
樂欲の渴たちまち
かのわかき接吻思ひ、
目ぞ暈む。

眞夏の原に
眞白なる砂道とぎれて
また續く恐怖の日なか、
寂として過ぎる人なし。

三十九年八月

「やぶちゃん注：最終連は文字列が下で並んで、視覚上でもコードとなっていることが判る。」

凋落

寂光土、はたや、墳塋、
夕暮の古き牧場は

なごやかに光黄ばみて
うつらちる楡の落葉、
そこ、かしこ。――暮秋の大日

あかあかと海に沈めば、
凋落の市に鐘鳴り、
絡繹と寺門をいづる
老若の力なき顔、

あるはみな青き旗垂れ
灰濁める水路の靄に
寂寞と繋る猪木舟、

店々の装飾まばらに、
甃石ちらほら転る
空ぐるま、寒き石橋。――

鈍き眼に頭もたげて
黄牛よ、汝はなにおもふ。

三十九年八月

「やぶちゃん注…『絡繹』と」人馬の往来などが、絶え間なく続くさま。

「猪木舟」現代仮名遣「ちよきぶね」の「ちよき」は「猪牙」と書くのが一般的。舳先が細長く尖って、猪の牙のように見える、屋根無しの小きな舟の名称。主に江戸市中の河川で盛んに使われたが、浅草山谷にあった吉原遊廓に通う遊客が、これをよく使ったため、「山谷舟」とも呼ばれた。長さが約三十尺（九・〇メートル）、幅四尺六寸（一・三九メートル）と細長く、また、船底を絞ってあるため、左右に揺れやすい欠点があるが、逆に櫓で漕ぐ際の推進力が十分に発揮され、速度が速く、狭い河川でも動き易く、特に小回りが利いた。参考にしたウィキの「猪牙舟」によれば、『語源は、明暦年間に押送船の船頭・長吉が考案した「長吉船」という名前に、形が猪の牙に似ていることをかけて猪牙と書くようになったという説』と、小早いことをチョロ・チョキということからつけられたとする説』の二つがある、とある。

「黄牛」「あめうし」とも呼んだ。飴色或いは黄色の毛色の牛で、古くは神聖にして立派な牛として貴ばれたというのが辞書の解説であるが、飴色の「あめ」とは「雨」で、大陸では雨乞いの際、天空の神に神聖な黄色の牛を生贄として捧げたことに由来するようである。」

晩 秋

神無月、下澆すゑの七日、
病ましげに落日いりひ黄ばみて
晩秋ばんしゅうの乾風からかせ光り、
百舌啼かず、木の葉沈まず、
空高き柿の上枝ほづえを
實はひとつ赤く落ちたり。
刹那せつな、野を北へ人靈ひとたま、
鉦かねうちぬ、遠く死の歌。
君死にき、かかる夕ゆふべに。

三十九年五月

「やぶちゃん注…一行目は、「下澆」は「かくわん（かかん）」（「げかん」とも読む）で「下澆」とも書き、毎月の二十日以後の当該月の下旬を指す。従って、これは十月二十七日を指示する。但し、これは最後に登場するかのように見える「かかる夕」べ「に」

「死」んだ「君」という具体的な特定の誰かを指すものではないようである（当時までの白秋の関係者にこの忌日を確認出来ない）。則ち、この導入の一行自体が「晩秋」という絵に最初の放たれた一筆であって、「神無月」（神のいない月）「下澆すゑ」（末世）「の七日」（終末期・仏教の地獄の審判の「七」を含む月の最後）という心理的に閉塞された条件が成形されたと言ってもよいのである。そうした観点から見ると、この一篇は一行読み進めるごとに驚くべき重層性で我々を晩秋の奈落に引きずり込んでゆくのである。」

あかき木の實

暗^{くら}きこころのあさあけに、
あかき木^この實^みぞほの見ゆる。
しかはあれども、晝はまた
君といふ日にわすれしか。
暗^{くら}きこころのゆふぐれに、
あかき木^この實^みぞほの見ゆる。

四十年十月

かへりみ

みかへりぬ、ふたたび、みたび、
暮^{をさな}れてゆく幼^{あゆみ}の歩
なに惜^{をし}みさしもたゆたふ。
あはれ、また、野^の邊^べの番^さ紅^{くら}花
はやあかきにほひに満つを。

四十年十二月

なわすれぐさ

面帕^{おもぎぬ}のほひに洩^もれて、
その眸^{ひとみ}すすり泣くとも、――
空^{そら}いろに透^すきて、葉かげに
けふも咲く、なわすれの花。

四十一年五月

「やぶちゃん注」・「なわすれぐさ」シソ目ムラサキ科ワスレナグサ属 *Myosotis* の総称。和名「勿忘草」「忘れな草」はシンワスレナグサ（真勿忘草）*Myosotis scorpioides* に与えられているものの、園芸界で「ワスレナグサ」として流通している種は、ノハラワスレナグサ *Myosotis alpestris*・エゾムラサキ *Myosotis sylvatica*、或いはそれらの種間交配種である。「面帕^{おもぎぬ}」「顔面^{おもて}」とも書き、通常は「かほかけ（かおかけ）」と読む。婦人や貴人が頭からかける薄い絹などの布。婦人が帽子に取り付けて顔を覆う網や紗^{しゃ}の布で、「ベール」（veil）のいふ。」

わかき日の夢

水^{みづ}透^すける玻^は璃^りのうつはに、
果^みのひとつみづけるごとく、
わが夢は燃^もえてひそみぬ。
ひややかに、きよく、かなしく。

四十一年五月

よひやみ

うらわかきうたびとのきみ、
よひやみのうれひきみにも
ほの沁むや、青みやつれて
木のもとに、みればをみなも。
な怨みそ。われはもくせい、
ほのかなる花のさだめに、
目^ま見^みしらみ、うすらなやめば
あまき香^かもつゆにしめりぬ。
さあれ、きみ、こひのうれひは
よひのくち、それもひととき、
かなしみてあらばありなむ、
われもまた。――月はのぼれり。

三十九年四月

一 瞥

大月は赤くのぼれり。

あら、青む最愛びとよ。

へだてなき戀の怨言は

見るが間に朽ちてくだけぬ。

こは人か、

何らの色ぞ、

凋落の鵠か、鵠か。

後より、

冷笑す、あはれ、一瞥。

我、こころ君を殺しき。

三十九年七月

「やぶちゃん注…最終行は私は「こころ」の後に読点を打つか、字空けを施したいくはなる。

「鵠」白鳥の古名。カモ目カモ科 Anserinae 亜科に属する広義のハクチョウ類を指す。同亜科はハクチョウ属 *Cygnus*・カモハクチョウ属 *Coscoroba* の二属に分かれ、ハクチョウ属にコブハクチョウ *Cygnus olor*・コクチョウ *Cygnus atratus* (和名の通り、ハクチョウ属であるが、成長するにつれて黒くなる)・クロエリハクチョウ *Cygnus melancoryphus*・オオハクチョウ *Cygnus cygnus*・ナキハクチョウ *Cygnus buccinator*・コハクチョウ *Cygnus columbianus* が、カモハクチョウ属にカモハクチョウ *Coscoroba coscoroba* がいるが、本来、古来から本邦に自然に飛来して来る種はオオハクチョウ *Cygnus cygnus* とコハクチョウ *Cygnus columbianus* の二種のみであった。博物誌は私の「[和漢三才圖會第四十一 水禽類](#) [天鷲（はくちやう）（ハクチョウ）](#)」を見られたい。

「鵠」ツル目クイナ科 *Gallinula* 属バン *Gallinula chloropus*。成鳥は黒い羽毛に蔽われるが、背中 of 羽毛は多少、緑色を帯びる。上記最後のそれからは、成鳥の場合はバンと二種を見間違えることはあり得ないが、オオハクチョウもコハクチョウも幼鳥は灰色を帯びるから、実際のそれらを遠目で見たならば（ここは実際の鳥ではないのだが）、バンと識別出来ない可能性はないとは言えない。博物誌は私の『[和漢三才圖會第四十一 水禽類](#) [鵠](#)（バン） 附 志賀直哉「鵠」梗概』を見られたい。」

旅情

——さすらへるミラノひとつのうた。

零落の宿泊はやすし。
海ちかき下層の小屋屋は、
ものとなき鹹の汚れに、
煤けつつ匂ふ壁紙。
廣重の名をも思出づ。

ほどこかき庖厨のほてり、
繪草子の匂にまじり
物あぶる騒ぎこもごも、
焼酎のするどき吐息
針のごと肌刺す夕。

ながむれば葉柳つつぎ、
色硝子濡るる巷を、
横濱の子が智慧のはやさよ、
支那料理、よひの灯影に
みだらうたあはれに歌ふ。

ややありて月はのぼりぬ、
清らなる出窓のしたを
からころと軋む櫓の音。
鐵格子ひとすがりて
黄金髪わかきをおもふ。

數おほき罪に古りぬる
初戀のうらはかなさは
かかる夜の黒き波間を
舟かせぎ、わたりさすらふ
わかうどが歌にこそきけ。

色ふかき、ミラノのそらは
日本のそれと似たれど、
ここにして摘むによしなき
素馨、海のあなたに
接吻のかなしきもあり。

國を去り、昨にわかれて
逃れ來し身にはあれども、
なほ遠く君をしぬべば、
ほうほう……と笛はうるみて、
いづらへか、黒船きゆる。

廊下ゆく重き足音。
みかへれば暗きひと間に
残る火は血のごと赤く、
腐れたる林檎のほひ、
そことなく涙をさそふ。

三十九年九月

「やぶぢゃん注」^{ジェルソミノ}「素馨」イタリア語「gelsonino」(ジェルソミノ)で、ジャスミン
(英語:jasmine)´ シン目モクセイ科 *Jasminaceae* 連ソケイ属 *Jasminum* (タイプ種はソケイ
Jasminum officinale) の香料を採るジャスミンの総称。ソケイ属は世界で約三百種がある。
これは思うに、森鷗外のアンドルセンの翻訳「即興詩人」(イタリアを舞台とした恋物
語。明治二十五年から三十四年(一八九二年〜一九〇一年)の約十をかけてドイツ語版か
ら重訳して断続的に雑誌『しがらみ草紙』などに発表、初刊版「即興詩人」は明治三五
(一九〇二)年に春陽堂から刊行された)の中の「花祭」のパートで、カンツォーネを歌
うシーンの歌詞の訳中に(岩波文庫版を持っているはずなのだが、見当たらないので、国立
国会図書館デジタルコレクションの大正三(一九一四)春陽堂刊の画像(ここ)を視認し
た)。

*

„—Ah rossi, rossi fiori,
Un mazzo di violi!

Un gelsomin d'amore—“

あはれ、赤き、赤き花よ。

^{すみれ} 菫の束よ。

戀のしるしの素馨「ジェルソミノ」の花よ。

この時あやしく咳枯しはがれたる聲にて、歌ひつぐ人あり。

„—Per dar al mio bene!“

(摘みて取らせむその人に。)

*

とあるのをインスパイアしたものと推測する。」

柑 子

蕭やかにこの日も暮れぬ、北國の古き旅籠屋。
物焙ぶる爐のほとり頸垂れ愁ひしづめば
漂浪の暗き山川そこはかと。――さあれ、密かに
物ゆかし、わかき匂のいづこにか濡れてすすろぐ。

女あるじは柴折り燻べ、自在鍵低くすべらし、
鍋かけぬ。赤ら顔して旅語る商人ふたり。
傍より、笑みて靜かに籠なる木の實撰りつつ、
家の子は卓にならべぬ。そのなかに柑子の匂。

ああ、柑子、黄金の熱味嗅ぎつつも思ひぞいづる。
晩秋の空ゆく黄雲、畑のいろ、見る眼のどかに
夕風の中帆あぐる蜜柑ぶね、暮れて入る汽笛。
温かき南の島の幼子が夢のかずかず。

また思ふ、柑子の店の愛想よき肥満たる主婦、
あるはまた顔もかなしき亭主の流す新内、
暮れゆけば紅き夜の灯に蒸し薫ゆる物の香のなか、
夕餉時、街に入り来る旅人がわかき歩みを。

さては、われ、岡の木かげに夢心地、在りし靜けさ
忍ばれぬ。目籠擁へ、黄金摘み、袖もちらほら
鳥のごと歌ひさまよふ君ききて泣きにし日をも。――
ああ、耳に鈴の清しき、鳴りひびく沈黙の聲音。

柴はまた音して爆ぜぬ、燃えあがる炎のわかさ。
ふと見れば、鍋の湯けぶり照り白らむ薫のなかに、
箸とりて笑らぐ赤ら頬、夕餉盛る主婦、家の子、
皆、古き喜劇のなかの姿なり。涙ながるる。

三十九年五月

「やぶちゃん注…「籠」同じ読みで「筐」、或いは「堅間」「勝間」などと表記・呼称し、
目を細かく編んだ竹籠を言う。後の「目籠」も目の粗い竹籠のこと。

「卓」「シヨク」は「卓」の唐音。本来は仏前に置いて香華を供える机で茶の湯にも用い
るが、ここは無論、普通の食卓の意。

「新内」新内節。浄瑠璃の流派の一つ。延享二（一七四五）年に宮古路加賀太夫が豊後節から脱退し、富士松薩摩を名のったのが遠祖。この富士松節から出た鶴賀若狭掾が鶴賀節を立て、幕府御家人であった初代鶴賀新内（延享四（一七四七）年〱文化七（一八一〇）年を継いだ二世鶴賀新内が文化年間（一八〇四年〱一八一八年）に人気を博して以来、新内節と呼ぶようになった。早くから劇場を離れ、座敷浄瑠璃として発展、花街などの門付芸「新内流し」で発展して行った。哀調のある節にのせて哀しい女性の人生を歌いあげて、遊里の女たちに大いに受け、隆盛を極めた。ここはその夫婦の「流し」の情景。二人一組で、二挺の三味線を弾き合わせながら街頭を歩き、客の求めに応じて新内節を語って聞かせた。」

内 陣

ほのかなる香爐のくゆり、
日のにほひ、燈明のかげ、――

文月のゆふべ、蒸し薫る三十三間堂の奥
空色しづむ内陣の闇ほのぐらき静寂に、
千一體の觀世音かさなり立たす香の古び
いと蕭やかに後背のにぶき列ぞ白みたる。

いづちとも、いつとも知らに、
かすかなる素足のしめり。

そと軋むゆめのゆかいた
なよらかに、はた、うすらかに。

ほのめくは髪のならびか、
衣の香か、えこそわかたね。

女子の片頬のしらみ
忍びかの息の香ぞする。

舞ごろも近づくなべに、
うつらかにあかる薄闇。

初戀の燃ゆるためいき、
帯の色、身内のほてり。

だらりの姿おぼろかになまめき薫ゆる舞姫の
ほのかに今したたずめば、本尊佛のうすあかり
静かなること水のごと沈みて匂ふ香のそらに、
仰ぐともなき目見のゆめ、やはらに涙さそふ時。

裳より鴿か立ちけむ、
はたはたとゆくりなき音に。

ふとゆれぬ、長の振袖

かろき緋^ひのひるがへりにぞ、

ほのかなる香^{かう}爐^ろのくゆり、
日のにほひ、燈^み明^{あかし}のかけ、――

もろもろの光はもつれ、
あな、しばし、闇にちらぼふ。

四十年七月

懶 き 島

明けぬれどものうし。温き土の香を
軟風ゆたにただ懈く揺り吹くなべに、
あかがねの淫の夢ゆのろのろと
寢恍れて醒むるさざめ言、起つものうし。

眺むれどものうし、のぼる日のかげも、
大海原の空燃えて、今日も緩ゆる
縦にのみ湧くなる雲の火のはしら
重げに色もかはらねば見るものうし。

行きぬれどものうし、波ののたくりも、
懈たき砂もわが惱ものうければぞ、
信天翁もそろもそろの吐息して
終日うたふ挽歌きくものうし。

寢そべれどものうし、圓に屯して
正覺坊の痴ごち、日を嗅ぎながら
女らとなすこともなきたはれごと、
かくて抱けど、飽きぬれば吸ふものうし。

貪れどものうし、椰子の實の酒も、
あか裸なる身の倦るさ、酌めども、あはれ、
懶怠の心の欲のものうげさ。
遠雷のとどろきも晝はものうし。

暮れぬれどものうし、甘き髪^かの香も、
盆なし、あるは木を擦りて火ともすわざも。
空腹の心は暗きあなぐらに
蝮のうねりのほひなし、入れどものうし。

ああ、なべてものうし、夜はくらやみの
濁れる空に、熟みつはり落つる實のごと
流星血を引き消ゆるなやましき。
一人ならねど、とろにとろ、寢れどものうし。

「やぶちゃん注」・「正覺坊」・「大酒呑み」を言う隠語。カメ目ウミガメ科アオウミガメ亜科アオウミガメ属アオウミガメ *Chelonia mydas* の異名でもあり、俗に「青海龜」は、酒が好きで、与えると、多いに飲むことから出るなどと言われるが、元は酒好きの破戒僧を揶揄する語から転じたもののように思われる。

「益」この読みは当て字。「益」には「エキ・ヤク」しかない。類似語意を持つ「要」の字音の歴史的仮名遣「エウ」を当てたものであるう。

「流星」小学館「日本国語大辞典」は「すばるぼし」に昇、則ち、プレアデス星団と同義として、まさに本詩篇のこの詩句を使用例として引いているが、この用例指示は誤りである。「濁れる空に」「血を引き消ゆるなやましき」を持つ「流星」であるからには、これは固定した星群ではなく、流れ星であることは明白である。「すばる」は「集まって一つになる」の意の「統^すばる」の意で、「星団」の意として腑に落ちるが、白秋はその派生語である「統べる」(多くの物を一つに纏める)の「すべる」を「滑^{すべ}る・^{すべ}る」の意に恣意的に転訛して使用したものと私は採る。プレアデス星団を貫く流星などという牽強附会(空は濁っているのだ)には私は、到底、組み出来ない。」

灰色の壁

灰色の暗き壁、見るはただ
恐ろしき一面の壁の色。
臘月の十九日、
丑滿の夜の館。
龕めく唐銅の櫃の上、
燭青うまじろがずひとつ照る。
時にわれ、朦朧と黒衣して
天鵝絨のものを鈍き床に立ち、
ひたと身は鐵の屑
磁石にか吸はれよる。
足はいま釘つけに痺れ、かの
黄泉の扉はまのあたり額を壓す。

灰色の暗き壁、見るはただ
恐ろしき一面の壁の色。
暗澹と燐の火し
奈落へか虚する。
表面ただ古地圖に似て煤け、
縦横にかず知れず走る罅
青やかに火光吸ひ、じめじめと
陰濕の汗うるみ冷ゆる時、
鐵の氣はうしろより
さかしまに髪を梳く。
はと竦む節々の凍る音。
生きたるは黒漆の瞳のみ。

灰色の暗き壁、見るはただ
恐ろしき一面の壁の色。
熟視む、いま、あるかなき
一點の血の雫。
朱の鈍み星のごと潤味帯び
光る。聞く、この暗き壁ぶかに
くれなみの鼓うつ心の臓
刻々にあきらかに熱り來れ。
血けぶり。刹那と

かすかなる人の息。

みるがまに罅はみなつやつやと
金髪きんぱつの千筋ちすぢなし、さと亂みだる。

灰色の暗き壁、見るはただ
恐ろしき一面いちめんの壁の色。

なほ熟視みむ。……髣髴はうふつと

浮びいづ、女の頬ほ

大理石なめいしのごと腐れ、仰向あふくや

鼻冷えてほの笑わらふちひさき齒

しらしらと薄玻璃うすはりの音を立つる。

眼をひらく。絶望ぜつぼうのくるしみに

手はかたく十字じふじく拱み、

みだらなる媚こびの色

きとばかり。燭しよくの火の青み射し、

銀色ぎんいろの夜の絹衣すずしひるがへる。

灰色の暗き壁、見るはただ
恐ろしき一面いちめんの壁の色。

『彼』とわが憎惡ぞうを心

むらむらとうちふるふ。

一齊いつせいに冷血れいけつのわななきは

釘つけの身を逆さかにゑぐり刺す。

ぎくど手は音刻おとときみ、節ふしごとに

機械からくりのごと動く。いま怪し、

おぼえあるくらがりに

落ちちれる埴はにと饅こて。

つと取るや、ひとつ當あて、左ひだりより

額ぬかをまづひしひしと塗りつぶす。

灰色の暗き壁、見るはただ

恐ろしき一面いちめんの壁の色。

朱しゆのごとき怨念をんねんは

燃え、われを凍らしむ。

刹那せつな、かの驕りたる眼鼻めはなども

胸かけて、生ぬるき埴はにの色

ひと息に饅こての手に葬はうむられ

生きながら苦しむか、ひくひくと

うち皺む壁の罅、
今、暗き他界より

凄きまで面變り、人と世を
呪ふにか、すすりなき、うめきこそ。

灰色の暗き壁、見るはただ
恐ろしき一面の壁の色。
悪業の終りたる

時に、ふとわれの手は
物握るかたちして見出さる。
ながむれば埴あらず、鏝もなし。

ただ暗き壁の面冷々と、
うは濕り、一點の血ぞ光る。

前の世の戀か、なほ
骨髓に沁みわたる
この怨恨、この呪咀、まざまざと
人ひとり幻影に殺したる。

灰色の暗き壁、見るはただ
恐ろしき一面の壁の色。

臘月の十九日、
丑滿の夜の館。

龕めく唐銅の櫃の上、
燭青うまじろがずひとつ照る。

時になほ、朦朧と黒衣して
天鵝絨のものにぶき床に立ち、
わなわなと壁熟視め、

ひとり、また戦慄す。
掌ひらけば汗はあな生なまと
さながらに人間の血のにほひ。

三十九年十二月

「やぶちゃん注…「屑」のルビはママ。

「臘月」陰曆十二月の異称。中国で、冬至（陰曆十一月中）の後の第三の戌の日に、獺の獲物の獣肉を供えて先祖百神を祀る祭りを行ったことによる。現行ではその旧年と新年を「繋ぎ合わせる月」の原義と説明されることが多い。」

失くしつる

失（な）くしつる。

さはあるべくもおもはれね。

またある日には、

探（さが）しなば、なほあるごともおもはるる。

色青き眞珠（しんじゆ）のたまよ。

四十一年七月

畢

「やぶちゃん注」以下、「目次」であるが、ページ数とリーダーは必要性がないので省略した。[「国文学研究資料館電子資料館」の「近代文献情報データベース」の「ポータル近代書誌・近代画像データベース」の原本（実物）画像を見て戴きたいが、各詩篇標題は原本では有意な字下げが行われている。それに見かけ上は合うようにしたつもりである。但し、詩篇標題の均等割付は無視した。」](#)

邪宗門目次

魔 睡

邪宗門秘曲

室内庭園

陰影の瞳

赤き僧正

WHISKY

天鵝絨のにほひ

濃霧

赤き花の魔睡

麥の香

曇日

秋の瞳

空に真赤な

秋のをはり

十月の顔

接吻の時

濁江の空

魔國のたそがれ

蜜の室

酒と煙草に

鈴の音

夢の奥

窓

昨日と今日と

わかき日

朱の伴奏

謀叛

こほろぎ

序樂

納曾利

ほのかにひとつ

耽溺

といき

黒船

地平

ふえのね

下枝のゆらぎ

雨の日ぐらし

狂人の音楽

風のあと

月の出

外光と印象

冷めがたの印象

赤子

暮春

噴水の印象

顔の印象

A 精舎

B 狂へる街

C 醋の甕

D 沈丁花

E 不調子

F 赤き恐怖

盲ひし沼

青き光

樅のふたもと

夕日のにほひ

浴室

入日の壁

狂へる椿

吊橋のにほひ

硝子切るひと

悪の窓

一 狂念

二 疲れ

三 薄暮の負傷

四 象のにほひ

五 悪のそびら

六 薄暮の印象

七 うめき

蟻

華のかげ

幽閉

鉛の室

眞晝

天草雅歌

天草雅歌

角を吹け

ほのかなる蠟の火に

臚を抜けよ

汝にささぐ

ただ秘めよ

さならずば

嗅煙艸

鵠

日ごとに

黄金向日葵

一炷

青き花

青き花

君

桑名

朝

紅玉

海邊の墓

渚の薔薇

紐

晝

夕

羅曼底の瞳

古酒

戀慕ながし

煙草

舗石

驟雨前

解纜

日ざかり
軟風
大寺
ひらめき
立秋
玻璃鑊
微笑
砂道
凋落
晩秋
あかき木の實
かへりみ
なわすれぐさ
わかき日の夢
よひやみ
一瞥
旅情
柑子
内陣
懶き島
灰色の壁
失くしつる

邪宗門目次終

装幀……………	石井柏亭
「エツキスリプリス」及「幼児磔殺」……………	石井柏亭
挿畫『澆季』……………	石井柏亭
挿畫『眞晝』……………	山本 鼎
私信『四十一年七月廿一日便』……………	太田正雄
挿畫『硝子吹く家』……………	石井柏亭
扉繪及欄畫十葉……………	石井柏亭
彫版……………	山本 鼎

「やぶちゃん注」以上の装幀その他のリストは字のポイントが変えてある。なるべく似たような感じになるようにはした。「国文学研究資料館電子資料館」の「近代文献情報データベース」の「ポータル近代書誌・近代画像データベース」の[原本（実物）画像の以上のページ](#)をリンクさせておく。なお、リンク画像の左下にある「一三」とは、先の「目次」に始まるページの通し番号である（右ページは白紙でノンブル表示がないが、十二ページ目として数えてはいる）。

「装幀」はママ。「装幀」の誤植。リーダ数はブラウザでの不具合を考えて再現していない。例えば、最初の「装幀」の後には実際には六十六のリーダが打たれており、下部（本電子化では右端部分）が綺麗に揃っている。技術上、それをやると微妙に実物と異なってしまうので、右インデントを施していない。

以下、奥附。上記の[リンク先](#)で示すので、字配・ポイントは適当に見た目に合わせただけである。「不許複製」は実際には飾り罫で囲われている。」

明治四十二年三月 十日印刷
明治四十二年三月十五日發行

邪宗門奥附

定価壹圓

著 者	北 原 白 秋
不 許	東京麹町區飯田町六丁目廿四番地
發 行 者	西 本 波 太
東京小石川區久堅町百八番地	
複 製	印刷者 山 田 英 二
東京小石川區久堅町百八番地	
印刷所	博文館 印刷所
東京麹町區飯田町六丁目廿四番地	
發 行 所	易 風 社
振替 一二〇三四番	

【藪野直史注 北原白秋「邪宗門」正規表現版 完】